

---

# SAO ~冷厳なる槍使い~

ネシンバラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

SAO ～冷厳なる槍使い～

### 【Nコード】

N2262W

### 【作者名】

ネシンバラ

### 【あらすじ】

幼き頃より祖父に古流槍術を叩き込まれてきた東雲蓮夜は、ベータテスターだという友人に誘われて、SAOを始めてみることにした。公式サービス開始当日、急な用事が出来た友人に先んじて口グインした蓮夜は、直後あの事件に巻き込まれることになる。後にSAO事件と呼ばれるあのデスゲームに……。経験者である友人がいないため右も左も分からない蓮夜は、自分に出来ることをしようと、己の常人離れた身体操作能力と洞察力、得意の槍術を駆使してアインクラッド攻略を目指そうとする。しかし、そんな彼にはこ

のSAOの世界では致命的とも言える欠点があった。そう、彼は

《ソードスキル》が苦手だったのだ。

この作品は、川原礫先生の『SAO』の二次創作作品です。文庫版だけを見て書いたので、分らないところはほぼオリジナルの設定で賄っています。主人公は原作メンバーとはあまり接点がないので、絡んでくるのは攻略終盤くらいですね。そういうのが嫌な方はご遠慮下さい。

作者未熟者なので、文章的な指摘がありましたらお願い致します。

## 1・運命の日（前書き）

この作品では、多分にオリジナル要素を含んでいます。

<sup>アバター</sup>仮想体での動き、仮想世界の解釈、NPC店での売買のやり取り、スキルの種類、スキル熟練度、レベルなど、基本的に文庫の設定を参考にしていますが、細かなところは作者が想像して付け足します。

## 1・運命の日

二〇二二年、十一月六日、日曜日の午後五時半頃。

その《運命の日》に、俺はその場所に立っていた。

叫ぶでもなく、泣くでもなく、啞然とするでもなく、ただ冷静にその《声》を聴いていた。

『プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ』

俺の遙か上空に、真紅のフード付きローブを纏った、顔の無い巨大な人影らしきものが見える。まるで透明な巨人が　いや、闇で出来た巨人がローブを纏っているような、そんな外見。

《声》は、上空から響いてくるように聴こえた。ともすれば、その巨人が発しているように聴こえる。

『私の名前は茅場晶彦。今やこの世界をコントロールできる唯一の人間だ』

《茅場晶彦》と名乗ったその声。

その名前には聞き覚えがある。学校の友人がその人間の素晴らしさを延々と語っていたのは、まだ記憶に新しい。確か、VRMMO（仮想大規模オンラインゲーム）を現実のものとした《ナーヴギア》の基礎設計者であり、今俺がログインしている《S A O》ソードアート・オンラインの開発ディレクター兼ゲームデザイナーにして、物理量子学者でもあるのだと聞いた。

所謂、本物の天才というやつなのだそうだ。この《S A O》を作った側という意味なら、先ほどの『私の世界』という発言にも納得できる。

しかし彼の言う『唯一』という言葉が引つかかる。彼が言っているのは、自分は、自分だけがこの世界の管理できる《この世界の神》であると言っているように聞こえる。

だが俺には、上空に映し出された顔の無い巨人からは、《神》というよりは《死神》といった印象を受けた。

そして その印象はある意味正しかった。

『プレイヤー諸君は、すでにメインメニューからログアウトボタンが消滅していることに気付いていると思う。しかしゲームの不具合では無い。繰り返し。これは不具合ではなく《ソードアート・オンライン》本来の仕様である』

ログアウトボタンの消失。

それは三十分ほど前から周りで騒がれていた件だ。それが無ければ、プレイヤーは自分の意思では、この仮想世界から現実の肉体に戻ることは出来ないという。他に戻る手段といえば、現実世界の誰かにナーヴギアを外して貰う、もしくは電源を切って停止させて貰うくらいだと友人は言っていた。

しかし

『……また、外部の人間による、ナーヴギアの停止あるいは解除も有り得ない。もしそれが試みられた場合』

冷静な、いや事務的な声が、無情にもそれを告げた。

『 ナーヴギアの信号素子が発する高出力マイクロウェーブが、諸君の脳を破壊し、生命活動を停止させる』

つまり、死ぬ。

そう、茅場晶彦は言ったのだ。

機械に詳しくない俺には、それが本当のことなのか、本当にありえることなのかは解らないが、茅場晶彦の口調が、この周囲を包んでいる雰囲気、その言葉の信憑性を強めているように感じた。

『より具体的には、十分間の外部電源切断、二時間のネットワーク切断、ナーヴギア本体のロック解除または分解または破壊の試み以上のいずれかの条件によって脳破壊シークエンスが実行される。この条件は、すでに外部世界では当局およびマスコミを通して告知されている。ちなみに現時点で、プレイヤーの家族友人等が警告を無視してナーヴギアの強制除装を試みた例が少なからずあり、その結果』

茅場は続ける。

だが、その続きはいやでも想像できた。

『残念ながら、すでに二百十三名のプレイヤーが、アインクラッド及び現実世界からも永久退場している』

実際に、すでに死んだ人間がいる。

その発言には、誰だって無視はできないだろう。この場にいる者なら尚更だ。何故なら、次は自分かもしれないのだから。

『諸君が、向こう側に置いてきた肉体の心配をする必要は無い。現在、あらゆるテレビ、ラジオ、ネットメディアはこの状況を、多数の死者が出ていることも含め、繰り返し報道している。諸君のナーヴギアが強引に除装される危険はすでに低くなっていると言ってよかるう。今後、諸君の現実の体は、ナーヴギアを装着したまま二時間の回線切断猶予時間のうちに病院その他の施設へと搬送され、厳重な介護体制のもとに置かれるはずだ。諸君には、安心して……ゲーム攻略に励んでほしい』

現実 外部世界と茅場を言っているが の肉体は介護体制を呼びかけているという。しかし、それを無視して親族が無理矢理ナーヴギアを外してしまう可能性もくはない。その場合は、ここにいる者は誰も何も出来ずに……ということだろう。

俺の場合は……あいつか。

同級生にして唯一、友人と言えるだろう男、二木 ふたき 健太 けんた。

現実の俺は、二木の部屋のナーヴギアでSAOにログインしている。もし茅場の言うことが真実だとすると、二木が茅場の告知を知ってパニックを起こして俺のナーヴギアを外してしまえば、俺は死ぬということになる。

『しかし、十分に留意してもらいたい。諸君にとって、《ソードアート・オンライン》は、すでにただのゲームではない。もう一つの現実と言うべき存在だ。……今後、ゲームにおいて、あらゆる蘇生手段は機能しない。ヒットポイントがゼロになった瞬間、諸君らのアバターは永久に消滅し、同時に、諸君らの脳は、ナーヴギアによって破壊される』

俺の周囲の所々から息を呑む音が聞こえてきた。茅場は、それを聞き流しているかのように尚も続けて言う。

『諸君がこのゲームから解放される条件は、たった一つ。先に述べたとおり、アインクラッド最上部、第百層まで辿り着き、そこに待つ最終ボスを倒してゲームをクリアすればよい。その瞬間、生き残ったプレイヤー全員が安全にログアウトされることを保証しよう』

なるほど……。

つまり、俺たちに本当に《この世界》で生きると、そう言っているのか。

自由の為に、実際の命を懸けて戦う。  
確かにそれは、ゲームという仮想の世界で、本当の意味で生きて  
いると言えるのだろうか。

『それでは最後に、諸君にとってこの世界が唯一の現実であるとい  
う証拠を見せよう。諸君のアイテムストレージに、私からのプレゼ  
ントが用意してある。確認してくれ給え』

その言葉に従い、俺は右手の人差し指と中指を揃えて軽く振り下  
ろす。その動作で、鈴のような音と共に透けた紫色のシステムメニ  
ューウィンドウが現れた。アイテムストレージのボタンに触れて、  
所持アイテムを確認する。そして、いつの間にか追加されていたア  
イテムを見つけ、おもむろにオブジェクト化させた。

アイテム《手鏡》。

それを手に出現させた数秒後、俺を いや俺を含めたこの場に  
いる全員が、一瞬だけ白い光の柱に包まれた。その光はすぐに収ま  
り、直後、俺はある予想をしながら右手に持った《手鏡》を見た。

やはり、か。

そこに映っていたのは、二木と一緒に作った仮想体アバターの顔ではなか  
った。

十五歳の少年の顔、しかし常に無表情なので同学年よりも少しだ  
け年上に見える。

現実での俺。東雲しのめ 蓮夜れんや、そのものだった。

ことの始まりは、数ヶ月前。

学校での昼休み、いつも通りに自分の席で、自分で作った弁当を  
広げていると、

「なあ、なあ、東雲、なあ東雲了」

ウチの中学校の制服である学ランを着崩した、にやけ顔のやや痩せぎすな黒縁眼鏡の男が近づいてきた。

眼鏡以外、特に特徴も無い顔をしている、黒髪の少年。

彼の名は、二木健太。少し前、クラスメイト数人に虐められているところを成り行きで助けたのがきっかけで話すようになった。実際には一方的に話しかけられてきたのだが。

二木は、俗に言うオタクというものらしい。しかし、俺はあまり俗世に詳しくないので、そういうものなのかという認識しかしていなかった。

「……何だ」

「おいオイおいオイ、東雲さんよ。キミはいくつも暗いなあ」

俺は普通に言っただつもりだったが、何故かいつも周りには暗いふうに捉えられる。

「……そつでもないが」

「まあ、それはいいや！　なあなあ、俺の話を聴いてくれよ！」

自分が言ってきたことなのに人の話は聞かない。

知り合ってから日が経つ度に馴れ馴れしくなっている気がするが、特に怒るほどのことでもないため、黙る。この男はこういう男なのだと思っていれば問題は無い。

「俺さ、今さ、《ソードアート・オンライン》のベータテストやってるってこの前言ったじゃん？　いやもう、ホント凄いなってアレ！　あの五感に響くようなリアルな仮想世界と、何より《ソードスキル》だよソードスキル！　自分の振るった剣がライトエフェク

トで色鮮やかに輝いて敵に当たるあの爽快感は、真剣でハマるって！」

二木は、《SAO》というゲームでしたことを日々、細かく俺に報告してきた。やれどどこでのクエストの報酬で何を貰った。やれあそのダンジョンで出てきたあのモンスターはこうやって倒した。やれボスモンスターに初めて挑戦したけど瞬殺された、等。

普通なら、自分もしていることならともかく、他人がした話なんか聞いてもつまらないだけだろう。だが二木の話し方は、細部に至るまで丁寧に豊富な語彙で表現し、情景がイメージし易い話し方であつたし、その時々的心情を大げさに言うので、まるで物語を聞いているかのように退屈はしなかつた。

その上更に、俺にとってもそのゲームには少し興味深い点があつた。

「あゝあ、東雲とも一緒にプレイ出来たら良いのになあ。そしたら俺が盾剣士の前衛、東雲が《槍使い》の後衛で理想的なタッグが組めるのに！」

二木が、なぜ俺を《槍使い》と言つたのか、それには俺の実家が関係している。

俺の祖父は、戦国時代から続く古流槍術の道場をしている。無論、俺も物心付くか付かないかの頃より、祖父に厳しく鍛えられた。それも、少しも自由な時間を与えて貰えないほどに。

だがそのお陰で俺は、同年代からすれば高い身体能力と洞察力を得ることが出来たと自負しているし、更に祖父直伝の槍術も扱えるようになった。

二木が言うには、《SAO》みたいな《完全ダイブ》という全身の感覚を《仮想世界》で再現させて動かすようなゲームでは、本来の身体能力が高いほど上手く戦えるらしい。実際には、元々の身体

能力が高いと、《仮想体》<sup>アバター</sup>を思い通りに動かす《イメージ》がしやすいのだという。

そして、《SAO》では仮想ではあるが、実際に剣や槍を使って敵を倒すことが出来る。今まで習ってきた槍術<sup>もの</sup>を、実際に実戦で試せるかもしれないというのは、特に好戦的でも無い俺だが、やはり魅力的に思えた。

俺は、祖父との稽古故に小さい頃から友達と遊ぶなんてことはしなかったし、遊びに誘われても稽古がある為に断り続けて来た。厳格な祖父と一対一での長年に及ぶ稽古、それに加え一度も他人と遊んだことが無いという過去のせいも、俺はあまり感情を表に出さなくなり、常に無表情でいることが普通となった。そして、今まで祖父と家族くらいしかまともに会話をしていなかったため、自然と必要最低限のことしか話さなくなっていた。

現在、中学三年生。今年でこの学校も卒業だ。その時点で俺に友達は誰もいなかった。だが、三年になってしばらくしてから二木と知り合った。ゲームが好きだという二木からは、色々なゲームの話聞いた。その中でも今現在、ベータテストの参加資格を手に入れたからハマっているという《SAO》というVRMMORPG  
《仮想大規模オンラインロールプレイングゲーム》。

今では昼休みは、ほぼ毎日その報告会と化していた。

「あゝあゝ、もう少しでベータテスト終わっちゃうんだよなあ。くゝ、今まで俺が育て上げてきたキャラが削除されちゃうよゝ」

昨日のプレイの話が一段落したのか、黙々と弁当を食べている俺の横で盛大に溜息を吐きながら話を変える二木。

「……その、ベータたてすと、というのが終わったら……どうなるんだ？」

うな垂れて、顔を下に向けている二木に向かって問いかける。

「……そうだよ。 そうなんだよ！ そうなんだよ！ 終わったら……終わったらっ！ SAOの正式サービスが、始まるんですよ！」

ぐわつと顔を上げて叫ぶ二木。

俺は横目で教室内を見回した。 ……こちらを見て、かなりヒているクラスメイト達が見える。

「消えるのは残念なんだけど、やっぱり正式サービス始まるのは嬉しいよね」

椅子から立ち、腰をクネクネとしながら喜びを表す二木。

俺と違って面白い奴なのだけど、何故か友達はいないらしい。

「あ、そうだ！ 東雲も買いなよ！ そんで一緒にやろうよ！ ……な〜んで、東雲の家はダメなんだったよねえ」

突然の、でもない二木の提案。

二木はことある毎に、俺と《SAO》をしたいと言ってくれていた。 ……

だが、いつも俺は断っていた。 そう、いつもなら。

「……買ってもいいが、いくら位なんだ？」

「え！？」

俺が肯定的なことを言ったために驚いたのだろう。

普段の俺は、祖父との稽古がある為、学校や食事、睡眠、勉強以外の全ての時間を稽古に当てていた。 しかし、今は違う。 もう稽古

のみに時間を当てなくてもよくなった。

「ど、どうしたんだ!? いつもならじーさんとの修行があるから駄目って言うのに……あ、いや、やっぱり嫌とか、そんなんじゃないかと、単純に驚いてるって言うか……」

「……もう、俺は師匠 爺さんに稽古をつけて貰う必要は無くなつた。……だからまあ、時間はとれる」

「……へ? い、いきなりなこと、さすがの二木さんもビックリだよ。前まであんなに頑なに拒んでたからな。……なあ、なんかあったのか?」

二木の疑問は最もだと思う。今までの俺は祖父との稽古が全てだったのだから。

俺は、その疑問に答えるべく口を開いた。

「……祖父に、免許皆伝を授かった」

俺の言葉を聞いた二木は、あんどりと口を開けて数秒間硬直した後、目覚ましの如くいきなり叫んだ。

「マジで!? 免許皆伝!? それってアレだよな? 免許が皆伝ってことだよな!? スツゴイじゃん! あの化け物じーさんからよく貰うことができたな!」

二木は、まるで自分のことのように喜んでくれた。それは、素直に嬉しく思う。

一度だけ、二木を自宅へ招待して、祖父との稽古を見せたことがある。実際には、無理矢理付いて来たのだが……。そのときに見た、祖父の人間離れた動きを思い出しているのだろ。確かに祖父は、孫の俺からしても化け物じみていたと思う。

「でも良かったじゃん！ これで一緒に遊ぶこともできるってことなんだしさ！」

「……………ああ、そう……………だな」

素直に嬉しがつている二木、しかし俺はそこまで喜ぶことはできなかった。そんな俺の雰囲気気付いたのか、二木が尋ねて来た。

「おい、どうしたんだ？ 嬉しくないのかよ？」

心底、不思議といったような間抜けな顔で訊いてくる。

「……………俺と祖父は、先日試合をした。その試合で俺は勝ち、免許皆伝を授かり、祖父と稽古から解放された」

「うん。良いこと……………なんじゃねーの？」

「……………だがその試合の翌日、祖父は眠るよう……………お隠れになられた」

体の中が冷たいもので埋められていくのを感じる。重力が増加したかのように体が重くなる。

あのときのことは、少なからず俺の精神に影響を与えているようだ。

「……………へ？ オカクレになった？」

その言葉の意味が一瞬思い出せなかったのだろう二木が、首を傾げている。

「……………亡くなった。死んだってことだ。死因は老衰」

御歳八十七歳。普通に考えればいつお迎えが来ても不思議では無かった。しかし前日にあれだけ暴れたというのにいきなり、なんて祖父らしいといえれば祖父らしい。あの人は、別れの言葉なんて絶対に言わないような人だったから。

「！ご、ごめん。知らないで、はしゃいだりして……」

二木は目に見えて落ち込み、視線は地面で固定された。

この少年は、人を怒らせる、悲しませるといったことに凄く敏感に反応する。

恐らく、過去に人間関係で何かがあったんだとは思つが、深くは知らないし、聞こうとは思わない。

「……いや、知らなかったのだし仕方ない。……それに折角、自由な時間が出来たんだ。祖父だって、いつまでも落ち込んだ俺なんて見たくはないだろう」

俺がそう言うと、二木は恐る恐るといったふうに顔を上げ、話すうちに次第にいつもの二木に戻っていった。

それから俺は、今まで遊べなかった分を取り戻すかの如く積極的に、《SAO》をプレイするために二木から色々なことを聞き、来るべき日に向けて準備をすることになった。

そして、《SAO》ベータテストとやらが終わり、正式サービスが開始される日。

俺は二木の家に来ていた。ナーヴギアを買ったはいいが、その使い方について不安が残った為、一緒にログインしてみるという話になったのだ。

「よし、これで設定は完了。後はギアを被って『リンク・スタート！』って言うだけだぜ」

基本的に機械に詳しくない俺の代わりに色々とセッティングをしてくれた二木。

「……すまない。機械は……苦手なんだ」

「へっへっのへっ。んなことはお前の古風過ぎる家に行った時にはすでに気付いてたから無問題だぜ！」

「……………そうか」

家を見ただけで気付くとは、二木も中々やるな。

「俺の方とはとくに準備OKだから、後は開始時間を待つばかり！ つつてもあと三分も無いんだけどな〜！」

SAOの公式サービス開始は、今日の午後一時からだ。

自分のベッドの上で胡坐をかいている二木は、いつもより興奮しているように見えた。

俺は、二木のベッドの横に予備の布団を借りて敷き、その上に座って準備をしていた。

「あつと二分！ いやあつと一分！ あつと」

二木が大声で秒読みを行っていたとき、いきなり部屋のドアを開けて二木の母親が顔を出した。

「健太！ あんた進路調査票まだ出してなかったでしょ！？ 担任の吉田先生から電話があったわよ！ 今、整理してる最中だから

持ってきて欲しいって言われたわ！ 今すぐ支度して行ってきたさ  
い！」

「 なっ!？」

二木の母親はそう捲し立てたあと、俺に向かって今の剣幕が嘘の  
ように変わった優しげな顔で言った。

「ごめんなさいね、東雲くん。そういうわけだから、うちの子はこ  
れから学校に行かなくちゃいけなくなつたのよ……」

「……そう、ですか、仕方ありません。二木、今日は」

そういう理由なら仕方ない。別にこれが最後の機会というわけで  
もなし、俺は二木にどうするか訊こうとした。

だが

「ま、待てって東雲！ ソッコー行って帰って来るからさ！ そ、  
そうだ、お前は先にログインして《仮想体<sup>アバター</sup>》の練習でもしとけよ！  
な？ な!？」

二木は、焦つたように俺に言った。

「何言ってるのアンタは！ 家から学校まで往復で二時間以上かか  
るでしょ！ それまで東雲くんを一人で待たせる気なの!？」

二木の母親が言っていることは事実だ。二木の家からウチの中学  
校までは、電車とバスを使って片道一時間少しかかる。

ちなみに、俺の家は中学校と二木の家のだ丁度、中間に位置してい  
る。

今から学校に行つたとしたら、未提出の件で先生に説教を貰う時  
間を引いても軽く二時間。電車の待ち時間など様々な要素を入れた

ら三時間を越えるかもしれない。

それは二木も解っているだろう。解っていたとしても、二木は今日一緒にゲームがしたいと言ったのだ。

「……せつかく、せつかく……やっと一緒に出来るんだ。ホントに、ホントに早く帰ってくるから……な？ 頼むよ……」

二木が、泣く寸前のような顔で俺にすぎるように言った。

俺の知る限り、学校に俺以外の友達は、二木にはいない。

それは俺も同じだが、二木はずっと自分と一緒にゲームが出来る相手を探していたように見えた。

軽く聞いた限りでは、他のネットゲームでの知り合いも、学校にいる同じ趣味の奴とも、長くは続かなかっただらう。自分の行動が裏目に出て、段々と溝が出来ていって、最後には完全に他人になるのだと言う。だからこそ、今までで一番長く付き合いが続いた俺と、自分の趣味であるゲームをするのが余程楽しみだったのだらう。

二木の言葉には、一種の悲壮感が籠められていた。だが、その二木の様子に俺は、逆にどこか暖かい気持ちになっていた。友達がいなかったのは俺も同じだ。そして、友に求められるということが、こんなにも暖かい気持ちになれるなんて知らなかった。

「……解った。そもそも今日は泊まる予定だったな。……仮想世界あやうで足手纏いにならないように、先に行って練習していよう」

泊まる予定、というのは定まっていなかった、と言う意味では本当だ。

ナーヴギアを使った完全フルダイブ。これには人によって合う合わないがあるらしい。限りなく現実に近いが、それでも現実ではない情景は、合わない人ならば俗に言う《3D酔い》というものになることもあるそうだ。勿論、慣れることで改善することもあるらしい

が。

《仮想世界》、そして《SAO》というゲーム、これらに合わない場合は、泊まりはしないと決めていた。もし酔ってしまったら、ゆっくり慣れさせていこうという話は二木としていたのだ。

しかし、二木の言葉を聞いて、つい泊まると言ってしまった。言葉を言った後のことを考えるよりも先に口が動いていた。こんなことは初めてだった。

「……東雲。 あ、ありがとな！　すぐ！　ソッコーで帰ってくるからよ！」

だが、二木の元気が戻ったことを考えれば、それはけして悪いことではないと思った。

俺は時計を見て、自身のナーヴギアをかぶって二木に言った。

「……もう、公式サービスとやらは開始したな。……じゃあ、二木。俺は先に行っている」

「ああ、最初は見えてやるから。リンク、してみるよ。あ、俺は口グインしたら中央広場にいるからな。何時になるかちょっと解らないけど……」

二木の言葉に頷き、俺は布団に横たわり、目を閉じてから……その言葉を、呟いた。

「……《リンク・スタート》」

こうして俺の意識は、《SAO》　　《ソードアート・オンライン》へと吞まれていったのだった。



## 2・変わる世界

俺は、二木ふたきに先んじて《S A O》ソードアート・オンラインへとログインした。

そして、自分の《仮想体》アバターの動きを色々確かめていた。身長は現実の俺と変わらない167センチ、筋肉質だが、太過ぎもしない体躯。髪と顔は、デフォルトからあまり変わっていない。

二木は、本来の人物からは考えられないような美形の《アバター》を、PCの専用デザインソフトとやらで作成していた。俺はそこまで容姿には拘らなかつた。俺が逆に拘つたのはアバターの身体の方だ。出来るだけ現実の俺に近い身体にしたかつた。

俺は古流槍術を習っている。自身の身体操作にもかなりの自負がある。これは自分の体のことをよく知らなければ出来ないことだ。しかし、それは逆に言えば自分以外の体ではせつかくの身体操作能力も、上手く使うことは出来ないということでもある。今までの体と違えば、どの筋肉にどのくらい力を入れて、どの骨格をどのくらい動かせば、こういう結果になるという当たり前の認識も、全く違うものになってしまう。なので俺は、自分の身体データを事前に精密に調べ、《仮想体》作成で午前中いっぱいを使って、出来るだけ自分に近づけた。

しかし、それを二木に言ったら

「お前……そういうことは早く俺に言えよつ。あのな、何でさつき《キャラブレーション》アバターってのしたと思ってるの？ あれは簡単に言えば自分の身体データをナーヴギアに記憶させるようなもんなの！ ここをこうして、このボタンを押せば……はい、これでお前そのままの体躯の出来上がり、てなわけなのよ！」

その事実は、少なからず俺の心を打ちのめした。

だが、そうして俺は、この《S A O》という《仮想世界》で、ま

さに自分自身を動かすことが出来ているというわけだ。

無事にログインを果たした俺は、マニュアルに書いてあった通り、右手の人差し指と中指を揃えて、軽く下に振る動作をした。鈴が鳴るような音と共に、透き通った紫色の《システムメニューウィンドウ》が、目の前に現れる。必要動作と、それをしたら現れるということはマニュアルを読んで知ってはいたが、《完全<sup>フル</sup>ダイブ》が初めて俺は、何も無い場所からにゅっと現れる感覚に、不覚にも少し驚いた。

まずは、ステータス画面を確認して、自分を知ることが肝要だ！

今、学校への道を急いでいるだろう友人の言葉を思い出す。

自分のステータスを見て、現在の自分の力を確認する。

キャラクター名：《Kiryu》 レベル1

俺は、自分のキャラクター名を《Kiryu》 《キリュウ》とした。

この名は、我が《東雲流古武槍術》の開祖様の名前らしい。生前、祖父がこの開祖様の凄さを語ってくれたことがあった。流石に、槍の一突きで山を割ったと言うのは誇張しすぎだとは思わうが。

この世界では、俺は《キリュウ》となって行動しなければならぬ。俺としては、ややこしいので本名を使おうと思ったのだが、二本にそれは色々リスクがあるから止めておけと言われたのでこの名にしたのだ。

現在、俺がいる場所。

S A Oの舞台となる浮遊城《アインクラッド》の第一層にある主街区《はじまりの街》というらしい。ここから第百層を目指すことが、このゲームの目的だという。

俺はおもむろに上空を仰ぎ、左手をかざした。

「……………手が、届きそうだな。だがそれでも高い……………か」

第一層から第二層の底面までの距離が100mだという。

手が届きそうでもやはり簡単には届かない距離。

ここから見えるあの場所を目指すだけでも相当な苦勞を強いられることは想像に難くなかった。

それが、百層まで。

途方も無いと思えるその道のり。だが俺は、自分が少しだけだが高揚していることに気付いていた。

「ハッ、ハッ、ハッ……………」

《はじまりの街》を、俺は走って見回っていた。

《<sup>アバター</sup>仮想体》は、現実の自分と全く同じ体型といっても、その機能には大きく違いがあった。軽く走るだけなら無限に走れるようにみえて、少し全力で走ってみるだけでも簡単に息は上がり休みを必要とするし、握力も腕力も脚力も、自分とは思えないほどに低かった。だからこそ俺は、まずこの体に慣れるために、そしてこの街のことを知るために、走りながら街並みを見ていた。

街の通りは基本的に石畳が敷き詰められ、家もレンガや木造の西洋風のものが多い。中世西洋風モデルの街なのだと思う。だが一つだけ、街の中央の広場から見える《黒鉄宮》と呼ばれるその名の通りに黒い金属質の城は、周りの暖かな街並みの中、この場所だけひんやりとした雰囲気を感じられた。

二木から聞いた話によれば、この《はじまりの街》は、浮遊城《アインクラッド》で一番の広さを誇るの街なのだという。

たった三時間くらいでは、四分の一も回ることが出来なかった。

しかし、当初の目的であるこの世界での自分の体を知ることが達成できた。武器屋や道具屋、宿屋に軽食屋などもいくつか記憶した。

後は実際に剣を、いや俺の場合は槍を振って調整するだけだ。

そう思った俺が次に行ったのは 食事をとることだった。中央広場に出ている屋台から、焼き鳥のようなものを買う。《スウエルトードの串焼き》は、正に焼き鳥のような味と歯応えだった。名前を見れば鶏とは違うことは解るのだが、この際材料には気にしない。美味かったので、もう一本買って食べながら、俺は今いるこの世界のことを考えていた。

現実の自分の体とは違うが、意識すれば指の一本一本まで別々に動かせること、関節が曲がるのは一方向だけではなく微かに別方向にも曲がる所や、関節を捻転出来る可動領域まで、細部に至るまで再現されている。自分の体をあちこち触ると、筋肉の弾力に骨の感触まで判る。動けば息が上がり、腹も減る。匂いと湿気を感じる風や、石畳の段差や土の微かなデコボコを踏んだときの足の裏の感覚。皆が仮想、仮想と言っていたが、俺にはこれが本当に仮想だとは思えなかった。

俺には 　ここが《現実》に見えてしよつがなかった。

広場のベンチへ座り、食後に風を感じていた俺は、時間を確認する為に再び《システムメニューウィンドウ》を開いた。

？

開いたシステムメニューに一瞬、違和感を感じた。しかし、未だシステムメニューの全てを確認したわけでもない俺が、その違和感に気付くことは無かった。俺は、一旦違和感を置いておいて、時刻を見る。

時刻は、午後四時。

S A O公式サービス開始は午後一時から。そして、俺がログイン

したのが約一時十五分くらい。もうすぐ三時間が経つ。予想通りならば、もうそろそろ二木は帰って来る頃合だろう。

俺はこのまま中央広場にあるベンチに座りながら、二木がログインしてくるまで待とうと思った。周りを見れば、俺と同じ格好（装備）をしたプレイヤーと思われる人がどこかへ向かって走っていたり、二人で歩いていたたり、もっと大勢で固まって話していたりしていた。

ふと目を瞑ると、近くから音楽が流れていたことに改めて気付く。目を開けてその音源を捜すと、広場の片隅で楽団らしき人達が色々な楽器を演奏していた。俺はその音楽に耳を傾けながら、もうすぐ来るであろう友を待った。

そうして、一時間半が経っただろうか。

もうすでにログインしていてもおかしくはないと思うのだが、一向に二木が来る様子が無い。

何かあったのだろうか、俺は一旦ログアウトをして確認しにしようとした。

だが次の瞬間、この世界の全ては一変することになる。

いや、逆に先ほど俺が思っていた通りのことになった、と言えるのかもしれない。

「！？」

突然、俺の周囲 中央広場のあちこちで青い光が点滅した。そして、青光が現れ消えた場所には人が立っていた。数人ではきかな

い。広いと思っていたこの中央広場からはみ出すぐらいの大勢の人が、青い光と共に現れた。

直後、そこかしこで叫び声上がる。

「おいGM！ 今のはなんなんだよ！？」

「ねえ、ログアウトが出来ないのよ！ 早く何とかしてよ！」

「もうちょっとでやっとなんか倒せたんだぞ！？ なんとか言えよGM！」

「ログアウトできないって、どういうことだよコラ！」

ログアウトが、出来ない……？

俺は《システムメニューウィンドウ》を開き、マニュアルに書いてあったログアウトボタンを探した。

「……………」

無い。

最初に開いたときにはしつかりと在ったと記憶している。しかし、今は無い。恐らく先ほどの違和感はこれだったのだろうか。

周囲が引切り無しに叫んでいる《GM》とは、《ゲームマスター》。ゲームの管理者のことだという。暫くすれば、そのGMが応答するのだろうか。

しかし、俺は未だ連絡のつかない友人のことを考えていた。ゲーム、というより機械全般の知識が無い俺にはよく解らないが、ログアウトができないということは、ログインもできないのだろうか。あれだけ楽しみにしていた二木がSAOに入れないというのは、なんと不幸な話だ。

何も知らなかった俺はこのとき、暢気にもそんなことを考えていた。

直後、異様な雰囲気とともに上空に映った人影に気付いた者が、

それを指差しながら叫んだ。

そして、俺はソレを見た瞬間、ある言葉が脳裏を過ぎ<sup>よ</sup>った。

《<sup>せかい</sup>仮想》が変わる。

そんな、言葉が。

そして、現在に至る。

茅場晶彦と名乗ったその声は、俺たちSAOにログインしているプレイヤー全員に、ゲームからのログアウトの不可と、自分のHPがゼロになった瞬間、実際に現実の自分の体も死を迎える、そう言った。

『諸君は今、なぜ、と思っっているのだろう。なぜ私は SAO 及びナーヴギア開発者の茅場晶彦はこんなことをしたのか？ これは大規模なテロなのか？ あるいは身代金目的の誘拐事件なのか？』  
と

茅場の声は事務的で冷たい印象を受ける。しかし、俺にはその声は、玩具を手に入れた子供を連想させた。

『私の目的は、そのどちらでもない。それどころか、今の私は、すでに一切の目的も、理由も持たない。なぜなら……この状況こそが、私にとっての最終的な目的だからだ。この世界を創り出し、観賞するためにのみ私はナーヴギアを、SAOを造った。そして今、全ては達成せしめられた』

この世界を作り出し、観賞するため。

それが、茅場晶彦の目的だという。そのために、俺を含めた一人が、この《SAO》に閉じ込められ、HPがゼロになったら実際

に死ぬというゲームらしからぬ枷かせを付けられたというのか。

『…以上で《ソードアート・オンライン》正式サービスのチュートリアルを終了する。プレイヤー諸君の 健闘を祈る』

その言葉を最後に、ローブの巨人の映像は消え、薄暗くなっていた空は夕暮れの赤さを取り戻し、いつの間にか消えていた楽団がどこからか再び現れ、広場にいる人々の顔とは正反対に明るい曲を演奏し始めた。それで我に返ったのか、茅場の言葉で啞然となっていた者たちが叫びだす。

いや、それは《叫び》なんて甘いものではなかった。阿鼻叫喚の地獄絵図の如く、はじまりの街の中央広場付近に転移させられた一万にも及ぶ人、人、人の絶叫や怒号。

「嘘だろ……なんだよこれ、嘘だろ！」

「ふざけるなよ！ 出せ！ ここから出せよ！」

「こんなの困る！ このあと約束があるのよ！」

「嫌ああ！ 帰して！ 帰してよおお！」

俺の周りでも数多くの人間が、泣き、叫び、怒り、打ちひしがれ、また啞然としている。

俺は、周りが錯乱しているためか、もしくは事の深刻さを本当の意味で理解していないのかは解らなかったが、比較的落ち着いて周りを見ていた。

自分の理解を超えた状況に陥ってしまった場合どうすればいいのか。俺は、祖父の教えを思い出していた。

まず、己の目で、耳で、肌で、全てで感じたものを、そのままに受け入れるのだ。

そして、それに対して自分に何が出来るのか、それを考える。

そう、考えることが大事なのだ。思考を止めてはいかん。

そうだ。この状況に陥ってしまったことは、もうどうにもならないのだから。

茅場晶彦が作り出したこの状況。ただのゲームを、死の可能性のある危険なものにしてしまったこと、それは勿論犯罪だ。しかし、それが犯罪だということは茅場にも解っていた事だろう。なのに実行した、それが重要となる。つまり、茅場はもうあとには引けない。いくら叫んだとしても、茅場はこの状況を何とかしようとは思わないだろう。

では、叫ぶことが無意味なのだとしたら俺には何が出来る？

機械に疎い俺には、どういう原理でこの世界が出来ているのかも、この世界に入ることが出来たのかもよく解らない。更に、ここにはゲームのシステムに干渉出来そうなものに心当たりなどは無い。よって、俺がシステムに干渉する手段は取れない。あつたとしても、俺に何とかできるわけも無い。

……いや、俺が出来ないのならば、他にシステムに干渉出来る人物になんとかしてもらえばいい。先ほど茅場は言った。今現在は茅場だけがこのゲームをコントロール出来る者だと。ならば、茅場に何とかしてもらおう、何とかしてもらえるようにすればいい。しかし、今はこちらから接触出来るとは思えない。出来るのだとしたら、とつくに俺以外も殺到していることだろう。

他に、俺に出来ることと言えば……やはり一つ、か。

茅場は言った。第百層の最終ボスを倒せば、SAOから開放されると。恐らく真実……だと思おう。

茅場晶彦という人物には、先ほど声を聞くまでまったく面識は無かった。二木に聞いたのは茅場晶彦という人物が行った功績だけだ。人物像までは解らない。だが、先ほどの声を聞いて、俺はその言葉が真実であろうことだと確信していた。これから俺は いや、ここにいる一万人ものプレイヤーは、命を賭けて自由のために戦う、

戦わないといけないのだろう。しかし俺は、茅場の声からも同じように命を賭けている……そう思わせる響きを感じた。

とりあえずは、俺は茅場の言葉が全て真実だという前提で行動する。そういう結論に至った。そうと決まれば、まずは自身を強くしなくてはならないだろう。

……強くする。つまり自身のレベルを上げればHPの上限が増える、すなわち死ぬ確率も少なくなるということだ。この貧弱な体は早く何とかしたい。RPGでのレベルの重要性は、二木に何度も聞いていた。何度も何度も聞かされて来た。

「……二木」

今では、お前がこの世界に來なくて良かったと思っている。

この《死の可能性の在る世界》ソードアート・オンラインに。

だけど、このことを知ったお前は、俺が知ってるお前なら、きっと泣いてしまっているのではないだろうか。このゲームに俺を誘ったのは自分だと、先にログインしてくれと言ったのは自分だと、だから自分のせいなのだ。

俺は、違つ、お前のせいじゃない。と心の中で自分が想像した二木に伝える。ただの想像。なのだが俺には、あるとき俺を引き止めた二木の顔から、その情景が本当の出来事になると思えてならなかった。

「……二木。心配するな。……俺は、必ず帰る」

届かない。

そうは思ったが、だけど俺は空に向かって呟いた。

### 3・自分出来る事

俺は、未だ混沌たる有様の《はじまりの街》の中央広場を見渡した。

そして、錯乱したり絶望したりしている者たちの中に、ある種の目的を持った瞳をしている者が、見える範囲では数名、広場を後にしているのが確認できた。

恐らく、彼らは自分たちに出来る事　しなくてはならない事を見つけたのだろう。

ならば俺もいつまでもここで佇んでいるわけにはいかない。まずは武器がいる。

最初にステータスを確認した際、初期装備として片手直剣《スモールソード》というものが、アイテムストレージに入っていた。

しかし、俺の最も得意とする武器は《<sup>えもの</sup>槍》だ。剣も使えなくはないが、実際に命の懸かっている状況だ。一番慣れ親しんだ武器を使う方がいいだろう。

そう思い、俺は先ほど街を見て回った際に見つけた一軒の武器屋へと歩みだした。

しかし、広場を後にしようとした俺に、背後から声がかかった。

「あ、あの……あのっ……！」

最初、俺はそれが自分にかけられた声だとは思わなかった。

この《SAO》という世界で、俺のことを知っている者なんていないのだから。

だが声の主は俺の右側に回ってきて、はっきりと俺を見て再び声を上げた。

「あの！ す、すみませんっ！」  
「……？」

目をきつく瞑りながら訴えるように言ったその人物。  
金髪の少女だった。

頭の左右で縛った、腰まで届くだろうツインテールの金髪。  
恐らく歳は俺の1つか2つ下。

恐る恐ると開いた瞳は大きく、顔の部品の数も整っている。  
大多数から美少女と言われる類の顔だろう。

俺と同じ初期装備である白い麻シャツ、灰色の厚布ベスト、そして男とは違う簡素なベージュ色の短いスカート。

それらは、男の装備よりは全体的に可愛いらしい印象を受ける。  
目の前の少女が派手な金髪をしているせいか、やや地味目にみえる初期装備の服装が、少しだけ特別に見えた。

しかし、何故この少女は俺に話しかけてきたのだろうか。

「……………何か」

用があるのか、と言おうとした俺の言葉に割り込む声があった。

「ネリーー！」

そして、金髪の少女の両脇に、今度は銀髪と茶髪の少女が現れた。

「ハアツ、ハアツ……………もうっ、いきなり走りだして……………」

「ヒー、ヒー……………そ、そうツスよ！ というかこんな場所で置いて行かないで欲しいツス！」

前者が銀髪、後者が茶髪の2人の少女。どうやら三人は知り合いらしい。歳も同じくらいに見える。

金髪の少女が、2人にゴメンと軽い感じに謝罪している。

だが、こちらとしては早く用件を言っただけで欲しかった。いきなり声をかけてきて、こちらを無視して話をしている3人。

故に俺はこちらから声をかけることにした。

「……………それで、俺に何か用か？」

その俺の言葉に驚いたのか、三人は一瞬背をピンツと伸ばし、こちらを向いた。

「あ、す、すみません！こっちから声かけたのに……………」

金髪の少女が謝ってきた。その本当に申し訳ないと思っているような顔を見て、俺はすっかり毒気を抜かれた。

「……………いや、それはいい。で、何か用なのか？正直、声をかけられる覚えはないが……………」

俺は、極めて普通に言ったのだが、銀髪と茶髪の2人は、肩を震わせて怯えたような目でこちらを見ていた。

だが金髪少女だけは、至って普通に俺の問いに答えてきた。

「あ、はい。えとですね。私たち、そのVRMMOって初めてなんです。……………なのに、こんなことになっちゃって。どうしていいか解らなくて……………それで、その……………色々と教えてくれる人を探してるんです」

不安さを隠さない拙い声で、そう言った金髪の少女。

ふむ、なるほど。

つまり、この三人は自分たちに来る事が考えても見つからな

った、というわけか。

だがそれは別に悪くない。そしてその場合、誰かに訊くという行為は正しい。

解らないことは訊く。その行為は大切なことだ。  
しかし

「……………すまないが、人選を間違えている。俺もVRMMO  
いや、ゲームというものの自体これが、《SAO》が初めてだ。俺で  
はお前たちの疑問には答えられない」

この少女の言っている事は解る。解るが、ゲームのことなんて二  
木に聞いたことしか知らない俺に、その役が務まるなどとは到底思  
わない。思えない。もっと相応しい人間が他にいくらでもいるだろ  
う。

俺のその言葉を聞いた金髪の少女は、少し驚いたような顔をして  
から、再び口を開く。

「あ、え……………じ、じゃあ、ど、何処に向かおうとしていたんですか  
？」

周囲の人間のほとんどは、未だその場を動かない。

そんな中、俺が何処かに行こうとしたことで、俺が他とは違う、  
もしかしたらこのゲームに詳しいのかもしれないと、この少女は思  
ったのだろうか。

「……………武器屋だ。さっき街を回った時に場所を確認していた」  
「何で武器屋に？……………もしかして、外に出る気なんですか？し、  
死んじやうかもしれないんですよ！？」

金髪の少女が叫ぶ。

何故、この少女はそんなことを叫んでいるのだろうか？

たった今話したばかりで面識も無い俺のことで、何故こんなにも必死な顔ができるのか……。

そんなことが一瞬、脳裏をかすめたが、俺は冷静に返した。

「……茅場晶彦と名乗る者が言ったな。第百層のボスを倒さなければ俺たちは開放されないと。……だから俺は、自分に出来ることをしようと思った。それだけだ」

暗に、俺は戦うことを選んだとそう言った。

俺の言葉の意味が分かったのか、金髪の少女だけではなく銀髪、茶髪の少女三人が目を見開いて絶句する。

次に口を開いたのは茶髪の少女だった。

「……な、なに言ってるんすか！ 危ないッスよ！ ここで、安全な場所で外からの救出を待ったほうが」

「救出は無いだろっ」

「な!？」

俺は、少女の言葉の途中で冷たく言い放った。

「もし、俺が茅場晶彦の立場だったのなら…… 1パーセントでも、自分以外の外部の手によってこの状況を打破できる可能性があったら、そもそもこんなことを実行はしないだろう。天才と呼ばれる人物なのだったら、尚のことそこは理解しているはずだ。……ならば、外からの救出は無いと考えていいだろう。俺たちは、茅場の言う通りにするしかないんだ。このゲームをクリアして、茅場本人に開放してもらおうしか……この世界から脱出する方法は……無い」

ありえない、そう凡人が思うことをしてしまうのが天才だ。茅場

晶彦がそうだとこののなら、救出なんて待っても恐らく無駄だろう。

「……………」

四人の間に沈黙が降りる。

かなり厳しいことを言ったということは自覚している。

しかし、俺がそう思っているんだということはハッキリとしておきたかった。

いや、もしかしたら俺は、自分自身に言い聞かせていたのかもしれない。

「…………俺は街を出てモンスターを倒す。レベルを上げて強くなる。

…………それが今、俺に出来る最良の事だと思うからだ」

三人は、それぞれ何か言いたそうにしていたが、それを遮るように俺は続けた。

「…………だが、別に無理に戦おうとしなくても…………街に留まっただけでもいいと思う。人には向き不向きだってある。戦いたいと思う者、戦う決意をした者だけが戦う。逆に戦いたくはない、戦いが怖い、死ぬのが怖い者は…………無理に街を出なくても良いと俺は思う。本当の命が懸かっているのだから怖くて当然だろう。それは誰も責める事は出来ないし、逆に…………俺のように外に出て行く者を引き止める事も出来ない。…………自分に出来ることを考えて、それを行う。それが今、俺たちがすべきことだろうしな…………」

そう言うだけ言って、俺は別れの言葉も告げず、三人に背を向けようとした。

だがその前に、今まで黙っていた銀髪の少女が初めて俺に向かって口を開いた。

「あ、あのっ……あなたは、こ、怖くないんですかっ……？」

俺は銀髪の少女を見た。

怯えるような瞳に震える肩。多分、かなりの人見知りなのだろう。その顔をよく見ると、俺はふとあることに気付く。

似ているのだ。金髪の少女と銀髪の少女の顔立ちが。恐らく姉妹、それも双子だと思われる。

快活そうな金髪の少女とは違って、こちらは貞淑な雰囲気纏っている。

腰まで伸びたストレートの銀髪も、その清楚さを引き立てている。そんな少女の問いに、俺は至って平然と返した。

「……別に、死ぬのが怖くないわけではない。……ただ、俺はこの《SAO》の世界で出てくるどんな怪物よりも怖い存在を知っている。……俺が平然としているように見えるのは、恐らくそのせいだろう。それより怖い物なんて、想像ができないのだからな」

そう、俺が最も恐れる存在。それは俺にずっと稽古をつけ続けていた祖父だ。

俺は幼い頃より武術を習ってきた。その中で祖父と相対したとき、本当に死ぬと幾度も思ったものだ。

幼い俺でも容赦なく骨を砕き、急所を攻撃してくる祖父。

恐らく俺は、そんな祖父より怖いものを想像出来なかったのだと思う。

だからこそ、自分の命が懸かっているという状況にも平然としていられる。

しかしそれが、俺が最初の一步を踏み出せることが出来た要因でもあったのだから、逆に良かったとも言える。

「……………」

俺の答えを聞いて、銀髪の少女は黙った。

それもしかたないだろう。俺の答えは、かなり特殊な部類に入る。その答えを理解しようにも、それが想像できないのだから無理な話だ。

俺は今度こそ三人背を向けて、武器屋に向かった。

背中の方から「あ、う………」という声が聞こえてきたが、俺のよくな特殊の塊みたいな男とは一緒にいない方があの子たちのためだろう。

もつと他に、丁寧に教えてくれるような人物がいるだろう。ここには1万人ものプレイヤーがいるのだから……。

少しだけ浮かんだ罪悪感を振り払いながら、俺は武器屋への道のりをやや早歩きで急いだ。

「いらっしやい！ 《ドマールの武器屋》へようこそ！」

カランカラン、というカウベルの音を鳴らしながら木製のドアを開けると、活きのいい声が店内に響いた。

ニコニコ顔の太った中年の店員の声だ。

額から頭頂部だけ禿た頭。角ばったアゴにも鼻の下にも髭は無い。汚い。といっても洗濯しても消えなかったような黒ずみの付いているエプロンを、でっぱった腹で押し出すように着ている。

店内は石畳以外は殆ど木造。片手剣や両手剣、槍、矢などが樽に何本も乱雑に刺さっている。多分、安物なのだろう。

逆に高価な武器は、棚にそれぞれ台に乗せて置かれている。しかし、そちらは今の俺では買えない。

店内には、俺の他に客はの誰もいなかった。

二木が前に言っていたことだが、《はじまりの街》にはいくつも武器屋があるらしいので、ここだけに人が集まることもない。

それもそのはず、今現在この街は一万という人数をかかえているのだ。

その人数を賄う武器屋なんて、それこそデパート並みの店でも賄えるかどうかあやしい。

それに加え、先ほどあんなことがあったばかりなので、武器屋に行こうとする者がそもそもまだ少ないだろう。

「……店主。武器を探しているのだが」

ここ《SAO》での、店での買い方は俺が知っているのは4つだ。一つ目は、店に置いてある品物をタンツと触れることで出る、【Buy it ?】というウィンドウに【Yes/No】でYESを選択する方法。

ウィンドウには、その品物の説明と値段が現れる。それを見て買う。二つ目は、カウンターをダブルクリックするように軽く叩くと、その店にある品物のリストが、ウィンドウとして目の前に現れる。それで買いたい商品を選んで買う方法。他の商品との値段や性能は比べやすいが、実物を見れないため、デザインや持った感触はわからない。

三つ目は、店員のNPCに声をかける方法。簡単なAIで動いているらしいが、しっかりとプレイヤーの要望に応えてくれるらしい。どんなもの、どの程度の値段、それらを言えば、重要な単語を読み取ってその店の商品からピックアップしてくれる。そして、こちらが訊いた品物の説明も口頭でしてくれるという。

四つ目は、欲しい品物を持って店の外に出ること。それだけで所持金から品物の金額が引かれる。しかしこの方法で気を付けなければならぬのは、品物の金額よりも所持金が少ない時に持ったまま

店を出てしまうと、自分のカーソルが犯罪者の証しであるオレンジ色に変わる。品物は手に入るが、オレンジカーソルには色々と不利な制限が付くので、所持金には十分に注意しなければならぬだろう。

俺は、まだこの《SAO》について、マニュアルに書いてあったことしか解らない。

しかも、そのマニュアルは、システム的なことだけしか書いておらず、ゲーム内のことについては殆ど何も書かれていなかった。

なので、条件を言えばある程度NPC側で選別してくれるという口頭での買い物方法を選んだ。

「どんなのをお探しい？」

NPC　　ここが《ドモールの武器屋》ということを考えれば、この店主の名前が《ドモール》ということになるのだろうか　　が、訊いてきた。

俺は、今現在の自分のスペックと、希望の武器を言う。

「レベル1でも持てる両手用の長槍を見せて欲しい」

俺が祖父から習っていた槍術は、基本的に和槍を扱う。

和槍は刃は短くシンプルなものが多く、しかも木造の柄の部分がよく撓るのだ。

この《撓る》という部分が俺にとって、俺の扱う東雲流槍術にとって重要となる。

「レベル1ねえ。そうすると、ウチにゃあコレとこれしかねえが…」

難しい顔をしてあごを捻りながらカウンターにどこからか出した

二本の槍を置く店主。

正直、俺にはこのNPCの仕草は人間以外には見えない。

俺はカウンターの上に置かれた槍の一本に触る。

カテゴリー《ロングスピア/トウーハンド》、固有名《シンプルスピア》、金額400コル

金属の棒に小さい直刃が付いただけのなんの装飾も無い槍。

一応、持った感覚も確かめておきたい。

「……店主、持ってみても？」

「おお、かまわねえよ」

俺は《シンプルスピア》を両手で構えた。

少し、重いか。

見れば筋力要求値はギリギリだ。改めて今の自分の非力さを知る。

俺は《シンプルスピア》を置き、もう一つの槍へと手を伸ばす。

カテゴリー《ロングスピア/トウーハンド》、固有名《ウッドハンドスピア》、金額300コル

そのウッドハンドルの名の通り、柄の部分が木で出来た槍だ。柄が木製ゆえに、先ほどの槍よりかは軽い。

構えたまま軽く槍を左右に振ってみる。

ふむ。撓りはまあまあだな。

俺が探していた特徴の槍と割と近いものだったので、俺は《ウッドハンドルスピア》の方を買おうとした。

そのとき。

「お客さん、それを買うなら注意しろよ。それは柄の部分がやわい木造だからよ。はつきり言って耐久値が他より低いんだ。モンスターへの攻撃を受けたらガンガン耐久値が減っていくぞ」

そう、店主が言った。

む、それは困る。

確かに現実の実際の武器でも、思いつきり叩いたり受けたりしてれば直ぐに磨耗する。

《SAO》では、どこまで、どの程度まで一つの武器で戦うことが出来るのかは俺にはまだ解らない。

「……店主。ではこの槍は、攻撃するにもどんどん耐久値は減るのか？」

「いやまあ、減るっちゃ減るがな。モンスターの攻撃を受ける程には減らねえよ。そこは他の武器とほとんど変わらねえ。その《ウッドハンドルスピア》は、あくまでモンスターの攻撃を受けたときに全金属製の武器に比べて耐久値が減る量が多いっていうもんだ。まあ、そんなかあし、普通ならレベル5ぐらいの筋力要求値が必要な全金属製の槍と同じぐらいの攻撃力を持つてるんだぜ。刃の部分だけは《鉄》<sup>アイロン</sup>だしな」

なるほど。それはいいことを聞いた。

正に俺に相応しい槍だ。正確には、俺の扱う槍術に……だが。

俺は改めて《ウッドハンドルスピア》を買うことに決めた。

「……店主、これを買っ」

「ほいよ。えーと、値段は3000コルだ」

その店主の言葉と共に、俺の目の前に【Buy it ?】とウインドウが現れた。

3000コル……か。

プレイヤーに初期配布されている通貨は、5000コル。

俺は先ほど《スウェルトードの串焼き》一つ4コルを、二つ買った。

つまり現在の所持金は492コル。

槍を買えば192コルになる。だが、モンスターを倒せば金は手に入るだろう。

俺は迷わず目の前の【Yes】に触れた。

「まいどあり」

俺はアイテムストレージを開き、今買った槍を確認する。

192コルか。もう、金に殆ど余裕は無いと考えていいだろう。

この《SAO》の世界には、食欲が存在する。それは先ほど自分で確認済みだ。

ならば当然、睡眠欲もあると考えた方がいいだろう。つまり、寝床が必要だ。

野宿も考えたが、マニュアルを読んだときに見た一文を、俺は思い出していた。

宿屋の個室や、プレイヤーハウスのセキュリティには

セキュリティ。ゲーム内でそんな言葉が出てくるといことは、

逆を言えばそれが必要になる場合があるということだ。

つまり、ゲーム内でも犯罪が出来る。

この場合 街中のような《犯罪禁止コード圏アンチクリミナル》内での犯罪とい

うものが、どういうものなのかは俺にはまだ解らないが、どうせ寝るなら安全が最低限約束されている場所で寝たい。

だとしたら宿屋の鍵付きの個室か。そしてそれには宿屋に泊まるための金が必要。

宿代が一泊いくらなのかは分からないが、手持ち192コルでは少々この先は心許無い。

これは早めにモンスターを倒して、金を手に入れる必要があるだろう。

「……店主。世話になった」

「まいどありい。また来てくれよ」

店主の言葉を受けて、俺は店を出た。だがふと、今出てきた店を振り返る。

NPCと知ってはいても、俺には普通に人間と会話をしているように思えた。

一つ確認したいことがあったので、俺はもう一度、今出てきたその店に入った。

「いらっしやい！ ドマールの武器屋へようこそ！」

「……………」

最初に入ったときと、少しもずれの無い声音で言う店主。

その店主の顔も、先ほど見た笑顔とまったく変わりはなかった。

一瞬だけ、店主の笑顔が能面のように見えた気がした。

その様子を見たとき、俺は悟った。

そうか。これがNPCというものなのか…………。

俺は、少しだけ寂しい気持ちになりながらも、店主に質問をした。

「…………店主、質問がある。《ウッドハンドルスパ》と同じように、柄の部分が木で出来ている槍というのは他にあるのか？」

これから俺は、木柄の槍を主武器とするだろう。

もし、そういう槍の種類が少ないのだとしたら、少しだけ方向性を変えてみる必要もある。

全金属製の槍、あまり携<sup>しな</sup>らない重い槍に慣れるということも、しなくてはならないかもしれない。

「ああ、もちろん他にもあるぞ。櫛<sup>オイ</sup>やクヌギ、松を柄に使った槍な。だが敵の攻撃をその武器で受けた時に、他の全金属性の槍よりも耐

久値の減りが早いっつう共通の特性があるぞ」

その特性はさっき聞いた。

一度、店を出ると忘れてしまうのだろうか。

「……そうか」

知りたいことは解った。今はもうこの場所には用は無くなった。そう思って踵かかとを返そうとしたとき、

「そっぴゃあ、三十五層の《迷いの森》のどっかに木造柄の強い槍を落とすモンスターが出るって聞いた事があつたような……」

？

店主が誰に言うでもなく呟くように言った。

これは、この情報は信じてもいいのだろうか……？

だが、このNPCが俺を騙す理由も思い当たらない。

とすれば、俺の最初の目標はその三十五層の《迷いの森》にあるという《強い槍》を探すということにするか。

百層攻略は大きな目標として、目先の目標も決めておくに悪いことは無い。

「……情報、感謝する」

恐らく、NPCには言っても意味は無いのだろうとは思ってたが、俺は店主に礼を言い、店を出た。

「また来てくれよ！」

そう言った店主の声が、俺の背を空しく叩いた。

現在の時刻は、午後六時五十三分。

あの、茅場晶彦のチュートリアルというものから一時間以上が経った。

辺りはすでに夕暮れの赤は消え、藍色の薄暗さに包まれていた。

さて、武器は手に入れたが、今日はもう暗くなっている。宿を探して休むか、もしくはこのまま街の外に出て戦闘を実際に経験してみるか。

俺は数分間考えたが、一度だけでも戦闘を経験してみようという結論に達した。

確かに視界はすでに暗く、よく見えない状態ではあるのだが、どんな状況でも戦えるようにしておくのは悪いことではない。

それに、ここは《はじまりの街》。つまり周りには弱い敵しか現れないだろう。

レベル1のプレイヤーばかりのところに、ありえないほど力の離れた敵を出すなどという理不尽は、流石の茅場もしないだろう……多分。

だったらそれは、初の夜戦の練習にも丁度いい。

俺は、ここから一番近いはじまりの街の北西ゲートへと歩を進めた。

今まで遊ぶことすらもせずに鍛錬を続けてきた槍術。それが《この世界》でどこまで通用するのかは解らないが、俺は今、自分がこんな状況下で再び高揚していることに気付いていた。

祖父より鍛えられたこの槍技……試せる時が、来たようだ。

### 3・自分に出来る事（後書き）

武器については凄く悩みました。文庫2巻の『心の温度』ではリズベットの発言に、剣の素材は金属インジュート素材としか確認できなかったんですよね。

ですが、基本的に長槍の柄は日本も外国も木を使うものが多いんです。本文にも書きましたが金属柄は重いんですよ。

そして、武器の製作過程にも武器種類とインゴットを選んで、それに応じた回数を叩くぐらいいしか書いてありませんでした。

ですが、主人公の扱う槍術の特性に沿うために木造柄と金属柄、2種類の槍を出すことにしました。

木造柄は敵の攻撃を受ける時の耐久値減少が3倍だが、良くしなり、軽いので筋力要求値が低くても、少し上級の金属を刃の部分に使用しているので結構な攻撃力を持つ。上級者向け。

金属柄はあまりデメリットらしいデメリットはない万人向け。という風にしようかと。

あと、この作品のSAO内通貨コルについても、オリジナル分が強いです。

文庫1巻での、高級防具素材《ダスクリザードの革》一つ25コル。文庫2巻での、木の実が落ちるのを待ってる男に言ったアスナの「ワームを一匹狩れば30コルにはなる」という発言。

エギルさん、いくらなんでもワーム以下はないんじゃないですか！？と思ひ混乱しました。

よって、コル関係は《はじまりの街》だけは、初期配布金で暫く暮らせるくらいの相場、という前提でかなり安めに、他は適度にという感じ考えました。ダスクリザードの革の件は一旦考えるのをやめ

ました。

とまあ、こんな感じでやっています。

**EX1 残された者（前書き）**

二木 健太くん視点の話です。

## EX1・残された者

うがあああ！ マジでついてねえええ！

何でこんなときに限って、滅多にしない呼び出しなんてしゃがるんだあのセンコーめ！

俺は、未だ白紙だった進路希望調査票に、適当に近くの高校の名前を三つ書いて家を飛び出そうとした。

「ちよつと健太！ 制服に着替えて行きなさい！ 制服に！」

あああ、もおおお、急いでいるんだっつーの！

だが、言うこと聞かないとナーヴギア取り上げとか普通にしておく袋なので、仕方なく俺は制服に着替えて家を出た。

駅に走りながらケータイで電車の時刻表を確認する。

げ！？ 微妙に乗り換えの待ち時間が多い！

だが電車以外、バスなどで行っては金が余分にかかる。

中学生の数少ない小遣いで買った《SAO》で、自身の財布はかなり寂しいことになっている。

仕方なく俺は、自分の最高速度　といっても100メートル2秒　で出来るだけ駅に急いだ。

「失礼しますっ！」

想定時間より二十分ほど遅れて、ようやく学校に着いた俺は、担任の吉田先生がいるだろう職員室に入った。

職員室では、数人の先生が休日出勤をしていた。いや、ホントご苦労様ですね。

俺はさっそく吉田先生に進路希望調査票を渡して、すぐに帰ろうとした。

だがしかあし

「 まあ、ちょっと待て」

加齢臭漂う三十路越えの中年男が帰ろうとする俺を止めた。

あ、ウソです。ウソ！ 華麗臭を纏ったダンディなオジ様でございますっ！

そんなオジ様（吉田先生）に、俺は一時間も拘束された。

月曜日を使うプリントを一学年分各教室に持って行けと……クソッ、俺は肉体労働系じゃないんだっつもの！

そんなこんなで先生の手伝いが終わり、やっと開放されたころには、すでに午後三時半を回っていた。

早く帰らないと！

俺は、すでに息切れしている体に鞭打って、家路を急いだ。

駅前に着いたとき、俺はふと違和感を感じた。

ん、何だ？

そう思っって回りを見渡すと、駅前にいる人たちが足を止めて、ある一点を見つめていることに気付く。

俺は、皆が見ている方を見た。

それは駅前デパートの壁面にある大きなディスプレイだった。

だが、問題はそのディスプレイに流れていた内容だった。

ディスプレイの中では、数人の男女が話し合っていた。

『 それで、茅場晶彦氏はどうしてこのようなことをしたのでし

よ  
』

『分かりません。しかし、これは大変なことになりましたよ』  
『未だ、VRMMORPG《ソードアート・オンライン》の仮想空間に捕らえられた約一万人の救出の目処は……立っていないそうです』

は？ 捕らえられた……？

何を言っているんだ、この連中は。

ソードアート・オンラインってのは、あの《ソードアート・オンライン》のことか？

今、東雲あづながログインしてて、俺がこれからログインする……あの《SAO》なのか？

『茅場氏、いやすでに茅場容疑者ですね。彼の言う通り、親族友人の方が《SAO》にログインした者のナーヴギアを外したり、その電源を切って停止させてしまった件がすでに二百名に届こうとしているらしいです』

『……これを聴いている皆さんは、どうかくれぐれもお気を付け下さい。自分達で無理になんとかしようとは思わないで下さい』

なんだ？ 何を言っているんだ、こいつらは……。

『本当に気を付けて下さい。これは』

その部分だけ、俺にはすぐくゆっくりに聞こえた。

『 現在、《SAO》にログインしている方の《いのち》に関わりますので 』

俺は考えるよりも先に走っていた。

いのち？ 命ってなんだ？ 命に関わるって……なんなんだ

よっ!?

「ゼハッ、ゼヒッ、ゼハッ……」

ガンツという音を響かせながら俺は乱暴に玄関を開けて、そのまま走るように二階にある自分の部屋に向かった。  
そして、勢いよく部屋に飛び込む。

「しのの」

突如、俺の目の前が暗闇に覆われた。

そして、俺は誰かに抱きしめられていることに気付く。

「な、お袋!?! 何してんだ! いや、それより東雲がつ!?!」

お袋は俺を押さえつけるように抱きしめ、じっとしている。そして数秒後、お袋がゆっくりと口を開いた。

「落ち着きなさい。……あんた今、彼に何をしようとしたの?」  
「な、何って……」

そんなのは決まっている。東雲を早く《SAO》からログアウトさせて  
あ。

「あんたは今、どこまで彼の状況を知っているの?」

お袋は俺を抱きしめたまま、優しい口調でそう言った。

俺が、今知ってるのは……。

「か、茅場晶彦が何かをして、《SAO》にログインしてるヤツが、ログアウト出来ないって……。ナーヴギアを外したり、電源を切ったりすると……い、《いのち》に関わるって……」

そつだ。俺が聞いたのはこれだけだ。しかしこれだけでも凄く嫌な予感がどんどん湧いてくる。

その予感を肯定するようにお袋は言った。

「……そうね。お母さんもね、さっきTVで見て知ったの。その茅場晶彦って人の声が流れてたわ。今、東雲くんがかぶっているナーヴギアを外したり、電源を切ったりすると、ナーヴギアから発する高出力マイクロウェーブで、脳が焼ききられてしまつて」  
「~~~~っ!？」

その事実にも、声にならない叫びを上げる俺。

そんな俺にお袋は続ける。

「実際にそれをして……その、亡くなった方がいるらしいの。だから、私たちは冷静に、冷静に対処しなくてはいけないの。……東雲くんのためにも。……解るわね?」

お袋は、俺の体を離して俺の目を見ながら言った。

「今からお母さんは、病院と東雲くんのご実家に連絡をしてくるわ。……いいわね。くれぐれも冷静に、ね」

俺の両肩を軽く叩いて、お袋は俺の部屋を出て行った。

俺は軽く放心しながら、東雲が寝ている布団に近寄った。

流線型のナーヴギアを装着した友人は、普通に寝ているように見える。

不意に、俺の右手が東雲の頭の方に動く。

俺の脳裏に、外しても問題ないんじゃないか、という言葉が浮かんだ。

「ッ」

だが、俺は右手を押しとどめた。

出来ない。出来るわけがない。

「……う、うそ……だろ。……なんで、こんな……」

俺は、嬉しかったんだ。

自分がゲームが好きで、人付き合いが苦手だということ、オタクと呼ばれ、ずっと虐められて……。

あのとき、東雲と初めて視線が合ったとき。東雲は俺をいじめから助けてくれた。

その後、俺が東雲に近づいたのは、いじめっ子たちの報復を恐れただからだ。

驚異的な身体能力を持つ東雲のそばにいれば、あいつらが報復する可能性も少ないと、そんな打算があった。

でも、実際話してみると、東雲はその斬れる様な雰囲気とは違って、意外と世間知らずで、ちょっとしたことでも感心して……つまり、俺は東雲と話すが、楽しかったんだ。

今までは、良かれと思ってしたこと、言ったことが全部裏目になって、ネットゲ仲間や学校のゲーム仲間ともすぐに疎遠になっていった。

だけど、東雲だけは違った。

ちゃんと俺の話聞いてくれて、俺の愚痴も聴いてくれて、そして俺にも自分の愚痴を言ってくれた。

正直、ここまでちゃんと話が続く奴は初めてだった。

でもそんな東雲は、家が武術の道場をしているらしく、遊ぶ暇もないくらい稽古に明け暮れているという。

俺は東雲にゲームの面白さを知って欲しかった。……いや違うな。俺が、一緒に遊べる相手が欲しかったんだ。

ゲームは一人でも出来る。でも仲間でする楽しさを知ってしまったら、一人でするゲームは空しいことこの上ない。

だから、俺はずっと東雲をゲームに誘ってきた。断られると知ってはいても。

でもあの日、ついに東雲と一緒に遊べると言ってくれた。

東雲のじーさんが亡くなったっていうのは悲しかったけど、でも俺は不謹慎だとは思ってたが東雲とようやく一緒に遊べることの嬉しさのほうに勝っていた。それが申し訳なくもあつたけど。

東雲とSAOのことを話すのは楽しかった。あいつはゲームや機械のことは全然知らなかったから教えることがいっぱいあったけど、それすらも俺は頼られてる感じがして嬉しかった。

「……なのに……なのにっ……！」

なんでだ。なんで俺はいつもこうなるんだ。俺が仲良くしようとした人は、みんな俺から離れていく。

終いには、東雲も……。

「……俺が悪いのか！俺がっ！東雲を誘ったから！俺が東雲に近づいたからこうなったっていつのかっ!？」

つい、カッとなってすぐそばの本棚の淵に拳をぶつけてしまった。

「あ!？」

本棚から落ちた漫画が、東雲の顔に当たりそうになった。俺は急いで東雲に覆いかぶさるようにして、背中で落ちてきた漫画を受ける。

「……………うっ、うっ、……………」

別に漫画が当たったから呻いたわけじゃない。

惨めだった。泣くしか出来ない自分が、相当に惨めだった。

「……………ゴメン。東雲……………ゴメンよ……………」

零れた雫で東雲の顔のそばに染みを作りながら　俺は、悔しさに震えることしか出来なかった。

## EX2・異質なその人（前書き）

続けて主人公とは別の人視点のお話です。

## E X 2 ・異質なその人

あたし　内石奈緒うちいしなほは面白おもしろそうなことが大好きだった。

特に体を動かすこと、スポーツとかは色々やった。逆に勉強は苦手なんだけどね。

あと、興味が出たものには何でもかんでもすぐに飛びついてしまう癖がある。

双子の姉である美緒みおには、今までそれでかなり心労をかけて来たと思う。

《SAO》もその一つだった。

クラスメイトが話しているのを聞いて、すっっごく興味を引かれた。

だって、剣や盾を持って実際にモンスターを倒せるんだよ!?

女の子としてはちょっとだけ自分が他の子とは違うと解ってはいるけど、あたしだって「必殺〜!!!」とか言ってみたい。

だから、あたしは姉の美緒と、クラスメイトにして親友の筑波つくば

佳奈美かなみを誘ってSAOを三人でプレイしてみようと行動を起こした。でもすぐに挫折を味わうことになる。

「か、買えないよ〜」

そう。SAOがどこに行っても買えない。在庫が無いらしい。

せっかくお父さんに無理言っ《ナーヴギア》を買って貰ったのに、肝心のソフトが無いとSAOは出来ない。

そりゃないよ〜と思っていたところに佳奈美が来て言った。

「…………ふっ、わたしに感謝するツスよ。じゃじゃ〜ん!　どーツスカ!?　お探しの《SAO》ツスよ〜!」

地獄に仏とはまさにこのことだった。

でも、隣の県まで探しても無かったのにどこで手に入れて来たんだらう？

そのことを訊くと。

「うっ……うう、わたしは……わたしはっ……穢れてしまったツス！ もうこれはウルトラジャンポパフェ一週間分くらいじゃきかないくらいの貸しツスからね!？」

人差し指を突き出しながら「犯人はお前だ」的に言ってきた佳奈美。

何でも、オタクなイトコに頼み込んで条件付きで譲ってもらったという話だった。

「じ、条件？」

「け、穢れてしまったということ……そ、その……つまり……あう。」

少し赤面してしまいつつも、興味に逆らえず訊くと。

「そ、それは……こ、この前の休みにあった《コスプレ撮影会》つてのに無・理・矢・理、出演させられたんよ……!!!!」

魔法少女なんてもうキライツス！なんであんなパンツ見えそうと  
うかが見えちゃうような服着てるんすかと地団駄を踏んでいる佳奈美。

あたしはガクつと脱力してしまった。

確かに佳奈美は、同姓のあたしから見ても可愛いと思う。

癖っ毛なセミロングの茶髪を無理矢理纏めようと努力しているように見える猫の髪留めが凄く可愛らしくて似合っている。

そのイトコさんが、そういう服を着せたがったのも解らなくはない。

まあでも、いつもは口調のせいでお笑いキャラに見られることが多いんだけどね、うん。

ともかくそういうわけで、あたしたち三人は晴れて《SAO》が出来るようになった。

公式サービスが始まる日、あたしたちはそれぞれの部屋からSAOにログインした。

三人ともVRMMOというものが初めてだったから準備に手間取って、ログインしたのは午後二時過ぎ。開始から一時間も遅れてしまった。

別に開始時間ちょうどにログインしなきゃいけないってことはないんだけど、なーんか悔しいんだよね。

でも、そんなこともログインしたら全て吹き飛んでしまった。

あたしも、美緒も佳奈美も《完全<sup>フル</sup>ダイブ》っていうのは初めてだったから、SAOの世界を見たときはすっごく感動した。

物語の中に出てくるそのままのファンタジーな世界に、あたしたちは魅了された。

「うわ　っ！」

「……すっ！」

「こ、これ……マジで《仮想世界》なんスか？　ちょっと信じられないくらい色々スゴいんスけど……」

このときのあたしは、もう興奮で周り　この場合は周囲の視線

が見えなくなっていて、最初に降り立った場所《はじまりの街

》の中央広場から見える全てのものに興味を引かれて、それに突撃

していった。

「ワ イー!!」

「もっつ、……奈緒!」

「あーダメダメ。ここじゃあ、あたしは《ルネリー》だよ? あ、ネリーって言うほうが呼び方としていいかな? ね、どう思う《レイア》」

「うっ……ち、ちょっと恥ずかしいよね。自分で付けた名前です呼ばれるのって……」

「2人はいいじゃないですか! わたしなんか《チマ》ツスよ? なんですか《チマ》って! チマチマとか語尾に付ければいいんですか!?!」

「かな……チマは名前を打ち間違えて気付かなかっただけでしょ? 自業自得なんじゃ……」

「う、うわ〜くん! そんなことは判ってるツスよ〜! でも言わなきゃやってらんねツス!」

佳奈美 チマは、最初は《リマ》と付けたかったらしい。RとTが隣同士だったからやねんす!と言い訳を喚いている。

キーキー騒ぐ佳奈美 《チマ》。

それを見て笑うあたし 《ルネリー》。

騒ぐ佳奈美とはしゃぐあたしを宥めようとする美緒 《レイア》。

これから、三人でスツゴイ大冒険が始まる。……と、あたしたちはそう思っていた。

『以上で《ソードアート・オンライン》正式サービスのチュート

リアルを終了する。プレイヤー諸君の 健闘を祈る』

その人、茅場晶彦という人が言ったことを、あたしは最初理解できなかつた。

街中を二人で歩いていて、ようやくお互いをSAOでの名前で呼ぶのに慣れてきたそのとき、いきなり青い光に包まれたかと思つたら、さっきまでいた中央広場に移動して……。

突然、空に現れた大きい不気味なローブの人影。上空から響く茅場晶彦つて人の声。

あたしたちに、このSAOの《仮想世界》から出れないと、HPがゼロになつたら死んじゃうと言つてた。

「……あ、あ……あう……」

「な、なに言ってるんスカね、あの人……アハ、アハハ、ハ……」

あたしの横では、放心しているレイアと、あの言葉を否定したいのか、乾いた笑いをしているチマがいる。

あたしは周りを見回した。

多分、無意識に助けを求めていたんだと思う。

言葉では否定してるけど、あの人が出たことは真実なんだって、あたしも美緒も佳奈美もきつと心で感じてる。

だから探した。

何をつて訊かれても解らないけど……何か、この状況であたしたちに必要なもの、それを探していた。

でも、周りは想像以上に混沌としていた。

さっきまであんなに美しかった中央広場の風景は、喜怒哀楽の『怒』と『哀』で埋め尽くされていた。

その情景は、嫌がおうにもあたしの精神を更に打ちのめそうとした。

「……………え？」

そんな時、あたしは見た。

《その人》は、周囲が負の感情に吞まれている中、まるでそこだけスポットライトが当たってるかのように、一人平然と立っていた。まるで、暗い沼地に咲いた一輪の花を思わせるような、こんな状況の中では逆に異質とも言っていいような佇まい。

あたしには、それがどこか神々しくさえ見えた。

ふいに、その人がどこかに向かって歩き出した。  
それを見たあたしは 駆け出していた。

「え？ ネリー？」

「……………ほえっ!？」

後ろからレイアとチマの声が聞こえた気がしたが、今はコレがあたしが優先するべきことだと頭の中で誰かが叫んでいた。

「あ、あの……………あのっ……………！」

何を言おうかなんて考えて無かった。だけどあたしは《その人》に声をかけていた。

でもその人は、あたしの声が聞こえなかったのか、その歩みを止めようとしなかった。

あたしはもう必死にその人の横に走って行って、再び声をかけた。

「あの！ す、すみませんっ！」  
「…………？」

その人が、足を止めてこちらを見た。

それだけで、あたしは思わず息を飲んだ。

全てを見透かされそうな深い深い蒼の瞳。鋭く尖った氷を連想させるような表情。なによりその人の雰囲気からは《普通》や《日常性》といった、この状況においては“逆に”非常性を感じさせられるものがあつた。

そんな理由であたしが放心していると、その人の口が開いた。

「……………何か」  
「ネリー！」

でも、その人の言葉に割り込むようにレイアがあたしを呼びながらチマと一緒に駆けてきた。

「ハアツ、ハアツ……………もう、いきなり走りだして……………」

「ヒー、ヒー……………そ、そうツスよ！ というかこんな場所で置いて行かないで欲しいツス！」

「ご、ごめんゴメン」

正直、二人のことをすっかり忘れていた。目の前のこの人に意識が捕らえられていた。

こんなことになってしまって しかもあたしが誘ってSAOに来たのに、二人には申し訳ないことをした。

そんな気持ちを込めて でもいきなり走ってしまった自分の奇行にちよつと照れてしまい、少し軽い謝罪になってしまった。

「……………それで、俺に何か用か？」

思わずビクツとなるあたしたち3人。そうだった、今度は逆にこちらを失念していた。あたしのバカ！

その人にもすぐに謝罪をした。

「あ、す、すみません！ こっちから声かけたのに……………」

「……………いや、それはいい。で、何か用なのか？ 正直、声をかけられる覚えはないが……………」

溜め息ともつかない小さな息を吐くその人。呆れられちゃったのかな……………？

と、それは置いておいて用件、用件。えーと、うーと、あーと……………。

「あ、はい。えとですね。私たち、そのVRMMOって初めてなんです。……………なのに、こんなことになっちゃって。どうしていいか解らなくて……………それで、その……………色々と教えてくれる人を探してるんです」

正直なにも考えていなかったのだけど、自分の口から出た言葉は結構理由としてはちゃんとしているように思う。……………ふう、あぶないあぶない。

内心けっこう混乱しているあたし。そんなあたしに向かってその人は答えた。

「……………すまないが、人選を間違えている。俺もVRMMOいや、ゲームというもの自体これが、《SAO》が初めてだ。俺ではお前たちの疑問には答えられない」

え……？

今度は一瞬完全にフリーズしてしまった。断られる場合の言葉なんて全然考えてなかったから。

あたしは必死に言葉を考えた。

「あ、え……じ、じゃあ、ど、何処に向かおうとしていたんですか？」

そうだ。どこかへ行っちゃうんじゃないかって思って声をかけたんだった。

あのときは、気付いたらよく解らないままに必死になって追いかけてた。

あたしの思考には興味なし、という顔をした目の前の人が口を開く。

「……武器屋だ。さっき街を回った時に場所を確認していた」

その人の言葉に、再び一瞬思考が停止したような感覚を受けた。

「何で武器屋に……？もしかして、外に出る気なんですか？し、死んじゃうかもしれないんですよ！？」

ありえない、そう思った。だってもしも、もしもモンスターの攻撃を受けて自分の視界に映っているこの青色の横線が消えてしまつたら、ホントに死んじゃうかもしれないのだから。

自分でもよくわからないけど、あたしはその人に向かって叫んでいた。

もしかしたら、さっきのことで溜め込んでいた負の感情が、今更になって吐き出されたのかもしれない。

でも目の前のその人は、あたしの叫びにも顔色一つ変えずに言っ

た。

「……茅場晶彦と名乗る者が言ったな。第百層のボスを倒さなければ俺たちは開放されないと。……だから俺は、自分に来ることをしようと思った。それだけだ」

自分に、出来る……こと……？

そんなこと考えもしなかった。こんな状況で、こんな場面で、そんなことを考え付くなんていたい何人いるのだろうか。

あたしがそんなことを思っていると、あたしの背中からチマがその人に向かって言った。

「……な、なに言ってるんすか！ 危ないッスよ！ ここで、安全な場所を外からの救出を待ったほうが」

「救出は無いだろう」

「な！？」

チマの言葉を、チマの考えを真つ二つにするかのように、その人は言った。

「もし、俺が茅場晶彦の立場だったのなら……1パーセントでも、自分以外の外部の手によってこの状況を打破できる可能性があったら、そもそもこんなことを実行はしないだろう。天才と呼ばれる人物なのだったら、尚のことそこは理解しているはずだ。……ならば、外からの救出は無いと考えていいだろう。俺たちは、茅場の言う通りにするしかないんだ。このゲームをクリアして、茅場本人に開放してもらおうしか……この世界から脱出する方法は……無い」

確かに……そうだ。あたしだって、自分が犯罪者になるかもしれないって分かって、それでもしなければいけないことがあるなら、

失敗の確率は出来るだけ無くしておきたい。無くしてからじゃなきや、きつと怖くて出来ない。

「……………」

その人の正論に、反論が出来なくなったチマが黙る。

「……………俺は街を出てモンスターを倒す。レベルを上げて強くなる。……………それが今、俺に出来る最良の事だと思うからだ」

無表情にそう淡々と告げるその人。でもふと雰囲気を緩め、さつきとは違う、やや優しさを含んだ声で続けた。

「……………だが、別に無理に戦おうとしなくても……………街に留まっただけでもいいと思う。人には向き不向きだってあるだろう。戦いたいと思う者、戦う決意をした者だけが戦う。逆に戦いたくはない、戦いが怖い、死ぬのが怖い者は……………無理に街を出なくても良いと俺は思う。本当の命が懸かっているのだから怖くて当然だろう。それを誰も責める事は出来ないし、逆に……………俺のように外に出て行く者を引き止める事も出来ない。……………自分に出来ることを考えて、それを行う。それが、今俺たちがすべきことだろうしな……………」

自分に出来ること。この人は、きつとそれを見つけたから　うん、それを見つめる力を持ってたから、あんなにも輝いて見えたんだと、今更ながら思う。

「あ、あのっ……………あなたは、こ、怖くないんですか？……………」

あたしの双子の姉の美緒　レイアが、少し人見知りな所があるために震えながら、それでも頑張ってた。

その人は、数秒間レイアを　　レイアの瞳を見てから、やや嘲笑めいた声で言った。

「……別に、死ぬのが怖くないわけではない。……ただ、俺はこの《SAO》の世界で出てくるどんな怪物よりも怖い存在を知っている。……俺が平然としているように見えるのは、恐らくそのせいだろう。それより怖い物なんて……想像できないのだから」

その人が言ったことは、あたしにもレイアにもチマにも解らないことだ。

逆にあたしの思う一番怖いものを想像してみた。……ぬ、思いつかない。

怖い物は確かに有るにはあるけど、そこまでかと言われるとそうでもない。

自分が死ぬかもしれない状況よりも恐ろしいことなんて、きっと今までのほほんと生きてきた私達には、本当の意味で想像が出来るんだと思う。

「……………」

レイアもチマも、その人の言った言葉を自分なりに考えているようだ。

「……あ」

いきなりその人は、あたしたちに背中を向けて、別れの言葉もなしに歩いて行ってしまった。

背中を向くときにチラリと見えたその人の横顔。最初の平然とした顔ではなくて、申し訳なさそうな、どこか寂しげな表情に見えた。やや早足で歩き去るその人の背中を見つめるあたし。

その人の背中が人ごみに紛れて見えなくなった時、二人が声をかけてきた。

「……………ネリー」

「……………行っちゃったツスね」

ネリーが呼びとめた理由なんとなく解ったツス、と言ってくれるチマ。

その言葉に、レイアも小さく頷いた。

「……………つ、さて！ これからどうするツスかね!？」

暗い雰囲気無理矢理吹き飛ばそうとしているのか、大きな声でチマが言った。

「……………うん。そうだね……………」

レイアも、さっきよりは顔色が良くなったようだ。

あたしも人の事は言えないかもだけど、レイアもチマも、先ほどのゲームがゲームでなくなった時の顔の青さといったらなかつた。

「ん……………」

あたしは腕を組んであたりを見回した。

気が付けば、中央広場からは結構人が減っていた。……………それでも残って放心している人が圧倒的に多いけど。

あたしはさっきからずっと考えていた。あの人の言った《今、自分に出れること》というものを。

「ねえ」

「……うん？」

「なんスか？」

だから、あたしはその提案を未だ眉間に皺を寄せて唸ってる二人に言った。

「街の外に出て、モンスター……倒してみない？」

予想通りというか、その提案に二人は目をまん丸にして驚いていたから、こんな状況だっというのにあたしはつい笑ってしまった。

そう、笑うことが 出来たんだ。

#### 4・闇夜の初実戦（前書き）

主人公視点に戻ります。

#### 4・闇夜の初実戦

第一層主街区《はじまりの街》北西ゲート。

その巨大な門を通り抜けた俺は、一度立ち止まった。

辺りはすっかり暗くなつて、はっきり言つて死の危険がある街の外に出る時間じゃない。

街を囲む城壁の上の松明からの明かりで、街の周りは明るいのが、すぐ100メートル向こうはすでに暗闇で見えない。

「……………」

しかし俺は、歩き出した。

歩きながらステータス画面を開けて先ほど買った《ウッドハンドルスピア》を装備する。

いきなり右手に現れた槍に少し驚いたが、ステータス画面を消して、少し振ってみる。

「……………ふむ」

良くもないが、悪くもないか。だが十分に扱える自信はある。

ふと槍を振っていたときに、俺は前に二木が言っていたあることを思い出した。

SAOは全てにおいてスキルが大事なんだけど、スキルスロットに限りがあるからほんつとにどれ上げるか迷うんだよね。

そうか、スキルスロットを忘れていた。

俺はステータス画面を開いて、自分のスキルスロットを見る。レベル1の俺には二つのスキルスロットが与えられている。勿論、今

は両方とも空だ。今まで忘れていて手つかずだったのだから当然だが。

俺はその一つに迷わず《両手用長槍》を入れた。だが、もう一つは何にしようか淒く迷った。多すぎるのだ。スキルの種類の量が。二木の言っていた意味が今ようやく理解できた。直接戦闘に関わってくるスキル、間接的に戦闘に関わってくるスキル、生産系スキル、趣味系スキル、その他のスキル。それぞれ数十では利かない数がある。

俺は、はじまりの街から伸びる街道から少し離れた場所で、そのスキルを一つ一つ見ていた。

そのとき

「……………」

スキル表ウィンドウを見ていた俺の視界の端に、赤いカーソルが見えた。

赤いカーソル、それは敵の証。こんなに近くまで接近されていて俺が気付かないなんて、正直ありえないと思った。その赤いカーソルの方に意識を向けると　一匹のイノシシがいた。

モンスター名《フレンジー・ボア》。

暗くてよく解らないが、恐らくこちらに気付いていない。いや、気付いていても攻撃しようとしていないだけか。

これは確か《ノンアクティブモンスター》というやつだ。ノンアクティブモンスターは、こちらの攻撃の標準が自分に向けられたりしない限り襲ってこないとマニュアルに書いてあったと記憶している。

俺は一度深呼吸をして、槍を構えた。

東雲流古武槍術の基本の構え、《弧紋こもんの型》。

相手に、利き腕とは逆の半身を前に出すようにして横向きに腰を

落とし、槍の切先を地面ギリギリまで下げるように構える。この時、利き手は槍の石突から拳二つ分中の柄を、カコブを作るような腕の形のまま手のひらを上に向けたような感じで掴む。利き手と逆の手は、槍の中腹部分からやや切先側をしっかりと指で輪を作って、だが余裕を持ってその中に通すように槍を持つ。

この構えは、船のオールを動かすように槍を扱う構えだ。構えたまま利き手をただ思い切り振り下ろせば、下から上に半円を描くように槍の中腹を押さえる手を支点にして切先が跳ね上がる。相手の攻撃を捌くにも、逆にこちらの攻撃にも使える動きが出来る初動の隙を限りなく抑えた構えだ。

俺が構えても、目の前のイノシシはこちらを意識しない。

弧紋の型は基本的に受けの型。しかし、上半身の構えはどんなときでも応用は利く。俺はその構えのままイノシシに突進をかけ、イノシシに槍を放った。石突きの方を持って上げてある右手を、勢い良く降り降ろしながら左手にくつつけるように押し出す。そうすることで、槍の切っ先が下から螺旋を描くような突きを放つ。

俺が攻撃を放った瞬間、イノシシは俺に気付いたようにその顔を上げたが、時すでに遅し。イノシシの側面 前足の付け根と肋骨の隙間、心の臓があると思われる場所に、螺旋が描く円が集束するような軌道で、槍の刃が突き刺さった。

普通ならそれで終わり。生き物ならそれで絶命するはず。

しかしイノシシは、瀕死には程遠いような動きで身をよじって槍を抜き、小走りで少し離れてから再びこちらに突進してきた。

「……少し、気味が悪いな」

イノシシの生命力（HPバー）は明らかに減っている。だが弱るのではなく、逆に興奮した様子で突進してくる。

このイノシシの一撃を受けたら死ぬのだろうか？

自分の死が近づくのだろうか？

そんな考えが一瞬浮かんだが、しかし鼻息荒く近づいてくるイノシシには、今まで幾度となく稽古で対峙してきた祖父のような圧力は感じない。

俺は突進してくるイノシシを、横に回りこむように冷静に避ける。避け続ける。そのまま少しだけイノシシを観察する。イノシシは基本的に突進しかしてこない。たまに目の前で急停止して頭を振って牙を当てようとしてくるが、急停止から頭を振るまでは少しだけタイムラグがあるので楽に避けられる。

イノシシの攻撃パターンを把握した俺は、先ほどとは逆の前足と肋骨の隙間に何度か槍を突きたて、イノシシを仕留めた。最後に突き刺した瞬間、イノシシは硬直しその後爆散。輝く細かいガラスの破片のようなものが周囲に散らばって透き通るように消えていった。

「……以外に手間取ったな」

梶子摺った、ではなく手間取った。予定では最初の一撃で仕留めていたはずだ。

HPを全て削らなければ、敵はその攻撃を止めることはしない。解っていたはずだが、やはり違和感が残る。

「……だが逆を言えば、俺も一撃もらったくらいじゃ動きは鈍らないということか」

死中に活。怪我の功名。

ようは相手が倒れるまで攻撃を続ければいいと、それだけだ。

俺は二匹目の獲物を探して歩き出した。

歩きながらふと思う。ステータスウインドウを出してスキル表を見る。この世界での自分の体 《仮想体<sup>アバター</sup>》では、以前のように周囲の気配を察することは出来ないようだ。恐らく、この仮想世界では、現実世界で出来たことを当たり前に思っではいけないのだ。

それは、逆にも言えるのことだろう。現実世界で出来なかった事もこの世界なら出来る、と。

しかしこのままじゃ、この先不意打ちを受ける可能性が高い。

俺は先ほどスルーした一つのスキルを見た。

サーチング  
《索敵》スキル。

アクティブオブジェクトを認識できる範囲を、熟練度に比例して広げてくれるスキルだという。

残り一つとなったスキルスロットに、それを入れた。

「！」

入れた瞬間、またもや視界の隅に赤いカーソルが現れる。

索敵スキルのお陰ではなく、向こうからこっちに移動してきたようだ。

《フレンジー・ボア》。

先ほどのよりも、一回りだけ大きいイノシシが見えた。

無論、こちらをまだ敵として認識してはいない。

俺は開いていたスキルスロットの画面の《両手用長槍》のスキルを見た。

ソードスキル無しにSAOは語れないんだよ！ そりゃ硬直時間みたいなデメリットはあるよ？ で も普通の攻撃とは一撃の威力が段違いなんだ！ その差約三、四倍！ 急所なら約五、六倍は違うんだよ！？ もうソードスキル様さま〜って感じだよね！

グツと親指を突きあげた友の姿と言葉を思い出す。

「……ソードスキル、か」

俺はイノシシに気付かれないように小さい声で呟く。  
急所ならそのダメージは約五、六倍。雑魚ならほぼ一撃死だろう。  
かなりの効率のよさだ。

俺は、現在自分の使えるソードスキル一覧を確認する。

《両手用長槍》スキルをスロットに入れたことで増えたソードスキルの一つ。

両手用長槍基本技《スラスト》。

スキル名のすぐ横にある【Sample】のボタンに触れると、  
もう一つウィンドウが現れた。

そのウィンドウには、真っ白な部屋で槍を構えている真っ黒な人が映っている。

そして、画面の端には再生、停止、スロー再生、視点変更などのボタン。

これはソードスキルの見本を見る事が出来る画面だ。

これを見て技のイメージを頭に叩き込み、実際に模倣出来るように練習する。

一応練習場所として、結構な広さの訓練所が《はじまりの街》の各所にあるらしい。

俺は再生ボタンを押して、《スラスト》の見本の動きを見る。

ふむ。この程度なら練習は必要なさそうだな。

見本動画は、技の動きだけではなく、初動の形とシステムアシストの開始を矢印と文字で説明してくれる。

基本技だけあって、そう難しい技でもなかった。

俺はソードスキルとやらを試すべく、槍の切先をこちらに背を向けているイノシシへ向けた。

俺はイノシシに向かって走り出し、技をイメージしながら、槍を持ちながら引き絞った両腕を前に突き出すような初動を始める。

攻撃を放とうとした俺に気付いたイノシシが、ぶぎっと一鳴きし

てこちらを向く。

「っ!?!」

突如俺の体が勝手に加速して動き、明るい緑色の光を振りまきながら槍の切先が、振り向いたイノシシの首の後ろ辺りへと吸い込まれるように突き出された。

ビシイイとガラスを叩いたような音とともに槍が直撃し、イノシシはその反動で吹き飛ばされ、何度か横向きに回転した後、自然な斜め向きままの状態で硬直し、内側から爆発したかのように、輝く細かい破片をばら撒きながら消えていった。

……確かに一撃で倒せた。確かに威力は段違いだった。  
しかし。

「……………使い、難しい」

いきなり加速しだしたように勝手に勝手に動く自分の体。普通、筋肉に力を入れた箇所関節は動かないのに、力を入れているのに動いている。動かされている違和感。

自分の意思で動く体に重なるように、何者かの意思で力を加えられているような……そんな感覚。

凄く違和感が付きまとう。かなり違和感が付きまとう。やはり違和感が付きまとう。

確かに今の《突き》は、速度、威力、そして形、ともに 自分で言うのもなんだが 素晴らしかった。

だがその突きは、普通ならこの体では出来ないはずのもの。このLv1の身体能力では絶対に出来ないはずのものだと俺は確信している。

しかし出来てしまった。それがソードスキルなんだと言われればそれまでだが、俺としてはそこがまた物凄く違和感をもたらして…

…正直言えば使い辛い。使い難い。

そして、その動きの後にある数コンマの強制技後硬直時間。それが違和感を更に乗せする。

技というものは繋いでナンボ、と祖父も言っていた。

技自体を工夫して技後硬直を無くし、次々に技を繰り出すよう指導を受けてきた俺にとって、その違和感は相当なものだ。

他のプレイヤーはこの違和感に何とも思わないのだろうか。

《ソードスキル》。

威力は高い。そして技の速さもある。勝手に相手に合わせて向かっていく感覚もあったので、恐らく命中補正のようなものも付いているのだろう。

だが、俺には。

「……………やはり、使い辛い」

使い続ければ慣れるのだろうか。

だが、この如何ともしがたい感覚は、あまり何度も感じたくないというのが本音だ。

結局俺は、今の所は絶対にソードスキルが必要であるということもないと考え、しばらくは通常攻撃のみで戦うことにした。

そうと決めたら次なる獲物。

ソードスキルに少し戸惑ったが、これまでの二回の戦闘は、敵に手こずるといったことはなかった。

少しペースを上げて戦ってもいいだろう。

俺は、街から離れすぎないようにモンスターを探し始めた。

その後、イノシシやイモムシなどの十六匹ほどのモンスターを倒した俺は、街への帰路についていた。

ソードスキルを使わなかったせいで、一匹あたり三〜五回ほど攻撃をしなければ倒せなかったが、それでも対して危なげなく H Pもまったく減ることもなく戦うことができた。

「……この程度なら、そうそう命の危険に陥ることも無いな」

だが、これから先は解らない。今さっき倒したモンスターは全てレベル1の雑魚も雑魚。

攻撃も単調なものばかりで、冷静に観察すればどうということもなかった。

しかし、油断はできない。俺はこのSAOというものを知らなすぎる。

「……情報収集もしなければな」

強くなること、情報をあつめること、そして 死なないこと。

俺は、自分のすべきことを再確認した。

そんなときだった。

「……………?」

俺が今まさに向かっている《はじまりの街》のゲート付近で悲鳴が聞こえた。

いや、今もなお聞こえている。

すでにほぼ周りが見えないくらい暗い時間に街の外に出る奴が、俺以外にいようとは。

俺は、早足で悲鳴のする場所へと向かった。

#### 4・闇夜の初実戦（後書き）

主人公は、すでにこの《仮想》の世界を、《現実》として受け入れています。現実と混同してるとも言えますが……。しかし、それが逆にメリットにもデメリットにもなるということには、まだ気付いていません。

ご感想、ご質問、ご指摘ありましたら、宜しくお願い致します。

## 5・葛藤の末に

「こ、このっ！ えいつ！ あ、あれ？ きゃっ！？」  
「ギャー！ こっち来んなッス！」

何をしてるんだ、あの子たちは……。

悲鳴が聞こえた場所へ向かった俺は、数十メートル離れた場所で一匹のイノシシと戦っている。ようには見えないが、先ほど話しかけてきた少女たちを見つけた。

金髪の少女が初期装備である《スモールソード》を振るって頑張っているが、何かに気を取られているようで、敵であるイノシシに集中できていない。

茶髪の少女はスモールソードを持ってはいるが、腰が引けてて、剣を振るときに目を瞑ってしまったので空振りが多い。

ふと、銀髪の少女が見当たらないことに気付く。

まさか……。

嫌な想像が浮かんだが、金髪の少女の後方にあの銀色の髪を見つけて少し安堵する。

銀髪の少女は地面に座り込んでいるように見える。恐らく腰を抜かしてしまっているのだろう。

金髪の少女がイマイチ集中できていないわけが解った。戦えない銀髪の少女を守っているのだ。

だがこのままではジリ貧だろう。

攻撃はあまり当たっているようには見えない。だがイノシシの攻撃はほとんど避けられてはいる。

しかし、動けない銀髪の少女への攻撃は受け止めなくてはならない。

「ネ、ネリー！」

「ぐ……だ、大丈夫だった」  
「くっそー！ こっち来いッスよー！」

その様子を遠目で見ながら、俺の思考は混沌に呑まれていた。

何であの子たちはこんな時間にここにいるんだ？

何であんな拙い戦い方をしているんだ？

あの子たち、このままじゃ誰かが死ぬかもしれない。

では、俺が助ければいいのではないか？

俺は一度、あの子たちを見捨てた。そんな俺がどんな顔で助けに入ると言うんだ。

助けるなら、最初から助けていれば良かったのに。

助ける側には、助けた後の責任も覚悟する必要がある。俺にその覚悟があるのか？

俺は……どうするんだ？

俺は……どう、したいんだ？

時間にすればたった数秒。しかし、その間に幾つもの自問自答が頭の中で繰り返されていた。

そして、その思考の結論として俺がとった行動は。

どうしよう、どうしよう！？

甘かった。今更後悔しても遅いけど、そう思わずにはいられない。いくらHPがゼロになったら死んでしまいかもしれないとはいえ、それでもゲームなのだから攻略できないわけがない。

それに、こちらは三人。こんなスタート地点に出てくるモンスターなんて、楽勝に勝てると思ってた。

《あの人》の言葉を聞いて、自分に出来ることを考えたあたしは、自分がこの世界で今出来ることといったら戦うことしか思いつかなかった。

他にも色々あるんだろうとは思ってたけど、このSAOの中であたしが知っていることは少ない。そもそも自分自身が剣でモンスターと戦うためにSAOをやるうと思っただから、どうせならそのままやってやるうと思った。

そして、結論が出たら止まらなくなるあたしは、浮かない顔をして二人を強引に説得して、すでに辺りが暗くなっている時間だというのに街の外へと飛び出した。

これはあたしの悪い癖だ。思いついたら止まらない。あたしはこのとき、モンスターを格好良く倒す自分を想像してやまなかった。ただど実際にモンスターに遭遇したら、そんな考えはどこかにいってしまった。

独特の粘液質に光る目、よだれが滴り荒い呼吸をする口、生理的に受け付けないその泣き声。

モンスターって言うからそんなに意識はしてなかったけど、日本語で言えば《怪物》だ。

そう、まさに怪物。勢いよく突進してくるその姿は、単調な動きなのだけど、何故か威圧感で動けなくなる。

目の前のモンスターはイノシシに似ている。だけど本物のイノシシなんてあたしは見たことはない。きつとレイアもチマもそうだと  
思う。

デフォルメされたものしか見たことのないイノシシ。だけど目の前のソレは、辺りの暗さも相まって相当に恐怖を駆り立てる姿に見えた。

いくつものスポーツを経験したあたしが、こんなに動けなくなるなんて……。

頭の中で《死ぬかもしれない》という言葉がいくつも思い浮かんだ。

気の弱いレイアは、その重圧に耐えられなくなったのか、足を縛れさせて転んで、地面に座り込んだまま動けなくなってしまったようだ。

この状況を作ってしまったのはあたしだ。だから巻き込んでしまった二人は絶対に助けたい！

あたしはレイアの前に立って、イノシシに向かって必死に剣を振った。

「こ、このっ！ えいっ！ あ、あれ？ きゃっ!？」

結果は空振り。逆に剣に重みでバランスを崩してしまう。

「ギャー！ こっち来んなッスー！」

あたしの剣を潜り抜けたイノシシは、その勢いそのまま旋回してチマの方に向かった。

バンザイしながらイノシシに追いかけられるチマの姿は、こんな状況にも関わらずコミカルで、あたしは少し冷静になることが出来た。

「っ、えーい！」

チマを追いかけるイノシシを先回りするようにして、あたしは剣を振り下ろした。でもあたしの攻撃はイノシシのお尻をかすめただけだった。

攻撃を受けたイノシシは、びぎつと鳴いて今度はあたしに向かって突撃してきた。

でもあたしなら、避けられるっ！

そう思ったが、自分の後ろにレイアがいることを思い出す。

あたしはとつさに剣の腹を支えるようにして防御体制をとり、イノシシの突進を正面から受け止めた。

「ネ、ネリー！」

「ぐ……だ、大丈夫だった」

後ろから聞こえるレイアの心配する声に応える。

よかった、ちゃんと守れた。漫画で見た防御を真似してみたけど結構上手くいったみたいだ。

痛みというより、痺れたような感覚が体に残ってるけど。

「くっそー！ こっち来ーいッスよー！」

剣をブンブンと振り回してイノシシの気を引こうとしているチマが見える。

「ネ、ネリー……え、HPがっ……」

「……え？」

目を見開いて指をさすレイアの声に、自分のHPを確認する。

「……………あ」

見ると、あたしのHPは一割ほど減っていた。

一割。あと九回攻撃を受けたら、あたしは 死ぬかもしれない。あたしは再び体が強張って動けなくなっていくのを感じた。

「ネリー！ そっち行ったッスよ！」

チマの叫ぶ声が聞こえるが、金縛りにあつたようにあたしの体は動かない。

一度、自分の死を意識してしまつたら、もう駄目だ。

多分、レイアは早くにこういう状態になってしまつたんだろうな。イノシシの姿が段々大きくなって来るのを見ながら、あたしはそ

んなことを考えていた。

「ネ　奈緒っ！！」

後ろから美緒の叫び声が聞こえる。

駄目だよ美緒。SAOではあたしはルネリー……でしょ？

視界いっぱいイノシシが見える。防御はもう間に合わない

「キヤツ……………え？」

ドゴツ！という打撃音が目の前から聞こえた。

でもそれは、イノシシがあたしにぶつかった音ではなかった。

あたしはとっさに瞑った目を、ゆっくりと開ける。

「……………あ」

あたしの目に映ったのは《背中》だった。その背中を見るのは、これで三度目。

一度目は、中央広場であたしが追いかけたとき。二度目は、別れの言葉も無くあたしたちから去っていったとき。

「……………あっ……………ああ……………」

《その人》は、いつ見ても変わることの無いその横顔で　あたし  
の前で槍を構えていた。

仕方ない。

そう、思うことにした。

何故この子たちがこんな時間に街の外へ出ていたのかは解らないが、それでも解ることはある。

この子たちは今、命の危機に瀕していること。

そして、俺はそれを助ける力を持っていることだ。

これで助けないことを選択するのは、まず人間としてありえない。俺はそう思う。

助けた側の責任。助けた後のことは 助けた後に考える。

そういう結論に至った。

「っ」

槍が得意としている攻撃は、その長いリーチを活かした《刺突》だ。だがそれは、一番強力という意味ではない。

槍での一番強力な攻撃、それは《薙ぎ払い》や《振り下ろし》だ。その長い柄から生まれる遠心力の乗った《薙ぎ払い》、そして重力をも上乘せした《振り下ろし》。

刃渡りが短いので、剣や刀には殺傷力という点では叶わないが、一撃の威力、威力の乗せ易さは、槍に利点がある。

俺はイノシシに向かって走りながら、槍の上下を持ち、真横に限界まで振りかぶって、槍の中腹を自身のわき腹で押し込むようにして、イノシシの直前で体ごと回転させる。

わき腹あたりで押されて撓しなって曲がった槍は、槍の上部を持つ手を離すことで、体から離れるとともに元に戻ろうとする。

テニスのバックハンドスウィングのような槍の横薙ゆみかせぎ。 東雲流《弓風》。

「ハッ！」

回転横薙しなぎの速度と撓しなりの反動の速度が丁度重なり合った一閃が、イノシシの横しなつ面に直撃した。

吹き飛ばすこと目的としていたので《斬撃》ではなく、槍の刃の腹を当てるようにして《打撃》として放った。

目論見は上手くいき、打撃音には高い音を響かせて、イノシシは横向きに転がっていった。

「……………」

金髪の少女の前で残心を取りながらイノシシを睨む。

イノシシはすぐに動きを止め、輝きを放ちながら粉々に碎け散った。

「……………ふう」

この仮想の世界でも、攻撃速度や命中箇所によってダメージはかなり違ってくるようだ。

今の攻撃は、速度だけなら現在の俺の身体能力では最高の一撃だった。

己の力の無さを、撓しなむという槍の特性を最大限利用することで補って、放った一撃。

それでも、あのイノシシの体力が全快ならば一撃では倒せない。

今、倒すことが出来たのは、恐らくこの子たちが少しづつイノシシのHPを削っていたお陰だろう。

俺は振り向いて、少女たちを見た。三人とも驚いたような顔をしている。

「……………」

俺は、この子たちに聞くことがあった。聞かなければならないことが。

金髪の少女が、俺を見上げて口を開いた。

「……あ、あの……ありがとう」

「どうしてだ」

「え……」

少女の言葉を遮り、俺はその言葉を言った。

「どうしてこんな時間に街の外に出ているんだと聞いた」  
「……あ」

「この子たちよりも前に出ていた俺が言えた義理ではない。だが俺は、自分の持つ技術なら大丈夫だという自信があった。」

「ともすれば過信とも思われるかもしれないが、それでも《戦い》ならどうとでも出来ると自負していた。」

「俺には何年も鍛えてきたという実績がある。それが今、俺を支えてくれる柱となっている。」

「この子たちにそれがあるとは思えない。この子たちの行動は、俺から見たら《無謀》としか思えなかった。」

「だから、ここに来ることになった理由があるなら、俺はそれを知りたかった。」

「そ、その……」

金髪の少女が言い難そうに口を開く。

「あ、あのとき……あなたに、じ、自分に出ることを考えて……それを言うことが、今のあたしたちがすべき事だろって言われて……」

少女の瞳が、俺の目を真っ直ぐに捉える。

「だから、考えたんですっ！ あたしに出来ることってなんだろうって……でもあたし、このSAOで出来ることって戦うことしか思いつかなくて……だ、だったら戦いを頑張ろうと思って……その……うう」

舌足らずに言いながら、その瞳に雫を溜めていく少女。

そうか。この少女は《戦うこと》を自分がするべきことと考  
えついたと、そういうことなのか。

しかしそれは どうなのだろうか。  
考えが足りない、自分出来ることと出来ないことが解っていない、そう断ずるのは簡単だ。

だが、それでもこの少女は自分で《考えた》のだろう。そこは、  
ちゃんと評価したいと思う。

それに……どうやら俺の言葉も、この少女が戦うことを決めた要因の一端を担っているらしいな。  
しかし。

「……なるほど、それは解った。……だが、こんな時間に街を出た理由にはなっていないな」

「……………あ、う」

俺がそう言うと、今度こそ金髪の少女は下を向いて黙ってしまった。

俺の言い方がきつかったというのもあるだろうが、これは 何も考えずに出てきた、というふうに見える。

それを見た茶髪の少女が、慌てた様子で言ってきた。

「こ、これは、その、違うッス！ あ、いや、違わないッス！

……………あ、あれ？ で、でも違うんス！」

多分、責められてる金髪の少女の助け舟を出そうとしたようだが、何を言うか考えていなかったんだろう。本人が混乱していて意味が不明だ。

そして、ようやく立てるようになった銀髪の少女も、こちらへ俺から金髪の少女を庇うような位置へ来た。

「す、すみませんっ。……その、私たち……」

金髪の少女を、二人の少女が庇おうとしている。

先ほどは、イノシシから金髪の少女が二人を庇おうとしているように見えた。

友達……か。

「……………ふう」

自分が吐いた溜息が、何のことに對しての溜息だったのかは、よく解らない。

しかし冷静になると、俺には彼女達を責める資格なんて無いのではないかとも思う。

彼女らは彼女らの考えで行動した。それだけだ。

問題があるとするなら それは俺のほうだ。

俺は初め、彼女らを助けることを拒否した。しかし、結局は助けってしまった。

助けたこと自体は後悔はしていない。それははっきりしている。

俺はこれからどうするか。どう、したいのか。

いや、一人で考えることもないか。

「……………とりあえず」

「は、ひゃいっ!」

「ひっ!？」  
「……うっ」

俺が声をかけると、三人はギョツと目を瞑って体を硬直させた。

俺は、そこまで怖いのだろうか……？

少しだけ  少しだけ傷付いた。

「……とりあえず、街の中に移動しよう。いつまでもこんな所にいるわけにも……いけないからな」

俺は三人にそう提案した。

「あ……は、はいっ」

「そ、そうツスね、いつまたあのイノシシが襲ってくるとも限らないツスもんね」

「……そう、ですよ。はい、移動しましょう」

先に歩き出した俺の後を、三人は並んで付いて来た。

妙なことに、なった……。

はじまりの街のゲートをくぐりながら、俺は心の中でこれからのことを考えていた。

## 6・矛盾

「それで」

俺と三人の少女が、無事に《はじまりの街》  
《犯罪禁止コー

アンチクリミナル

ド圈内》に入っ

てすぐ、俺は振り返って三人に尋ねた。

「はい？」

「な、なんですかつス」

「……は、はい」

俺に対して苦手意識が出来たのか、銀髪と茶髪の二人は緊張した  
趣きで返事をした。

「……それで、お前たちは《宿》は決まっているのか？」

もう時間も遅い。街の中では安全とはいえ、一応男として、女性  
はちゃんと宿屋に送っていかねければならないだろう。

「……あ」

三人が声を揃えて口を開いた。

「そ、そういえば……ど、どうしよっか？」

「今から探すしかあないツスカね〜。……あ、レイアは？」

「私も二人とずっと一緒だったでしょう……。確認してる時間はさ  
すがになかったよ」

「そつツスよねー」

三人とも宿屋のことはそもそも頭に無かつたらしい。

「……では、どうする？　一軒だけなら心当たりがあるが」

自分の泊まろうとした宿屋なら、案内は出来る。出来るが……。

「あ、本当ですか！？　あの、教えてもらってもいいですか？」

「流石に野宿は嫌ツスからね。お願いしますッス！」

「……すみません。出来れば、お願いしたいです」

三人がそれぞれ俺に頭を下げる。

少し拍子抜けした。一応男の　俺の案内を簡単に受けるとは……。

「……いいのか？」

そういう意味を籠めて聞いた。

「え？　何がですか？」

「……いや、なんでもない」

純心というか、お人好しというか。そんな顔をされたら何も言えなくなる。

「……こっちだ」

俺は三人に背を向けて歩き出した。

そして、三人も慌てた様子で俺の後を付いてきた。

酒場兼宿屋《煙突亭<sup>えんとつてい</sup>》は、はじまりの街の北西ゲートから東へ歩いて五分程度の場所にあった。

ギイイという軋むような音をさせながら木製の両開き扉を開けると、狭くならない程度に置かれたいくつもの丸テーブルや椅子、そして奥に大小のカウンターが見えた。

俺は、石畳の床を歩いて小さい方のカウンターに向かう。

「いらつしゃい。お一人様？」

この小さい方のカウンターが宿屋関係のカウンターだろう。【Acceptance of Inn】宿屋の受付という看板が掛けられている。

エプロンと三角巾を身に付けた恰幅の良い女性NPCが、元気な声と共に俺を迎えた。

「……鍵付きの、一人部屋と三人部屋を一泊借りたい」

俺の部屋と、後ろで店内をキョロキョロ見ている三人 は一緒にいいだろう の部屋を借りようとした。

「はいよっ。えー、一人部屋が10コル。三人部屋だと24コル。合わせて34コルね」

一人部屋 個室の方が割合的には高いのか。まあいい。それでもかなり安いほうだろう。

こういう場では、男が金を出すのだと父から聞いたことがある。先ほどの戦ったことで、所持金は284コルに増えていた。

アイテムストレージに入っている、モンスターを倒したことで手に入れたアイテムを売れば、更に増えるだろう。

俺は目の前に出ているウィンドウの【Yes】に触れた。同時に、チャリンチャリンという音と共に所持金から34コルが引かれる。

「はい、まいど。部屋は二階だからその階段から上がって行ってね。個室は二〇七号室、三人部屋は二〇一号室よ。間違えないでね」

二〇七、二〇一。頭の中で繰り返し、覚える。

そして俺は振り返って三人に言った。

「……お前たちの部屋は二〇一号室だそうだ。三人一部屋にしたが、構わなかったか？」

「あ、はい！ 全然大丈夫です！」

「大丈夫ツス！」

金髪の少女と茶髪の少女が元気良くそう言う。

その横から銀髪の少女がおずおずと口を開いた。

「……あ、あの。お部屋のお代を……」

「あつ！ そ、そうですね。お金お金……」

「あれ？ わたしらいくらだったツスか？」

三人は宿の代金を出そうとした。が、それは止めた。

「……別にいい。モンスターを倒したことで多少なりとも金は手に入ったからな」

槍を買った分にはまだ及ばないが。

その言葉を飲み込み、俺は続けて三人に訊いた。

「……それより、夕食にしたいんだが……お前たちはもう食べたか

「？」

「あ、いえ。まだです」

「そーいえば、かな〜りお腹減ってるッスね〜」

「……うん。そうだね」

そう言つて、同時に自分の腹をさする三人。

「……ここは見ての通り、一階は酒場になっている。疲れたなら二階の部屋に行つて休んでもいいし、ここで食事をするのも自由だ」

三人にそう言い捨てて、俺は一つの丸テーブルの椅子へ腰をかけた。

店内にはちらほらと人 プレイヤーと思われる者たちがいる。しかし、皆一様に暗い表情をしていた。

それもそうか。まだあれから半日も経つてないのだからな……。

あの茅場晶彦の言葉の後、中央広場いた者たちがどうなったのか、俺は知らない。

しかし幾ら絶望していても、ここでは腹も減るし眠気もあらわれる。

そうして行動することを余儀なくされた者たちはどうするのか。どうなつてしまふのだろうか。

いや、他人のことを考えている余裕なんて……俺には無いか。俺はその考えを振り切るように、首を軽く横に振つた。

そして、気分を変えようと店のメニューを見ようとした。したのだが……。

「お腹減つたよねー」

「……色々あつたからね」

「でもここつて仮想なんスよね？ 何でお腹空くッスかね？」

「んー、分からないけど……。あ、もしかしたら……。ここって太らないで食べ放題!？」

「おお! そうかもッス!」

「もう……。二人とも、ほどほどにね」

「……………」

何でこの少女たちは、俺と同じテーブルに座っているのだろうか……。

一応、こちらは気を利かせて一人で夕食を取ろうと思ったのだが、他にも空いているテーブルはいくつかあるのだが……。しかし、それを尋ねるのは何故か躊躇われた。

「へえ、このメニューちゃんと日本語訳も書いてあるよ」

「ほんとツスね。でもこの《グエタラムガンヌの蒸し焼き》って

……………何なんスかね」

「……………他にも材料不明な料理がたくさんある、ね」

「食べてみないと分からない……。ロシアンルーレットみたいだね」

先ほどの街の外での出来事が無かったことのように、三人は興味津々にそのメニューを見ていた。

俺は溜息を呑み込みながら、メニューが空くのを待った。

そうして俺を含め、四人ともが注文をウェイトレス というにはやや歳が行き過ぎている女性だが に言っ、俺たちは料理を待っていた。

今、俺たちは酒場の端の丸テーブルに、俺、金髪少女、銀髪少女、茶髪少女の順に時計回りに座っている。

注文をしてから無言にしていた俺に、銀髪の少女が恐る恐ると口

を開いた。

「あ、あの。すみません……」

「……何だ？」

「えと、一応自己紹介をさせてもらってもいいでしょうか？」

ふむ、自己紹介……か。

あまり他人と言葉を交わすことの無い俺だ。自己紹介なんて思いもつかなかった。

「……ああ、そうだな。そういえば、お互い名前も知らなかったか」「は、はい」

「あつ……そうだよな。なんで気付かなかったんだろう」

「いやー、さっきはそれどころじゃなかったツスからね」

銀髪の少女の提案に頷く俺たち。

俺の中では髪の色で区別出来ていたので、特に名前は必要ないと思っていたのかもしれない。

しかし、こうなってしまったからにはキチンと自己紹介はするべきだろう。

ん？ 何か違和感が……？

一瞬疑問符が浮かんだが、気にはしなかった。

俺は少女たちを見た。三人とも俺よりは幼く見える。

同い年ということはあっても、年上ということは無いだろう。ならば年上として初めに自己紹介したほうがいいだろうか。

そう思い、俺は三人に言った。

「……では、俺から言おう。……俺の名は東雲あしのし 蓮夜れんや、中学三年生だ。このSAOへは友人の誘いで」

「ちょ、ちょ、ちょ……つ、すと つぶツス……」

「……！」

「……？ 何だ？」

いきなり茶髪の少女が割り込んできた。

「いや、え？ え？ この自己紹介って現実の名前を言っリアルんすか！？」

む、そういえば…… S A Oでの名前というものがあつたのだつたか。

滅多にしない自己紹介だったので、ついここが《仮想世界》だということ忘れていた。

「……すまない。ゲームというものは初めてで、こういう所のルールというものがよく解っていないんだ……」

俺は三人に謝罪をした。自分の無知さを改めて痛感した気分だ。

「い、いえ！ 全然気にしてないですよっ！」

「そうですよ。あ、そういえば最初に会ったときも言っていましたね。ゲームが初めてだと……」

「……ああ」

「いやー、なんか余りにも堂々としてたツスから、てっきりこのゲームにも慣れてるもんだと思ってたツス」

俺はそこまで堂々としていたのだろうか……？

自分としては結構、初めてのことに戸惑っていたのだが。

俺がそう思っていると、俺の右隣りに座っている金髪の少女が言ってきた。

「なら、あたしたちから自己紹介しますよ！ えーコホン、あたしは《ルネリー》って言います。あ、モチロン《HN》ハンドルネームですよ？」

金髪の少女　ルネリーが元気良く言った。

「あたしたちもVRMMOはこれが初めてなんで、色々よく解っていないです。えへへ、おそろいですね！」

おそろい……？　ゲームが初めてがってことだろうか？　ふむ、よく解らない娘だ。

そうして、次に俺の正面に座っている銀髪の少女が口を開いた。

「……えと、改めまして。私はこの世界では《レイア》といます。顔を見れば分かると思いますが、ネリー……じゃなくて、ルネリーの双子の姉になります」

「はいっ、そうなんです！　あ、あたしのこととはよければ《ネリー》って呼んで下さいね！」

銀髪の少女　レイアと、その言葉に付け足すようにルネリーが言う。

ふむ。やはり双子だったか。

雰囲気の違いすぎるせいで、一見ただけでは解らないが、近くで見比べればすぐに解るくらいには顔がまったく同じだ。

「じゃ、次はわたしススね。わたしは……あー、わ、たしい、

はあ……あ、えーとお

「……？」

最初の「わたしは」を言った辺りから顔を歪める茶髪の少女。一体どうしたんだろうか。

俺が疑問に思っていると金髪　ではなく、ルネリーが話しかけてきた。

「あはは、あのですね。その子は自分の名前を打ち間違えて気付かずに登録しちゃったんです。だから最初に考えてた名前とは違う名前になっちゃってたんですよ」

「……………ふむ」

茶髪の少女の言動や行動を見るに、少しおっちょこちょいな所があるようだ。

名前を打ち間違える、そういうこともあるのだろう。

「……………それで、何という名なんだ？」

「あつ。えーと、その、ち、《チマ》って言うツス……………。最初は《リマ》って付けたかったんすよ。でも……………あんのキーボードのコンチキシヨウめが……………!!!」

拳を握り締めて打ち震える少女　チマ。別に変な名でもないと思うが。

それを見てくすくすと笑うルネリーとレイア。

「ハアア……………まあ、そんな感じなんす。で、わたしはこの二人とはクラスメイトにして親友という間柄ツス。歳は……………もう言っちゃっても良いツスよね。わたしらは全員、中学二年生ツス」

盛大に溜息を吐きながら、それでも一応ちゃんと自己紹介をするチマ。

その後、ルネリーが俺に向かって言った。

「あの、それで東雲さん……………じゃなくてっ。その、ここでのお名前

って何ですか？」

「……ああ、俺はここでは《キリュウ》という」

自分の本当の名前ではない名を言い合うのに、自己紹介というのも変な感じだ。

「キリュウさん、ですか……」

「……キリュウ、さん」

「ほうほう、キリュウさんツスね」

何度も呟いているようだが、そんなに俺の名前は覚えにくいだろうか。

そんな感じで各自の名前を言い終わると、ちょうど料理をお盆に乗せて運んできた中年女性のウェイトレスがやって来た。

「はあい、お待たせいたしやしたあ」

少し舌足らずな調子で言いながら、次々にテーブルに料理を乗せていくウェイトレス。

「おー！ 来たツス、来たツス！」

「おいしそ〜」

「……名前はアレだったけど、見た目はまともそうだね」

いい匂いのする料理たちが、テーブルに並んだ。

「以上でよろしいでしょうかあ？」

「……ああ」

酔っ払っているような喋り方だが、ウェイトレスの動きはしっかり

りとしている。これが地なのだろうか。

「ではあ、ごゆっくりとおくつおぎ下さあい」

最後まで舌足らずな調子で、ウェイトレスは離れていった。

「じゃあ、いただきましようか！」

「待ってましたッス！ いったただっきますッス〜！」

「いただきます〜す！」

「いただきます」

「……………頂きます」

俺たちは各々が頼んだ料理を食べ始めた。

全員がもうすぐ食べ終わるといふとき、ルネリーがグラタンのよ  
うなものをスプーンで口に運びながら言った。

「あ、ほ〜いえは」

「ネリー……………お行儀が悪いよ」

「あはは、ゴメンごめん。そーいえはさ、あたしってSAOでお店  
入るの初めてなんだけど、ここのお勘定ってどうなってるの？ 食  
べ終わったら払うの？」

「……………マニユアルは見なかったのか？」

「あは、はは、は……………あたしって、説明書見ないでゲーム始めるタ  
イプで……………」

「はあ……………最低限は見といてって言ったのに」

「あ、そういえばわたしも見てなかったッス。あはは〜」

「……………もう、二人とも……………」

なるほど、レイアは二人の保護者的な役割をしているのか。危ないときはルネリーが守って、雰囲気が悪いときはチマが騒いで……。この三人は良い関係を築いているようだな。そんなこと思いながら、俺は口を開く。

「……一応、そこら辺にいるこの酒場のNPCに言えば、代金を払うことは出来る。もしくは、ここから外に出るか、または二階に上がると自動的に所持金から代金が引かれる。この場合は一つのテーブルにいる人数で均等に割り勘されて引かれるな」

無論、お金が足りないと犯罪として見なされるのは他の店と変わらないが。

「へー、そうだったんですか」

「……一応、マニュアルに書いてあることは俺にも解る。書いていなかったことは解らないが……」

「いや、それだけでも十分すごいツスよ！ わたしらなんて何も知らないツス！」

「ねー」

「ね〜」

「自慢気に言うことじゃないよう。二人とも……」

顔を見合わせて頷き合っているルネリーとチマ、それを見て何故か自分が恥ずかしがっているレイアだった。

料理を食べ終えて一休みをしている途中、俺はずっと考えていたことを言おうと思い、三人に話しかけた。

「……三人とも、話しておきたいことがある」

「はい？」

「なんスか？」

「なんでしよう？」

もうすっかり、最初に会った時のような怯えた雰囲気は三人には見られない。

それは良いことなのだろうか。それとも……。

「……お前たちは、これからどうする気だ？」

「え……と、それは……」

ルネリーが口ごもっていると、普段とは違った雰囲気させたレイアが口を開いた。

「……それは、これからも戦う意思があるのか、と訊いているのですか？」

「……ああ、そうだ」

三人とも、先ほどのことで戦いが自分たちには無理だと感じたのではないだろうか。

特に一人だけ戦っていなかったレイアは、尚の事それを実感したのではないか。

俺は、意識して厳しい口調で言った。

「……初めて会ったときに俺は言ったな。戦うこと決意した者を止める権利は誰にも無いと。今から言うことはそれに矛盾することだ。だが、言うっておかなければならないとも思っ」

一度、深呼吸をしてから、俺は三人を見て言った。

「……お前たちに 戦いは無理だ」

「……っ」

俺の言葉に、三人が顔を強張らせて息を呑む。

「先ほどのことで解っただろう。お前たちが相手にしていたあのモンスター、《フレンジー・ボア》と言ったか。あれはレベル1のモンスターだった。……三人で戦って一匹すら倒せないのでは、この先のモンスターなんて到底無理な話だ」

「あっ、あれは……私のせいで……っ」

レイアが声を上げるが、それを遮って俺は言った。

「……確かに、レイア（おまえ）を守っていたせいで、ルネリーたちがちゃんと戦えなかったというのはあるだろう」

「そ、それは……っ」

今度はルネリーとチマが何か 想像はつくが を言おうとしたが、俺は片手を上げてそれを抑える。

「……お前たちは、三人とも解っているはずだ。ここで何を言っても、実際の戦いになったら自分たちはちゃんとには戦うことは出来ないということが……」

沈黙する三人。

こんなことを俺が言い出したのは 俺の、一つの《ケジメ》だ。最初に助けを乞われたときには拒否したのに、目の前で危ない目に遭っている所を見たら助けてしまった。

それが普通。当たり前。他人に対する態度としては当然。  
だが、それでは俺自身が 俺の心が納得しない。  
助けるなら最初から助ける。助けないなら最後まで助けない。  
つまり俺は、《矛盾》が嫌なのだ。

「……お前たちは、これから……どうするんだ？ どう、したいんだ？」

だから もう一度初めからやり直そうと、そう思った。

## 7・二人の決意（前書き）

最初はレイア視点です。

## 7・二人の決意

「……お前たちは、これから……どうするんだ？　どう、したいんだ？」

私の正面に座っているキリュウさんが、私たちを睨むように、それでいてどこか優しい声で言いました。

たぶん……たぶんだけど、この人は私たちを心配して言ってくれている。

最初にキリュウさんに会ったとき、凄く冷たい瞳をしている人だなと思いました。

元々人見知りな私だけど、その瞳が《怖い》という印象を強くしてしまっただけだと思います。

それでも、話を聞いているうちに、この人は自分のすべき事だけしか見ていないんだ、っていうのを感じました。

怖いんじゃない、真っ直ぐなんだって思ったんです。

何でそんなにも真っ直ぐでいられるのか、こんな状況になっても自分を保っていられるのか。

《それ》が知りたくて、初めて会った男の人に　しかも第一印象で怖いと思ってしまった人に対して、私らしくもなくつい訊いてしまいました。

怖くないんですか、と。

でも、キリュウさんの答えは想像していたもののどれでもなくて　私は、少しだけ残念でした。

《それ》があれば私も、奈緒を守れるくらいに強くなれるんじゃないか。そう、思ってしまったから。

その後、キリュウさんと別れたあとに奈緒　ネリーは、私とチマに言いました。モンスターを倒してみないかって。

たぶん、キリユウさんの言葉に触発されたんだと思います。

私は勿論反対しました。本当に死ぬかなんて解りません。でも、死ぬかもしれないという可能性はあるんですから。

チマも最初は反対していました。

だけど、街の周りだったら弱いモンスターしか出ない、三人で戦えば怖くない、そう言うネリーに結局は説得されてしまいました。

私は、流石に今日はもう暗いから止めようと言ったけど、興奮する奈緒を止めることなんて出来ないということは、もう何年も前から解っていたことでした。

そして、すでに辺りが真っ暗になった街の外に私たちは出ました。マニュアルをちゃんと読んでなかったネリーとチマに装備の仕方を教えて、私も自分のアイテムストレージに入っている《スモールソード》を装備しました。

いきなり右手に現れた剣に、三人ともビックリしつつも、初めて触る剣にネリーとチマは興奮していました。

でも私は、二人みたいにはしゃぐことは出来ませんでした。

この、私の持っている剣が誰かを　大切な人を傷つけてしまう  
ヴィジョンを想像してしまったから。

そして、そのヴィジョンは　私のせいだという意味で　現実  
になってしまふところでした。

チマが、視界に赤色のカーソルを見つけたというので、私たちは  
それが視認出来る位置に移動しました。

数メートル移動して、暗闇の中で私が最初に見たのは尻尾。不規  
則に揺れる尻尾でした。

近づいてもこちらを向かないそのモンスターに、ネリーとチマは  
「先手必勝！」と言って剣を叩き付けようと思いました。

大きく剣を振りかぶった二人は、慣れてないせいか思うようには  
扱えなかつたらしく、結局そのモンスターに攻撃が当たったのはネ

リーだけ。

でも、それがいけませんでした。

街を囲う城壁の上から漏れる松明の明かりに照らされて見えた、こちらに振り返るそのモンスターの顔。

不気味でした。

荒く生々しい息遣いをしながらこちらに向かって走ってくるそのモンスターに、私は悲鳴を上げることも出来ずにその場に佇むだけでした。

頑張つて動かなきゃ。せめて足手纏いにはならないようにしなきゃ。

そう思つて行動しようとしたのですが、恐怖で足が纏れて倒れてしまい、そのまま動けなくなつてしまいました。

そんな私を守ろうと、ネリーやチマがモンスターを引きつけようとしてくれていました。

その光景は、私の昔からのコンプレックスを刺激しました。

気の弱い私をずっと守ってくれてきた奈緒。そんな奈緒に対して劣等感を持つてしまった私。

奈緒に対する感謝の気持ち、奈緒に対する負い目。

この二つの気持ちを抱えたまま私たちは成長し、その二つは消えるどころか大きくなる一方。

そして、それが極まったのが奈緒のHP 命を表す横線がモンスターの攻撃で削れたときでした。

なんで私は座つてるんだろう。

なんで私は動かないんだろう。

なんで私は、奈緒に守ってもらつてばかりなんだろう。

なんで私は……奈緒を守れないんだろう。

その後、運良くキリュウさんに助けてもらつた私たちでしたが、助かった安堵に顔を緩めつつも、私の心の中ではその問いが続いていました。

『お前たちは、どうしたいんだ？』

キリユウさんの問いを聞いた私の頭の中には、今まで想っていたことから一つの言葉が現れていました。

「……………く、なり……………いです……………」

「え？ レイア？」

「へ？ 何て言ったツスか？」

「……………」

いきなり小さい声で呟いた私に驚く二人。でも、キリユウさんはしっかりと私の目を見て私の《答え》を待っているようでした。

だから私は、キリユウさんの瞳を見ながら、出来るだけ大きな声で、自分の意思を 自分の《決意》を、言いました。

「……………強く、なりたい……………です。……………私はっ、強く……………なりたいんですっ！」

強くなりたい。奈緒を守るくらい。一方的に奈緒に守ってもらわなくてもいいくらいに……………。

それが、私の今《したいこと》。もう、守られるばかりは嫌だったから。

私の言葉にびっくりしたのか、口をぽかんと開けている二人。

それはそうだと思う。自分でもこんなことを言うなんて、つい数時間前までは思ってもみなかったから。

私は、言った後もキリユウさんの瞳から目を離しませんでした。

まだ、言わなくてはいけないことがある。

そう思ったから。

「……そうか」

キリユウさんが、何かを考えるように目を瞑って呟きました。  
そして再びその瞳を開いたとき、今度は私だけに向かって言ってきました。

「……それで、どうするんだ？」

「え？」

「強くなりたい、という意味は解った。……それでお前は どう  
やって強くなるうと思っっているんだ？」

「……っ」

一応、予想していた問いでした。でも、キリユウさんの真剣な瞳を見ながら聞いたら、つい怖気づいて 逃げ出してしまいそうになりました。

こんな私が、強くなりたいと思ったこと自体、間違いだったんじゃないかって。間違いだって言われるんじゃないかって……。

でも、ここで逃げたらいつまでも変わらない。変われないんです！  
なけなしの勇気を振り絞るために、私は膝の上の両手をぎゅっと握り締めました。

そのとき。

「え……？」

いつの間にか近くに来ていたネリーとチマが、私の手に自分の手を重ねてきました。

それで驚いた私は、二人の顔を交互に見ました。

二人は無言で私に笑いかけ、重ねた手に軽く力を入れました。

『頑張つて』

二人の笑顔とその手の暖かさから、その言葉が聞こえてきた気がしました。

結局……助けられてるな。

そう思いつつも、私の口は笑ってました。

私は固く握り締めた手をほどき、今度は二人の手を握りしめてキリユウさんに向けて、言いました。

「お願いします！ 私に……私たちにつ、教えてくれませんか？ 戦い方を……強くなる方法をつ……教えてくださいつ、お願いします！」

頭は下げませんでした。

その代わり、自分の想いが伝わるように、目を逸らさずに言いました。

「お願いしますっ！」

「お願いしますッス！」

私の両隣で、私の言葉に続くように頭を下げるネリーとチマ。

私は、震える心を二人の手を握り締めることで耐え、キリユウさんの言葉を待ちました。

意外……だったな。

それが、俺の思った感想だった。

その言葉を言ってくるかもしれないとは思っていた。

だが実際に言ったの気の弱そうに見えるこの娘だったとは……。いや、寧ろだからこそ言ったのかもしれないのか。

先ほどはこの三人のそれぞれの役割は確定しているように思ったが、それを由よと思っていない者もいるということか。

その考えは一旦置いておいて、俺はレイアの言った「強くなる方法を教えてください」という発言について考える。

俺は最初、俺よりもこの三人の助けになるのに相応しい者がいるだろうと思い、三人を拒絶した。

しかし、この三人は他の者に助けを求めるところか、自分たちだけで戦おうとして窮地に陥った。

それを見つけた俺は、最初に拒絶したにも関わらずに助けた。

そして、己の行動の矛盾を嫌った俺は、三人に一つの問いをすることですべて最初からやり直そうとした。

お前たちは、これからどうしたいのか？

ここで三人が戦うことを諦める、もしくはまた自分たちだけで頑張ると言えば、俺は今夜にでも三人の目の前から消えるつもりだった。

しかしレイアが、この子たち言ったのは 戦うことは諦めない。だけど自分たちだけでは無理だと解ったから、俺に戦い方を教えて欲しい。ということだった。

言葉だけを見れば、なんとも都合の良い言い方だろう。

自分たちの面倒を見てくれと言っているようなものなのだから。

だが レイアの、ルネリーの、そしてチマの顔を見ながら聞けば、そんな思いは一切しなかった。

それに、俺はもう決めていた。

もし、もしもこの三人がもう一度俺に助けを求めたのだとしたら 今度は受け入れよう。

俺は人と話すのが苦手なだけで、別に人自体が苦手なわけではない。

助けを求められれば、頼られているようで素直に嬉しいし、ちゃんと助けたいとも思う。

最初に断ったのは、あくまで自分よりも相応しい者がいるだろうと思ったからだ。

だけど、もう迷わない。

三人には、俺がゲームを初めてとしている事はすでに言った。S A Oの知識は全てマニュアルから得ているんだということも。

それでも、この三人は俺に頼んできた。

俺は、その期待に応えたいと 強く思った。

「……………解った。俺で良ければ……………戦い方を教えよう」

その言葉を言うとき、俺は何故か三人の顔をまともに見れず、目を瞑りながら言ってしまった。

しかし、目を瞑っていても、三人の驚いた様子と、その後の嬉しがつている様子は しっかりと、俺に届いていた。

## 7・二人の決意（後書き）

ちゃんと心情を伝えられるように書くことが出来たか……すっごく不安です。

ご感想、ご質問、ご指摘、お待ちしております。

## 8・特訓開始、その前に

「あ、キリユウさん！ おはようございます！」

「おつはようございますッスー！」

「おはようございます」

「……ああ、おはよう」

昨日、《はじまりの街》にある宿屋の一つ、《煙突亭》えんとつていの二階に、俺とルネリー、レイア、チマの四人は泊まった。

俺が泊まった一人部屋は、六畳ほどの部屋に簡素な机と外套掛け、そして俺一人寝るのがちょうどくらいのベッドがあった。

厚みのない毛布と埃っぽい臭いに顔をしかめつつも、意外に疲れていたのかすぐに寝てしまった。

いつもは目覚ましなんてかけなくても朝五時前には自然と起きていた俺だが、今日起きて時間を確認したら六時半だったので少し驚いた。

そのせいか、普段欠かさずに行っている走り込みや素振りもする気になれず、一階の酒場に降りて来て、すでにカウンターの向こうで働いているらしい女性NPCに朝食を頼んだ。

あの三人が一階に降りてきたのは、俺が朝食を食べ終わった頃だった。

俺と同じメニューを三つ頼み、五分もしないうちに来たそれを三人は食べていた。

「……三人とも、食べながらで良いから聞いてくれ」

俺は朝食を食べながら考えていたことを三人に話そうと思ひ、声

を掛けた。

「はい？」

「んぐんぐ……ほむ？」

「……は、はい。なんでしょう？」

三人が、視線を自分の朝食からこちらに向ける。

「……ああ、昨日の件についてだ」

俺のその言葉で、三人は少しだけ緊張した顔をする。

「……昨日、お前たちは俺に戦い方を教えてくれと言ったな。……

そして、俺はそれに了承した」

「は、はい」

食べながらで良いと言ったのだが、三人とも食事を止めてしまっている。

そういえば、前に二木に「お前の話し方は硬いんだよ！ そんなんじゃこっちはビビッ……じゃなくて、緊張しちまうよ！」と言われたことがあったか。

しかし、この喋り方以外に俺は知らないのだからしょうがない。

「だから考えた。……お前たちを、どうやって鍛えようかと」

「……っ」

三人の唾を飲む音が聞こえる。

む、この程度で緊張しているようではこの先が不安だが……。いや、それも俺に懸かっているということか。

俺がこの先、三人に戦い方の指導をする。つまりは、この三人の



きな棚がいくつも並んでいて、まるで一本の通路みたいだ。更に薄暗く、埃っぽい店内は少し怪しげな雰囲気醸し出している。

「ほえー、年季を感じる店ツスねー」

「あ、このポーチ可愛いっ」

「ちよつと二人とも、ここに来たのは別の目的でしょ……」

ルネリーとチマが珍しいものに飛びついて、レイアがそれを諫める。

まだ会ってから一日しか経ってはいないが、俺にはその光景がすでに日常に思えてきていた。

そんな三人を放置して、俺はNPCに話しかけた。

「……すまない。《回復ポーション》というものを買いたいのだが」

俺たちはこれから街の外に出て、この三人にイノシシへ再戦させる。

流石に最初は無傷で、とはいかないだろう。

俺も一応は見ているとはいえ、治療手段はあるに越したことは無い。

今後は自分だけではなく、この三人の命も守らなければならないのだ。こういう準備はちゃんとしておきたい。

ちなみにこれはチマの提案だ。俺は、そんな物があるなんてことは頭から抜け落ちていた。

普通なら、そんなにすぐに傷が癒えるわけは無い。

そんな考えもあって、二木には聞いていたのだが俺はその存在を忘れていたようだ。

まあ、チマ本人も今さつき思い出していたようだ……。

そんなことを煙突亭の酒場で話していたら、近くを通ったウェイトレスNPCが、「回復ポーションならあ、すぐそこのおお店にあ

りますよお」と教えてくれたのだ。

そんな経緯もあって、俺たちはここに来ていた。

店の中は乱雑としていた。様々な色のガラスの小瓶に入った液体。毛皮の小物にアクセサリー、お面に……土偶？

このような中、四人とも見たこともないものを買うのだから、NPCに訊く方法が手っ取り早いと考えた。

「……………」

NPCは、本から視線を外さずにカウンターを指でトントンと叩いた。

「…………？」

その行動の意味が解らず、俺はもう一度同じことを訊いた。

「…………店主。回復ポーションを買いきたいのだが？」

今度は少し大きめに声を上げてみた。

するとそのNPCは、横目でチラリと俺を見て、再び本に視線を落としながら、またカウンターを指でトントンと叩いた。

「……………」

もしかして…………。

俺はNPCの真似をしてカウンターを叩く。

そうすると、俺の目の前に店の商品リストのウィンドウが現れる。

「……………」

つまりコレを見て買えと、そうこのNPCは言っている、もとい示しているのか。

随分ものぐさなNPCもいたものだな。

顔をしかめてそう思いつつも、俺は商品リストを確認する。

目当てである回復ポーションはすぐに見つけることはできた。リストの一番上にあるのだから、どれほど需要があるのかも分かるというものだ。

俺は回復ポーションの説明を見た。

《回復ポーション》：フランク HPを毎秒5ポイント回復。効果は六十秒間。金額30コル。

毎秒5ポイントで六十秒、ということは最大で300ポイントの回復か。

確か今の俺のHPが342ポイント。これ一瓶では全快にはならないのか。いや、そこまで減らさなければいいだけの話だな。

む、再使用までの《クールタイム》というものもあるのか。このポーションは一回使用すると、三分間のクールタイムを置かないと再使用が出来ない、ということか。

だが、これは今は気にする必要はないな。何本も連続で使用することが現状であるとも思えない。

数は一応全員に一つずつとして四つ、120コルか。

代金はとりあえず俺が出しておこう。……何というか、流石にこういうものは自分で出させたほうがいいのかもしれないが、こちらから切り出すのが難しい。

こういうとき、あまり他人と話をしていなかったことが悔やまれる。SAOに対話スキルとかあったらどうか。

いやしかし、今は俺はこの三人の師匠役だ。単なる見栄かもしれないが、言われるまでは黙っておくことにしよう。

俺は小さく溜め息を吐きながら、購入ボタンを押そうとした。

「……む」

押そうとした購入ボタンのすぐ横に売却ボタンを見つけた。そのことで、昨日倒したモンスターから手に入れたアイテムのことを思い出す。

モンスターが落とすアイテムは、一部を除いてほとんどは何かの生産に使えるらしい。しかし、レベルが低いうちは扱えるスキルも少ないし、熟練度も高くないのでほとんど必要無いという。

故に、基本低レベルではモンスターから得たアイテムは売ってお金にするのだと二木は言っていた。

俺は回復ポーションを買う前に、売却ボタンを押した。

手元に別ウィンドウが現れ、そこには俺の所持アイテムの一覧が書かれていた。

昨日の戦利品《フレンジーボアの革》×5、《フレンジーボアの牙》×2、《フレンジーボアの肉》×2、《メドウワームの体液》×3。

俺はそれら全てを選択し売却した後、回復ポーションを四つ買った。

所持残金は、314コルか。

もう少し回復ポーションを買っておこうか迷ったが、止めておいた。

何事も適度に、だ。買った分以上の回復ポーションを使うことになる状況は避けるべきだ。

命が懸かっている状況なのだ。準備を十二分にすることも大事だが、余計な危険を回避させることを第一と考えよう。

「……三人とも、買うものは買った。……行くぞ」

俺は未だ珍しい商品に釘付けになっている三人に声をかけて雑貨屋を出た。

「え、あ、はいっ」

「ま、待って下さいッス！」

三人は慌てて俺を追いかけてきていた。いつの間にかこの構図が定着してきている気がする。

そうして俺たちは、ここから一番近い外への門、北西ゲートに向かっていた。

「あ、あの〜。ほ、ほんとに一人で倒すんすか？ むしろ倒せるんすか？」

俺の顔を覗き込むようにチマが訊いてきた。

「……問題ない。煙突亭でも言ったが、昨日は時間も時間だったから周囲が暗く、そのせいもあって初めて見たモンスターに強く萎縮してしまっただろう。今日はまだ九時にもなっていないが、すでに辺りは十分に明るい。今度は相手をよく見ることが出来る。……それに、もし危なくなったら俺がすぐに助けに入る」

「キリユウさん……」

そう。俺が三人に最初に行おうと思ったのは、モンスターと対峙することに慣れさせるということだ。

昨日の件で、恐らく三人ともモンスターに対して苦手意識が植え付けられているだろう。

しかし、この先に進むのだとしたら、それは最初に排除しておかなければならないものだ。

冷静に対処すれば、あの程度のモンスターなら怖いことは無い。  
まずはそれを知ってもらう。

死の危険に対する《恐れ》というのは確かに大切な感情でもある。  
これがあればこそ、人は危険を回避することが出来る。

しかし、《怯え》はいけない。それは緊張をもたらし、緊張は体  
を強張らせて動きを妨げる。

この《恐れ》と《怯え》のさじ加減が難しいところだが、しばらく  
は俺自身が三人を見守ることで調和をとるとしよう。

五分ほど歩いて見えてきた巨大なゲートを潜り、俺たちは街の外  
へと出た。

「わあ　っ！」

「すつつつごいッスね〜」

「うん、夜るときとは別の場所みたいだね……」

三人は、明るい街を外を改めて見て感嘆していた。かく言う俺も  
ちゃんと見るのは初めてなのだが。

昨日は暗くてよく見えなかったが、日の光に照らされたこの風景  
は確かに思わず感嘆してしまうほどだった。

ゲートから太く伸びている一本の土色の街道。その街道は段差の  
ある丘のせいか、数百メートル先からはぐねぐねと曲がっているよ  
うに見える。

そして、その街道の両脇には、はじまりの町をぐるっと囲うよう  
にある広大な草原。草原の向こうに見えるは緩い山脈や深い森林。

更に遠くには一層と二層に挟まれた青空が見えた。

どこか新鮮さを感じる冷たい風に乗って飛んでいく草の葉や花び  
らが、頬をかすめる。

あの森の先には何があるのだろうか、あの山の先には何かがある

のではないか、あの空の先へ行ってみたい。そう思わせるような光景だった。

そんな光景に魂が抜けかかっている三人に俺は声をかけた。

「……では、特訓を開始するぞ」

「ほえ？」

「あ、は、はいッス！」

「……お、お願いしますっ」

俺は三人の前に立って、これからすることをもう一度改めて説明した。

「……という訳で、お前たちには一人ずつイノシシと戦ってもらおう。

……三人とも、自分の武器を持って」

その言葉で初期装備の《スモールソード》を各々装備する三人。

俺も今回は三人と同じようにスモールソードを装備した。

片手で何回か振って感触を確かめてから、俺は三人に向いて言った。

「……とりあえず、準備運動がてらその場で素振りをしてみてくれ」

「す、素振り……ですか？」

肩透かしを食らったような顔をする三人。しかし、これを欠かすことは出来ない。

「そうだ。昨日、俺はお前たちの戦いを少し見た。ルネリーはまだ

マシな方だったが、それでも三人とも武器の扱いが下手過ぎる」

「うっ……」

「耳が痛いッスねえ……」

「……あう」

三人は昨日の自分を思い出しているのか、各々微妙な顔をしながら素振りを始めた。

プレイヤーが初期装備として持っている《スモールソード》は、一番最初の武器だけあってレベル1の身体能力でも軽々に振れる。しかし、それでも武器ではあるので重さはちゃんとある。心得の無いものが振れば剣の重みと勢いで体が前につんのめってしまうだろう。

武器を振るときに大事なのは《踏み込み》だ。踏み込みは相手に近づくだけではなく、武器を振ることによって生まれる勢いを止めてくれる支えでもある。

踏み込みの仕方や重心の位置を変えることによって、次の攻撃へ繋ぐことも、逆に攻撃をしてからすぐに相手から距離をとることも容易となる。

そのことを三人に説明しつつ、俺は素振りの仕方と踏み込みの種類をいくつか教えた。

その後、一時間ほどで三人の動きは見違えるほど良くなった。

ルネリーやチマは元々運動神経が良い方らしく、俺の言ったことは手本を見せればすぐに吸収していった。

現実では運動が苦手だというレイアは最初は苦労していたようだったが、二人とは逆に論理的な指導をしてやれば、頭の良いレイアはすぐに理解して、動きも良くなっていった。

つい忘れそうになるが、このSAOの世界では最初は誰もがレベ

ル1で同じ身体能力スベックを持っているのだ。

俺も、ルネリーも、チマも、そしてレイアも。

理論上では、周りの誰かに出来ることは時間を掛ければ誰にでも出来るということになる。……あくまでも理論上では、だが。

「キリユウさん！ 次は何をするんですか？」

「なんか、初めは素振りって聞いてエ〜とか思ってたんすけど……実際にちゃんと剣を振れるようになるって、結構感動するツスね」  
「……うん。私、自分がこんな風に動けるなんて思ってもみなかったよ」

三人は、自身の上達を確かに感じているようだ。それはそれで良い。それは自信となり、敵と対峙するときの勇氣となる。

自信が過信となる場合もあるにはあるが、今は三人に再びモンスター対峙させ、ちゃんと自分の力で戦わせることが大事なのだ。

昨日の恐怖を少しでも振り切れるだけの《勇氣》に、その自信がなってくれば良いと俺は思った。

そうして基本が出来てきた三人に、今度はイノシシとの実践の手本を見せることにした。

先ほどイノシシを発見したときは三人とも顔を強張らせていたが、俺が「……よく見ると滑稽な顔をしているな」と明るい所で改めて見たイノシシの感想を呟いたら、いきなり噴き出して大笑いをした。その後はもう先ほどの強張りはなくなっているように見えた。

特に狙ったわけでは無いのだが、緊張が少しでも解けたなら由よしとしよう。

そして俺は、三人に話を切り出した。

「……お前たちが実際に戦う前に、俺が一度あのイノシシとの戦いを見せる。……よく相手の動きを見て、自分が戦うときのイメージを固めておくように」

神妙な顔で頷いた三人に背を向け、俺はすぐ近くを暢気に歩いているイノシシに背後から斬りかかった。

「びぎーっ！」

イノシシは長めに一鳴きして距離をとり、いつも通りの突進を仕掛けてきた。

このイノシシは、突進の方向を変えるのに必ずその場で止まってから方向転換をするか、または飛行機のように動きながら大きく旋回することで進行方向を変えるようだ。

俺は、イノシシの突進を斜め前に跳躍して移動することで避け、イノシシが止まってこちらに方向転換をしている隙に、首筋目掛けて側面から袈裟斬りを食らわせた。

このとき、先ほど三人に教えた素振りと踏み込みを意識して、三人が自分の戦いを上手くイメージ出来る様に攻撃をする。

イノシシが止まっているときには背後からの連続攻撃。走っている最中ではヒットアンドアウェイのように一撃離脱。

そうして十回ほど攻撃しただろうか。最後に正面から鼻っ面に刺突を食らわせることで、イノシシは爆散、光滅した。

俺は胸の前で剣を水平に構えた残心を解き、三人に振り返った。

「ほ……え……」

「な、なんか、すごく簡単に倒しちゃったんすけど……」  
「……う、うん」

三人娘は口を開いて呆然としていた。

だがこれで、自分たちにも簡単にイノシシは倒せるのだと理解してもらえたと思う。俺のHPは全く減つてはいないのだし。

今回の戦いで俺が使った動きは、先ほど三人に教えて全員がちやんと使えると確認した動きだけだった。

俺の言ったことをちゃんと考えて、戦いのイメージを思い描くことが出来ればそうそう難しいことはない。

「……さて、自分たちが戦うイメージは出来たか？ 今度は、お前たちの番だ」

俺は、覚悟を決めろという意味合いも含めて、三人に言った。

## 8・特訓開始、その前に（後書き）

聞いてもいないのにNPCウェイトレスが話しかけてきた件。この作品ではウェイトレスNPCは、お客がいる間はテーブル間を一定の速度で移動しています。テーブルを拭いたり、食べ終わった皿を片付けたりですね。食べ終わると皿が消えちゃうのは味気ないですね。そして近くのお客の質問にも答えることができる仕様です。色んな性格のNPCがいるという設定なので、質問されなくても、疑問的な話を聞けば勝手に答えるNPCがいてもいいんじゃないかなあと思い、こうしました。人間ほいけど人間じゃない、そこに戸惑う主人公を見たかったw

あとは回復ポーションの件ですね。

この作品では初期配布金を500コルとしています。そして武器屋で売ってるレベル1でも持てる武器が平均400コル程度。買った後に戦ってお金を稼ぐこと前提なので、初期配布ギリギリの値段です。

それにプラスして最初に回復アイテムを数個揃えると仮定した金額が、30コルほどになります。

効果についてはかなり適当です。すぐには回復しないようにしたかったんですが、そもそもレベルが低いとHPも低いんで、悩んだ結果こうになりました。ランクは8巻圏内事件から引用。ぶっちゃけ適当です。EX、SS、SA、Fで、それぞれポーション、ハイポーションがある……という感じにしようかなーと……。

9/22 情報を頂いたので、ポーションの説明に「クールタイム」を追加しました。

## 9・愚者の思考（前書き）

初のチマ視点。意外とけっこう難しい子でした。

なので、変に感じたらすみません。

## 9・愚者の思考

おおっ、ついにこのときが来てしまったーって感じっス……。この《SAO》ソードアート・オンラインの世界に来てから、なんでこんなことになったんだろう、という考えは不思議としなかった。

SAOにわたしを誘った奈緒を恨むなんてことはしなかったし、あの茅場って人の言葉も『信じられない』っていう思いが先行して、あの人を憎いつて思うことも無かった。

キリユウさんの言葉をあのとき聞いて、これは夢じゃないんだってことは解ったけど、それでも夢のような出来事が多すぎて、わたしは本当の意味でこの状況を理解してないんだろっとなあと他人事のように思っていた。

初めてのモンスターとの戦いも、その場ではすっごく怖かったけど、のど元過ぎればって感じだった。

でも、あの二人は違った。ネリーもレイアも初のモンスター戦で相当に心にダメージを受けたみたいだった。

酒場での食事では普通に振舞っているようだったけど、キリユウさんの突っ込みにはかなり動揺しているみたいだったし……。

奈緒と美緒。二人とは小学一年からの付き合いの幼馴染だ。

わたしの名前《佳奈美》かなみに二人の名前の一字が入っているというそれだけの理由で仲良くなり、今までずっと遊んできて、お互いを普通に親友と呼べる仲になっていった。

二人の好きなもの、嫌いなものは把握してるし、逆もしかりだ。

まあ、誰だつて内緒というものはあるだろうから、二人について知らないことあつても、二人が感じてることはいつでも共感出来るよ、そう思っていた。

でも違った。二人が感じていることを、今わたしは共感できていないように思う。

わたしは自分のキャラというか性格というか、それを理解していると思ってる。自分にシリアスが似合わないことなんて何年も前から知ってた。

だったら逆に騒いでやろう。シリアスを吹き飛ばしてやろう。そんなことを考えて行動してるうちに、いつの間にかシリアスが長続きしないようになっていった。

怖いと思うこともある。憎いと思うことだってある。でも、寝るか食うかすれば何でもすぐにどうでもよくなってしまふ。

きつとわたしは楽を求めてしまふんだと思う。シリアスは疲れるから。

でも、それでもわたしだって譲りたく無いものがある。

それは奈緒と美緒のことだ。二人は今、何かを決心している。そんな雰囲気を感じる。

だけどわたしはどうなのだろう。

この二人みたいに何かを決心するような熱くなれるものは、はっきり言ってこの状況に感じてない。感じる事ができなかった。

でも、でもさ。それでも二人に置いてかれるようなのは嫌だったからさ。

いつもふざけていたわたしだけど、少しだけ真剣マシマシになってみようと思った。

「はいッス！ キリュウさん！」

わたしはピンと背筋を伸ばして手を挙げた。

「……………どうした？」

普通に知らない人が見たら睨にらんでるような目つきで訊いて来るキ

リュウさん。

でもあれが素なんだと解ってから、もう全然怖くなくなった。むしろ……いや、ナンデモナイデス。

「はい！ わたしが一番最初に戦うツス！」

「え！？」

「ち、チマ？」

ふっふっふ、驚くのはまだ早いツスよ、お二人さん。

これからわたしの本気を見せてあげるんスから！

と、思っていた時代がわたしにもありました！。

「ギャ ツス！！！」

いや待って。ホント待って。これを一人はマジ怖いって！

正直、昨日は逃げ回ったり、石をぶつけて挑発したりしただけで、ちゃんとコイツと対峙するってのは初めてなのだった。

いや最初はね、キリュウさんのやってた通りに軽やかに動いてシユパツって感じで攻撃するイメージをちゃんとしてたんだよ。

でもさ、でもね、イノシシが走ってくると、ドドドドドっていう段々地鳴りが大きくなっていく感じがさ、こうなんていうかな、恐怖を駆り立てるっていうかさ、そんな感じで何でか知らないけど動けなくなるんだよね。

「チマツ！！！」

「……っ！」

不意に聞こえた、大気が震えるようなほどの大きな声に、気付けばわたしの体は動いていた。

突進してきたイノシシの横に滑るように移動した、移動できたわたし。

さっきまで全然動けなかったのに。

今の声って……キリュウさん、ツスよね？

初めて聞くキリュウさんの大声。さっきから応援してくれているネリーとレイアよりも大きな声だった。

イノシシと距離が出来た私は少しだけ、離れた場所にいるキリュウさんたちの方を見る。

「……チマ。冷静に相手を観察すれば怖くはない。……冷静に、冷静にだ」

「チマー！ 頑張れー！」

「頑張つて！」

3人の声援を受けるわたし。でも何故かわたしの頭の中には「冷静に、冷静に」というキリュウさんの言葉だけが深く浸透してきていた。

冷静に、冷静にだ。

少し視界がクリアになったような、重かった体が軽くなったような、そんな感覚。

「……あ」

自分の変化に驚いていたわたしは、再びこっちに向かってくるイノシシを確認した。

何でだろうか、イノシシの動きがさっきよりも遅く感じる。

いや、違う。わたしがしっかりとイノシシを見てるからゆっくりに感じるんだ。

これならイケルかもしれない。

わたしはイノシシの突進を左に移動することで避け、横を駆け抜けようとすするイノシシの勢いを利用して、イノシシの側面を剣で擦るように切った。

そして、振り返ってイノシシの頭の上にあるHPバーを見ると、それは確かに減っていることが解った。

「……ふ……ふふ、ふふふふふ」

向こうの攻撃は当たってない。でもこっちの攻撃は当たった。

それさえ頭で解ってしまったら後は楽だった。

避けて切って、避けて切って。

キリウウさんに教えてもらった踏み込みをいくつか試したりする余裕も出来た。

「うおーりや〜ッスー!!」

そして、ついにイノシシを倒すことができた。

昨日今日とわたしたちを苦しめたあのコンチキショウは、わたし自身の手によって光の粒に変えてやった。

爆発して光の粒になったとき、なんてあっけない消え方なんだって思った。

わたしの視界の隅で、イノシシを倒したことで取得した経験値が数秒表示されて薄れるように消えた。

「わ、たし……自分で、倒せたんスよね……？ あの、イノシシを……」

何かが自分の足元から込み上げて来て、そのままバーンと弾けそうなの、そんな感じ。

「……あ……や……った……」

声を出したいのに喉で詰まって、もうちょっとで出そうな、そんな感じ。

「……やった。……やった……やったっ」

SAO（三）に来て、色んなことがあって、それで溜め込んだ何かを全部吐き出すように、わたしは叫んだ。

「やつ………た　　ツス~~~~~っ!!!!!!」

我を忘れて叫びまくったわたし。後で聞いたら二、三分は叫び通しだったって言われた……ちと恥ずかしいツス。

その後、我を取り戻したわたしは、戦闘中に調子に乗ってしまったこと　攻撃しながら高笑いとか、イノシシの突進をバレーリースピン避けとか　をゲンコツ付きでキリユウさんに怒られました。はい、すみませんでしたツス。

うーむ。すごく強いと思ってた相手が、実は物すごく弱いと気付いたら、なんかつい調子に乗っちゃうんだよね。

お前みたいになザコにビビッてたわたしは何だったんスカ〜オラオラオラ〜、みたいなさ。

「……ふう」

今はネリーがイノシシと戦ってる。

ネリーは昨日も一人だけちゃんと戦えてたように見えたと、今だ  
ってキリュウさんの教えてくれ通りに無難に戦ってる。

ちなみに戦った順番は、わたし、レイア、ネリーだ。レイアはす  
でに戦いは終わっている。

何というか、叫んだりとかはしてなかったんだけど、レイアの戦  
い方はどこか鬼気迫ってるというか、そんな感じがした。

別に無理矢理攻撃を当てに行ってるってわけでもなく、ちゃんと  
キリュウさんの言いつけは守ってるんだけど……それでも、自分の  
魂を削ってるような、そんなちよつと怖い風に見えた。

キリュウさんもわたしと同じ感想だったみたいで、レイアが戦い  
終わった後になんか話をしてた。

「……………」

キリュウさんって不思議な人だと思う。

触ったら切れてしまうような雰囲気リアルを纏っているように見えて、  
ゲーム内での自己紹介でうっかり現実の名前を言っちゃうこともあ  
るし。

ゲームが初めてだって言いながら、全然戸惑ったところを見ない  
し。いつも堂々としているように見える。

多分、キリュウさんがいなくなったら、私たちは三人ともちゃんと  
戦えなかったんじゃないかな、って思う。

だって、昨日は本当に怖かった。

食べて寝れば嫌なことはすぐに忘れてしまっただけで、もう  
一度戦うなんてことになればそのときの恐怖は蘇って来る。

でも、戦えた。

わたしだけじゃなくてネリーも、昨日動けなかったレイアさえも。

なんていうか安心感があるんだと思う。キリュウさんが大丈夫っ  
て言えば大丈夫と思っちゃうし、冷静にっ言えば冷静になっちゃ  
う。

あゝ、やばいなあ。やばいんすよねー。

あの茅場つて人が、わたし達の顔とか体とかを現実のものにしたみたいなんだけど、髪とか瞳とかの色は変わってなかった。

わたしはそのままの茶髪だけど、ネリーもレイアも現実での髪は金でも銀でもない。

きっと、キリュウさんの青い髪と瞳もゲーム内だけのものなんだろうけど……あの顔で、あの青い瞳で見つめられると、なんかヤバイ。すっごくヤバイ。

声を聞くと安心。でも瞳を見るとドキバク。わけ解らんです、はい。

まあでもねー、あの双子ちゃんたちもきつとやられてるんだよねー。

ネリーなんか最初っからやられてるし。

レイアも、あの子が歳の近い男の人とちゃんと喋ったのなんてかなり珍しい。幼馴染のわたしが言うんだから間違いない。

でもなー。ネリーは精神的に子供過ぎだし。レイアは遠慮しいだし。わたしは……だし？

てか、そんなことを考えてる余裕がある状況でもないのか。

はあー、わたしっつてホントしょうがない奴だよねー。ホント、わたしっつて《愚か者<sup>バカ</sup>》だ。

「キリュウさん！ あたし、やりましたー！」

あ、ネリーがイノシシを倒したみたいだ。

すっごいはしゃいでる。まあ、わたしもだっただけだね。

つてあああ、キリュウさんに抱きついて……うーん、子供はいいツスなあ無邪気で、うう。

だけど、これでわたしたち三人、あのイノシシにリベンジ出来たんだなあ。正直、こんなにあっさり行くななんて思わなかったけど。

きつと、ネリーもレイアも同じことを考えてると思う。

「チマ〜！ まだ日も高いから、もっと戦いの経験を積むつてよ〜！」

おっと、少し離れた所からネリーが呼んでる。ぼーっとしすぎてしまったみたいだ。

「わかったツスー！」

わたしは両手を振ってネリーに応えて、小走りでみんなの所に向かった。

三人だけだと無理だけど、キリュウさんが近くにいてくれればちやんとわたしたちでも戦えるってことが解った。

キリュウさんとわたしたちの関係については一旦置いておくとする。これ以上考えるのは危険だと思うし。

でも、なんか良い方向に向かっている気はする。

現実に戻れなくて絶体絶命、って思ったけど、キリュウさんとの出会で希望が見えてきたと思う。

わたしはにやけようとする口を、逆に思いっきり笑顔をすることで誤魔化し、三人の下で立ち止まった。

「もう、チマ。何してたの？」

「ゴメンごめんツス。つい」

あ。

プツン……って音が聞こえた。

ザーザー……だったかもしれない。

でも、どれでも同じだ。

だって、わたしの目の前が真っ暗になってしまったことに、  
変わりは無いのだから。

## 9・愚者の思考（後書き）

モンスターの強さ設定。

S A O が限りなくリアルっぽいと仮定すると、最初は誰もがちゃんと武器を扱うことは出来ないのではないかと思いました。なので《はじまりの街》の周り〜というか最初の数層は、武器をちゃんと扱うことが出来なくても、ソードスキルをちゃんと出すことが出来て、仲間との連携がある程度出来ていれば簡単に倒せる程度の強さにしようかと。

ピーターさんたちは弱点とか既に解ってるからソロプレイでもいけるけど、初心者はキツイと思うんです。

1層攻略まで約1ヶ月は、環境や、武器、スキル、連携に慣れる期間として長めに。ある程度慣れた2層は10日という早めのクリアなので、そんな感じかなと。

逆に最初から誰よりも武器に慣れていたら………ソードスキル無しでも1層程度なら楽勝かなーと；

## 10・本当のGAME START(前書き)

この作品はSAOの二次創作作品です。多分にオリジナルを含んでおります。

多分にオリジナルを含んでいるんです！

大事なことなので2回言いました。

いつまでたっても冒険に行けそうもないので、少し省略して一気に書きました。

10・本当のGAME START

「……チマが……消えた？」

ほんの一瞬の出来事だった。

俺たちから少し離れた位置にいたチマが、こちらに小走りで走ってきて立ち止まったと思ったら、いきなり時間が止まったかのように会話の最中に動きが凍りつき、一瞬だけブレて薄れるように消えていった。

「……え？ ……ち、チマ？」

「え？ あ、え？」

ルネリーとレイアは何が起こったのか解らない、というような顔をしている。

いや、それは俺もだ。

何だ？ 何故チマは消えた？ 何が原因でこの場から居なくなっただけ？

「き、キリユウさん……っ」

ルネリーがすぐる様な瞳を俺に向けてくる。

その様子を見て少しだけ我に返ることが出来た。

そうだ。俺は今、三人の師匠なのだ。ここで俺がうるたえる訳にはいかない。

そう思い改め、俺はルネリーに声をかける。

「……落ち着け。ルネリー」

「で、でもっ……チマが、か、佳奈美が、消え……っ」

ルネリーの体と声が震えている。  
恐らく最悪の事態の想像をしているのだろう。

「落ち着けっ……まだそうと決まったわけではない」  
「……でも……でもっ」

ルネリーは少し錯乱しているようだ。声は震え、既に瞳に雫が溜っている。

気持ちは解らないでもない。俺でさえ、かなりキているのだから……。

ルネリーがこうなのだから、レイアはどうなのだろうか。  
俺はレイアに視線を移動させた。

「ね、ネリー……き、きっと大丈夫だよ」

だが意外にもレイアは気丈な所を見せていた。……それでも足は震えているようだ。

恐らくレイアもルネリーを 自分よりも取り乱している者を見ることによつて一応の平静を保ってるんだろう。

俺は再びルネリーに視線を戻した。  
その時だった。

「ネ……奈緒。だ、大丈夫だよ。きっと、きっと大丈夫だから」

不意にレイアの声が途切れた。

俺も、そしてルネリーも、嫌な予感に導かれてレイアの方を見る。

「……………あ」

俺たちが見たものは、ちょうど消えゆくようにしているレイアだった。

「み、美緒　　ッ!」

ルネリーが叫びながら手を伸ばす。

しかし、伸ばした腕の先には、もう誰もいなくなっていた。

「……ああ……あ、ああっ……ああ、ああああああ!」

ルネリーは虚空を抱きしめて叫び声を上げた。

俺は、今の一連の出来事を唖然と見ているしか出来なかった。

何だ……どうなっている!?

待て、考える。思考を止めることはいけないと祖父にずっと言われてきたではないか。

「……ルネリー、落ち着け。……落ち着いて考えるんだ」

俺はしゃがみこむルネリーの肩に手を置き、同じようにしゃがみ込んで彼女の瞳を覗き込んだ。

「あ、ああっ……キ、キリュウ……さん? ……美緒が、美緒があ  
!」

ルネリーは俺をその瞳に映すと、俺の胸の服を力いっぱい掴んできて、訴えるように声を上げた。

俺はそんなルネリーの肩に置いた手に少しだけ力を籠め、出来るだけ冷静に声をかける。

「……ルネリー、よく考える。この世界で仮想体アバターが消える理由は—

っただけではない」

そうだ、この世界で仮想体アバターがいきなり消える理由は恐らく四つ。  
一つはHPがゼロになった場合。しかし、これは今消えた二人には当てはまらない。そもそもイノシシとの戦いでは三人ともほとんどHPは減らさずに勝っていた。そして、見ていた限り攻撃された形跡も無かった。故にこれは除外できる。

二つ目は親族が《ナーヴギア》を外してしまった場合。この可能性も無くはないわけでもないが、昨日から一日経ったこの中途半端な時間にそんなことをする人間がいるとも思えない。故にこれは保留とする。

三つ目は、これが一番理由としては可能性が高い。昨日、茅場が言っていた二時間の回線切断猶予を使つての病院などへの移設だ。だが、これなのだとする一つ疑問が出てきてしまう。そして、その疑問を突き詰めていくと、これからまた《あること》が起きるといふ予想ができる。

「き、キリュウさ」

「ルネ……ルネリー……！」

突如、俺の腕の中でルネリーが凍りつき、瞳の光が消える。  
そして、先の二人と同じように薄れるように消えていった。

「ぐ……う」

ぐつぐつと何かがこみ上げてくるのを感じる。  
呼吸が異常に速くなる。

待て、落ち着け。落ち着くんのだ。まず、俺が落ち着かなくては  
けない。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ、ハツ……………ハアアア……………」

深呼吸、良し。

落ち着いたか？

少しは…………。

自問自答を行い、少しずつ気持ちを落ち着けさせる。

一応、この可能性は考えていたはずだ。

今の一連の出来事が三つ目の理由だとして、レイアが消えたらルネリーも消える。それは予想出来ていたことだ。

二人は双子だと言っていた。だとしたら家も、ログインした場所もほぼ同じと考えていいだろう。

その予想が正しければ、二人が一緒に移設されると考えれば、ほぼ同時に消えたことには納得がいく。

ならば、チマはどうなんだ？ 三人が友人とは言っていたが、チマが俺みたいに友達のルネリーたちの家でログインしている可能性は？

解らない。だが、普通に考えれば自分の家からのログインではないのだろうか。

でもだとしたら三人がほぼ同時に消えたのは何故だ？

三人が消えた間隔は五分と無かった。こんなことがありえるのか？

もし、ありえるのだとしたら、四つ目の理由も検討しなければならぬ。

四つ目、それは外部からの救助だ。ありえないと思っていた外部からの救助と考えれば別々の場所からログインしたはずの三人がほぼ同時にSAOから居なくなるということにも一番納得がいく。

しかし、これには証拠が足りない。この場には、『はじまり街』の外には俺たちしかいなかった。そして今は周りを見ても俺しかない。

この理由の正当性を確かめるには、一旦街に戻って確かめた方がいいだろうか。

だが、もしも三人が戻ってくるとしたら、猶予時間である二時間以内には戻ってくるということになる。

そうした場合を考えると、俺はこの場に

「！」

突如、世界は暗転する。

これ、は……。

俺を取り巻く世界が、俺だけを残して暗闇に染まったかのような……。

周りの情景や足場がガラスのように砕け散り、無重力の暗黒にいきなり放り出されたかのような……。

これが……《死》、なのか……。

解らない。

死ぬなんてことを経験したことはないのだから解る訳がない。

しかし、これは先ほど考えた外部からの救助ではないのだと思っ。

体が闇色に染まり、手や足が動いているのかも解らないこの状態が救いなのだとはい底思えない。

ならばやはり、これは回線切断状態なのか？

今、俺の体は二木の家から移設されている最中ということなのか？

だとしたら、何故このタイミングで？

双子のルネリーとレイアだけならまだしも、別々の場所からログインしている俺やチマまでほぼ同時にこうなった訳は？

ここでは何も解らない。何も出来ない。

混乱する俺の頭に、更に師匠のあの言葉が再び響く。

まず、己の目で、耳で、肌で、全てで感じたものを、そのままに受け入れるのだ。

そして、それに対して自分に何が出来るのか、それを考える。そう、考えることが大事なのだ。思考を止めてはいかん。

待ってくれ師匠。ここでは俺は何も出来ない。何もすることは出来ないんだ！

何も出来ないということを受け入れればいいというのか？

しかし、それでは思考する意味が無くなる。思考した結論を実行して結果を出すということが、この教えの目的ではないのか？

解らない。何も解らない。

これが本当に介護施設までの移送のための回線切断だということも解らない。

あの三人が本当に今の俺と同じ状態だということも、解らない。

『コノママ、俺八死又ノカモシレナイ』

俺の思考が、そんな結論を生み出す。

何故なら俺は何も出来ないから。何故なら俺は何にも抗えないから。何故なら俺は何をも残せないから。

下向きな考えしか浮かばない。上向きな考えを出せる理由がどこにも無い。

心が弱くなる。精神が磨り減る。自信が無くなる。

俺は、今のそんな感情に一つだけ心当たりがあった。

それは、祖父と対峙していたときにしか感じなかった感情。祖父以外では感じなかった感情。

《恐怖》。

俺は今、この状況に恐怖している。

自分が何も出来ずに死ぬかもしれないという状況に恐怖している。あの三人に、祖父が一番怖いからそれ以外は怖くは感じないと言ったくせに、確かに恐怖している。

情け無い。

そして、悔しい。

今まで全てを犠牲にして鍛えてきたこの身体は何の為にだったのか？祖父の容赦の無い攻撃を避ける為に培ったこの洞察力にもう意味は無いのか？

あの三人にも、まだほとんど教えることも助けることも出来ていないというのに！

「俺は 何の為に生きてきたというんだ！？」

自分の腕さえも見えない暗黒の中で、俺は叫んだ。

もしかしたら此処には意識だけしかなくて、口すらなかったのかもしれないが、それでも俺は思い切り叫んだ。

「俺は………生きたい！ 生きていたいんだっ」

最後に大きく叫んだとき、俺は光に包まれた。

「キリユウさん！」

「！」

次に俺の視界に入ってきたものは、先ほどと同じ場所。はじまりの街の外周にある草原だった。

俺はそこに、意識が消える前と同じく、直立姿勢で立っていた。

「ああ、よかった。みんな戻ってくる事が出来て……」

レイアの、声……？ みんな？

俺は視線を少し下げる。

「……あ」

そこには、ルネリー、レイア、そしてチマ、三人がいた。

「……お前たち、俺も……戻って、来れたのか……」

無意識にそんな言葉が俺の口から漏れた。

俺の言葉を聞いた三人は、一瞬きよとした顔をして、三人とも涙を溜めた瞳で笑って言った。

「はい！ 帰って来れました！」

「もう、すごくビビったツスよ。いきなり視界が暗くなって……で、戻ってこれたと思ったら誰もいなかったツスし！」

「うん。……それにキリユウさんは特に時間がかかっていた見たいで、すごく心配しました」

その三人の笑顔を見たとき、俺は確かに安堵していた。

そして、その安堵感が先ほどの恐怖をはっきりとさせる。

確かに俺はあのと恐怖していた。

何も出来ない自分に、三人を助けられない自分に、今までの鍛錬が無に帰すかもしれない状況に。

「……………」

故に、俺は認めよう。この現実を甘く見ていたということに認めよう。この世界《SAO》を甘く見ていたということに。

認めよう。俺は強くなつてなかった。誰かの意思で、簡単に無力になってしまったということ。

認めよう。俺は祖父以外にも恐怖する、してしまふんだということ。

俺は、自分で思っているよりも弱かった。弱いと再確認させられた。

だが、一つだけ認められないものがある。

それは 俺がこのまま弱い自分で居続けるということだ。

それだけは、絶対に認める訳にはいかない。

俺は強くなる。あの無力感を二度と味わう事がないように。

だから俺は、改めて決意した。この現実を、絶対にクリアするということ……。

そうすれば、あのと感した恐怖を克服することが出来ると、そう信じた。信じ込んだんだ。

「……………」

でも今は、今だけはそれは置いておくことにする。

「……………ルネリー、レイア、チマ」

「は、はい」

「なんスか？」

「ど、どうしました」

俺は三人を抱きしめるように腕を回した。

「ほえ!？」

「な、な、な、何事ツスかつ!？」

「~~~~っ!？」

俺の腕の中で体を強張らせる三人。

当然だろう。いきなり昨日知り合ったばかりの男にこんなことをされているのだから。

でも、俺はどうしてもこうしたかった。伝えたいことがあったから。

恐らく小さすぎて聞こえないかもしれないから、なるべく近くで聞いて欲しかった。

「……………三人、とも……………生きていてくれて……………ありがとう……………っ」

あの暗闇から帰ってきたとき、俺は確かにこの三人に救われた。

三人が生きていてくれたことが嬉しかった。その気持ちを、三人に伝えたかったんだ。

このとき俺は、かすれた声しか出せなかった。

だが、三人にはちゃんと届いてくれたようで、俺たちはしばらく四人で無言で寄り添っていた。

それから五日が経った。

あの後、俺は三人に今後は本格的にSAO攻略に出たいという旨を話した。

三人は俺に付いて来たいと言ってくれた。

俺は、この三人を必要以上の危険に付き合わせることに拒否感が

あつたが、攻略を行いたいという自分の想いと、三人の助けになるという決意を合わせて考えた結果、一緒に行くということになった。そうして街を出ることを決めた俺たちは、その日から一週間を準備期間として、はじまりの街を出発するための準備に取り掛かった。準備期間中、朝六時から午後三時までを街の周辺での経験値稼ぎに当て、残りを自由時間として各自で旅の準備をしたり、街の情報収集に努めた。

そのお陰もあつて五日経った現在では、ルネリーたち三人は全員レベル4に上がっていた。

その上更に、三人は俺も驚くほどの成長をしていたのだった。

それを知ったのは準備期間三日目の正午のことだった。

いつものように街の外周の草原での経験値稼ぎと戦い方の指導の最中、俺はふと思いついたことを三人に聞いてみた。

「……………そういえば、お前たちはスキルスロットはもう埋めたのか？」

この三日間、俺はこの三人に戦い方をずっと教えて来たが、ゲーム的なことを話したことは無かった。

今まで忘れていたが、このSAOというゲームを本気で攻略するとすれば、そういう部分にも慣れなければいけないだろう。

そこは俺の準備期間中の課題とも言える。

「スキルですか？ ああ、それならちょっと前に三人で話し合っ  
て決めました」

「あれ？ ネリー、あなたがキリユウさんに話しておくって言って  
なかったっけ？」

「え？ ………………ああっ」

「……………」

話を聞くと、以前俺のスキルスロットの話をした後、寝る前に部屋で三人話し合ったらしい。

これから俺たちは四人で街の外に出る。……三人は《冒険》と言っていたが。

三人が話し合ったのは、その冒険で必要そうなスキルを、四人で分担しようというものだった。

俺は《両手用長槍》と《索敵》をスロットに入れてあるとの話でした。

だから三人は、自分のスロットの一つを、今までの戦いで慣れた《片手用直剣》で埋めて、残りを何にするかで悩んだらしい。

そうして決まったのがルネリーは《識別》スキル。視認したモンスターの情報を知ることが出来るスキル。

レイアは《測量》スキル。自分の移動した場所をマッピング出来るスキル。

チマは《鑑定》スキル。モンスターがドロップした正体不明のアイテムを鑑定できるスキル。ということになったらしい。

何をなすにもスキルが重要なのがこのSAOの仮想世界だ。使えるスキルが多いに越したことはない。

しかし、俺が感心したのはこれだけでは無かった。

「あ、そうだ！ キリュウさん、キリュウさんっ。ちょっと見てて下さいね！」

「……？」

ルネリーは説明も無く俺にそう言つと、そのまま剣を構えたまま近くを歩いているイノシシに斬りかかった。

「やあああー！」

気合の籠った声とともに降り下ろされる剣。それはいつもと同じ……ではなかった。

「……………！」

ルネリーの剣は淡い水色の光を放ちながら、普段よりも一層鋭い袈裟切りがイノシシに直撃した。

そう、それは《ソードスキル》特有の輝き。

ルネリーはイノシシにソードスキルを放ったのだ。

レベルが上がり、筋力や敏捷力が僅かばかり上がったとしても、彼女らでは一撃で倒すことは出来なかったイノシシは、その一撃で光へ還った。

「えへへっ、どうでした？ どうでした？」

褒めて欲しいと言わんばかりに笑顔でこちらに駆けてくるルネリー。

聞けばレイアやチマも、片手剣の基本剣技ソードスキルは出来るように、自由時間を使って練習したらしい。

俺は三人に、以前自分が使ったときに感じた違和感について聞いてみた。

「へ？ あー、確かに勝手に動きますし、技の後ちょっと固まりますよね」

「ん〜、わたしはそんな気にならないツスけど？」

「……………そう、ですね。私も、そういうものなんだなと思ったたらそうでもなかったです」

どうやら俺のほうが少数派らしかった。試しにもう一度使ってみ

だが、やはり違和感が凄くて使いにくかった。  
結論、俺にソードスキルは合わないらしい。

しかし、そうして俺たち四人は、この世界で順調に力をつけていった。

次に、経験値を稼ぐこと以外に俺たちがしたのは、情報の収集だった。

俺たちにはSAOの知識が圧倒的に不足している。  
どこに何があつて、どんなモンスターがいて、どうすればこくなる、など。

俺たちは自由時間を使い、はじまりの街を手分けして走り回り、情報を得ていった。

自慢にもならないが俺は会話が苦手だ。  
故に、誰か他のプレイヤーに解らないことを訊くということが出来なかった。

なので、基本的に俺は街の施設やNPCについて調べた。  
道具屋、雑貨屋のNPC店主に訊けば、旅に必要な道具についての話が聞けた。

武器屋、防具屋では、装備の耐久度を直して貰えるらしい。  
黒鉄宮の近くにあるギルド会館という場所では、数人からギルドを組んで登録出来るらしい。

ギルドを登録し、そのメンバーでPTを組むと戦闘時に攻撃力に僅かにボーナスがあるらしい。

そして図書館のような建物も見つけた。そこに貯蔵してある本には、この近くの村や、モンスターについての情報などが記されていた。

その他にも貸金庫屋、鍛錬所、鍛冶屋、占い屋、軽食店なども廻った。

更に宿泊施設にも種類があり、馬小屋などでも泊まれるらしい。

……寝心地は保証しないとわれたが。

そうして何人ものNPCの話聞いてる内に、暫く話すと頭に金色のクエスチョンマークが現れるNPCがいる事が分かった。

そのクエスチョンマークは、依頼発生クエストの証なのだそうだ。

それが出ているNPCに話を聞き、クエストを受けてその達成条件を満たすことで、様々な報酬が貰えるという。

俺が受けたのは、買い物のお使いや、街の周辺に出るモンスターが落とすアイテムの収集、荷物運びや薪割りなんてのもあった。

その中で一番つまらかったは買い物のお使いだ。何と言ってもこのはじまりの街は広い。要求してくる物が凄く遠い場所にあることはさらだった。

しかし、そのお陰でだいぶ冒険の準備は捗った。

とあるクエストでは、報酬として主人のお古だと言って軽装の胸鎧を貰った。店の品と比べても高い防御力を持っているし、かなり軽いので俺たちでも十分に装備出来た。

俺はそれをルネリーに渡した。ルネリーはSAOでの数ある武器使いの中では盾剣士志望らしい。前線で仲間を守るポジションにいたいのだと言っていた。俺はその想いを尊重した。ならば、現在一番防御力の有る装備を着けさせて、今からそういった戦い方に慣れさせた方がいいだろうと考えて、ルネリーに渡したのだ。

ちなみにチマは両手剣志望らしい。色々な鬱憤を剣に乗せて豪快に敵をなぎ倒したいと叫んでいた。

しかし、《両手用直剣》スキルは《片手用直剣》スキルの派生らしく、つまりはもう少し片手剣を使う事となるみたいだ。

レイアは特に希望の武器はないらしい。だがそれも仕方ないとも言える。

この世界がただのゲームであったなら、ゆっくり探すということも出来たかもしれないのだが……。

暫くは今まで通り、三人とも使いなれた初期装備の《スモールソ

ード》を使うという事に落ち着いた。

そして、俺以外の三人もクエストはいくつかこなしていたみたいで、訓練で手に入れた素材アイテムの売却も含め結構な所持金を手に入れた。その金も使って、旅において必要な装備や道具を揃えたのだった。

そうして俺たちが準備を進めていく中、はじまりの街も変わっていった。

いや正確には、はじまりの街に滞在していたプレイヤーたちが変わっていったのだった。

最初に変化に気付いたのは準備期間二日目の戦闘訓練のとき。

俺たちの他に街の外でイノシシや巨大イモムシと戦っているPTが数集団いた。

そして、その集団は日を増す毎に増えていった。

「……しかし、これでは満足に戦えもしないな」

準備期間五日目の今日、俺たちはいつものように戦闘訓練をしていたのだが、正午を過ぎた辺りから石を投げれば当たるほどにその集団は増えていた。

草原のあちらこちらでモンスターと戦うPTの姿が見える。

「何か、聞いた話によりますと、なんとかーって人がみんなで立ち向かえばモンスターも怖くないんだーって言って、集団で安全にモンスターを狩って、それで得たお金で戦えない人たちも含めて平等に食糧とか寝る所とかを援助？ する活動を始めたらしいです」

「援助だけじゃなくて、このSAOの攻略も視野に入れていると聞きました。多分、私たちみたいに有る程度レベルを上げてから数で

押していくのではないかと……」

ルネリーの情報にレイアが追記した。

しかしなるほど。多人数を使った人海戦術は全ての戦いに等しく効果的だ。

確かにそのグループに入れば危険は減るかもしれない。

そう俺が言うと、

「えー、わたしは何かいやッス。あの人たち」

「あたしもかなあ」

「……どうしてだ？」

「なんて言うか、感じが悪かったッス。確かに必死なのは解るッスけど、こっちが先に目を付けてた獲物まで奪うように群がって……ブツブツ」

「あはは……。でも、キリュウさん。チマの言う通り、あの人たち弱いモンスターを倒すことに必死で自分たち以外見えていないって感じでした。確かにあたしもちよつと……ですね」

「ちゃんと親切な人もいるにはいると思いますが……やっぱり人が集まりすぎると……」

ふむ、そうだな。三人の言い分は一理ある。

人が集まればその分トラブルも増えるだろう。

更にこの先、団体で攻略に乗り出すとすれば、命令系統も作らざるを得ない。つまり、自由には動けなくなる。それは……困るな。

思考の末の結論を行動するのが俺のやり方だ。その行動を制限されるのはやはり困る。

結局俺たちはその集団には入らず、放置することにした。

だが、街周辺のモンスターの手当り次第狩られるのには参った。数少ないモンスターの取り合いをするというのも効率が悪い。

俺たちは仕方なく、一週間と定めた準備期間を一日早め、明日の

早朝にはじまりの街を出発することにした。

そして、翌日。

俺たちが街を出発するときが来た。

「……全員、準備は出来たか？」

ここは、はじまりの街の《北東ゲート》。俺たちは今そこにいた。街のNPCに話を聞いたところ、北東ゲートから伸びる街道沿いをずつと行けば、とある小さな村に辿り着くらしい。なので、俺たちの最初の目的地はそこにした。

「はい！ ばっちりです！」

街への出入り口となっている巨大な門の前で、俺たちは最後の確認をしていた。

「……武器、防具」

「大丈夫ッス！ 昨日直してもらったばかりッスから、耐久値MAXッスよ！」

心なしか、三人も興奮しているように見える。

「……道具は？」

「はい。テントから食べ物まで、回復ポーションも解毒ポーションもたっぷりです」

今日まで俺たちは様々な準備をしてきた。

三人はだいぶ戦闘に慣れたし、ソードスキルを使った連携も出来るようになった。

そして俺自身も、このSAOのシステマ的なものになりに慣れた、と思う。

まあ、未だにソードスキルは苦手なのだが……。

「……よし」

それでも、十分に準備はした。あとは、実際に冒険をして経験を積んでいくしかない。

今の俺は弱い。それは認識した。

強くなるにはどうすればいいのか、それはあの日からずっと考えてきたことだ。

レベルが上がれば強いと言えるのか？ ゲームを攻略すれば克服したと言えるのか？

解らない。このゲームをクリアすれば、少しは克服出来るとも考えたが、それだけではダメな気もした。

だから、この三人を守り抜き、なお且つ元の世界に戻れたのなら、少しは強くなれているのではないかと、今はそう思う。

「……………ん」

気合は十分。俺ははじまりの街に背を向け、三人に号令をかけた。

「……では、出発する」

「おー！」

「おーッス！」

「はいっ！」

三人の元気のいい声とともに、俺たちはゲートから伸びる街道を歩き出した。

ここからが、俺たちの冒険の始まりとなる。

本当の ゲーム・スタートだ。

回線切断の間についてはオリジナルということ許して下さい。意識に空白ができた、と原作に書いてありましたが、個人的な意見としましては、切断によりSAOの世界が見えなくなっただけで、意識はあるんじゃないかなあと。回線は切れていても、内蔵バッテリーによって電源は入ったままでしょうし、五感を脊髄で遮断してオンライン？の風景を見せているという感じなのだったら、ただ仮想世界が見えなくなるだけなのかなあと……いや、苦しいですね。すみません。

回線切断時のアバターの消え方についても勝手に考えました。死亡エフェクトとも違いますし。どちらかというところログアウトに近い消え方かなと。でもだとしたらALOやGGOみたいに長い時間アバターは残るのかな？と考えましたが、茅場さんの言った「ログアウトボタンが無いのは仕様だ」との言葉から、そういうことは考えていない。ログアウトは即時消える。みたいに解釈しました。消え方は昔やってたMMOのを少しいじって話に組み入れやすくしました。

言い訳ばかりですね。すみません。ですが更に言い訳を……。

少し省略しすぎた感があり、心情描写に大変不満が残りました。どこがってというと良く分からないのですが；  
なので、いつになるかは分かりませんが、書きなおすかもしれませ  
ん。

どこかに違和感を感じましたらご指摘お願いいたします。

### EX3・心配以上に信頼を（前書き）

現実世界での二木くん視点です。

こっちも省略しすぎて上手くまとめられたかな、とちょっと不安です。

### EX3・心配以上に信頼を

東雲が《SAO》ソードアート・オンラインに囚われてから六日が経った。

あの日、俺が家に帰ってきた後、お袋が東雲の両親と病院、警察に連絡を入れた。

そして一時間と経たずに東雲の両親がウチに来た。

俺は怖かった。怖くて震えていた。

だって東雲は俺のせいで、俺がSAOに誘ったせいでこうなってしまうんだから。

きつと怒られる。お前のせいだって言われる。それがすごく怖かった。

でもしょうがないんだとも思う。だって、俺のせいってことに変わりはないんだし、実際に俺は俺を許せそうに無い。

俺は、罰を受けなきゃいけないんだ。

そう思って、俺は震える足で東雲の両親の前に出た。

でも東雲の両親は、俺を怒りはしなかった。

逆に、東雲と友達になってくれてありがとう、とさえ言われた。

東雲の両親は共働きで、帰ってくるのも夜遅く。

だから、東雲とも慌ただしい朝ぐらいしか話す機会が無かったらしい。

東雲のじーさんは、そんな東雲を寂しがらせないようにって、寂しがる暇も無いほどに小さい頃から東雲を鍛えていたんだという。

でも、逆にそのせいで東雲は祖父との稽古一筋となり、友達も満足に出来ない状態になった。

孫を想った不器用な祖父。祖父に伝えようとした孫。

誰が悪いというわけではないが、それでもどこか歪んでしまったのだという。

しかし、最近になってそんな東雲に変化が現れたらしい。

唯一家族が揃う東雲家の朝食時。普段、その日の予定ぐらいしか話さない東雲が学校のことを話したという。そう、俺のことを……。俺は泣いた。打算で東雲に近づいた自分の卑しさが惨めだった。東雲がS A Oに囚われたと聞いたときも、東雲の心配と同時にまた一緒に遊べなかったという自分本位な考えも浮かんでしまった自分に、堪らなく嫌悪した。

だけど東雲の両親は、そんな俺を慰めてくれさえもした。俺のせいで、自分たちの息子の命が危険に晒されているというのに……。俺は訊いた。何でそこまで優しく、いや平静でいられるんですか、と。

俺は怒って欲しかったんだ。俺が悪いんだと、俺のせいで東雲はあんな目に遭ってしまったんだと。

でも今思えばそれはただ、怒られることで自分の罪悪感を少しでも軽くさせたかったからなんだと思う。俺はもう怒られたんだという事実が欲しかったんだと思う。

だから俺はあのと、少しやけ気味に東雲の両親に訊いたんだ。そうしたら。

「……確かに。あの子は今、いつ死んでも可笑しくない世界にいると聞いている。そして、私たちはそれを心配してはいないわけではない」

「そうですよ。私たちは、あの子を心配している以上に、信じているんです。お父さん。あの子のおじいちゃんから授かった免許皆伝は、伊達では無いのですよ?」

その言葉に、俺はまた衝撃を受けた。

心配はする。しかし、それ以上に信頼している。

強いな、と思った。俺はまだ、そこまでの関係を東雲と築けてはいない。

普段忙しくて家にいないとは言っても、それでもこの人たちは東雲の《親》なんだ。

絆の強さには敵うわけないとは解ってるけど、それでも悔しいと思ってしまうた。

東雲の両親が来てから一時間ほどしてから、病院から簡易点滴セツトが送られてきた。

なんでも、S A Oに囚われた人は東雲だけではなく、この付近でも結構人数がいるらしい。

その全員を看護施設へ移送させるための準備の間の緊急策として、各被害者の家に救急隊員が配って回っているらしい。

救急隊員だという人は、東雲に点滴を取り付けて、点滴の簡単な説明を俺たちにしてから出て行った。

これは後で知った話なのだが、ウチの県には五百人近くもS A Oに囚われた人がいたらしい。いきなりそれだけの人数を、更に全員が意識不明の上、長期間の介護体制を可能としている施設に出来るだけ早く移送させるというのは、かなり厳しいことだろう。

しかし、そこで救世主が現れた。

三十代前半という若さで県議会議員になったとある人物が中心となり、県内のS A O 虜囚者の移設に積極的に取り掛かった。

準備に人手が足りないことをボランティアや地域団体に呼び掛けることで解決し、移設先の準備をたった一日足らずで完了させたという。

このとき、その人物はある方針を立てた。

それは、S A O 虜囚者の移設を全員同時に行うというものだ。

これには流石に反対した者もいたらしい。事は一刻を争うのだから、準備が出来た所に順番に移設すれば良い、そちらの方がスムーズにことは運ぶことが出来る、と。

それに対してのその人物の言い分に結局は反対派は押し切られたという。曰く。

SAO 虜囚者は基本的に若者が多い。つまり移設を願うのは被害者のご両親だ。早くしっかりと介護できる施設へ連れて行きたいと思うのは誰もが一緒だ。そこへ順番にと言われたら最後の者はどう思う？

誰だつてこの状況に混乱している。

だったら少しでもその状況に救いを、安心感を求めるのは人間として当たり前だろう。

この場合だったら、出来るだけ早く病院なり介護施設なりに移設出来れば、少しは安心ができる。心が保てる。

しかし、それに順番があつたら？

最初の人はいい。だけど最後の方の人は？

訳の解らない状況で、いつ死んでしまうかもしれない我が子を見ながら自分の番を待つ。それはどれ程に苦しいことだろうか。

そんなことを言われた同時移設反対派は、何より自分たちが県民に非難されることを懼れた。

こういう経緯もあり、翌日の午後一時、皮肉にもSAOの公式サードビス開始時間のちょうど二十四時間後に、県内のSAO虜囚者の一斉移設が始まった。

東雲には近くの総合病院の一室を充てられた。

俺も、俺の両親も、そして東雲の両親も見守る中、東雲は移設された。

一時的にとはいえ移設のために回線を切断しようとしたときは、言いようも無い恐怖感に襲われたが、特に問題も無く東雲は病院へ

移ることが出来た。

ニユースでは、移設への途中で予想外のトラブルが起こり、そのまま猶予時間内に回線を繋ぎ直すことが出来ずに……という人もいたらしい。

もし、東雲がそうなってしまったら……そのニユースを見た時は思わずぞつとした。

余談だが、茅場晶彦の犯行声明から一日と経たずに一斉移設を行うという偉業を成した若い県議会委員は、その行動力と組織力、そして被害者の家族を想つての配慮を認められ、数日後には全国的な評価を得ることになった。次は国会選に出馬するのではないかという噂が広まるのもそうそう遠くない未来だろう。

「……健太。お母さん今日はもう帰るけど、あんたも長居はしちゃ駄目よ？」

「わかつてるって。もう少ししたら帰るよ」

あれから毎日、俺は東雲の見舞いに病院へ来ていた。

東雲が寝ているベッドの横の椅子に座り、じっと黙って東雲を見つめる。

あの日、東雲の両親が言った、心配もするが、それ以上に信じている、という言葉が俺の頭から離れない。

「……俺にも、出来るかな？ お前を信じて、お前が帰ってくるまで待つことが……出来るかな？」

俺の問いに答える者は、答える事が出来る者は此処には誰もいない。

要は、俺自身がどれだけ東雲を信じられるか。信じて、東雲が帰ってくるまでに何が出来るのか、なのだと思う。

東雲の友達を続けたいなら、俺はこのままでは駄目な気がする。

何かを、今はまだ解らないけど何かをしなければいけない。そんな気がするんだ。

「……………東雲。……………俺、変わるから。お前が帰って来たときに、今度はちゃんと胸を張って友達　いや、《親友》だって……………言えるようになるから。……………だから、さ。早く……………帰ってこいよな……………」

俺はそう言って、病室を後にした。

東雲。お前がSAOで戦っているのを同じように、俺も戦うよ。俺も……………強くなるからな。

### E X 3 ・心配以上に信頼を（後書き）

前話での同じタイミングの回線切断の理由をこの回で説明しています。

説明……できてるかなあ；

主人公P Tの四人は同じ県内という設定です。

これも、いつか追加しなくては……。

まあですが一応、これで序章は終わりとなります。

次話からは主人公P Tの冒険中心となります。

二木くんは……ちよっとお休みです。

9 / 2 2 県内虜囚者の人数を二百人から五百人に変更しました。

違和感などありましたら、ご指摘、ご質問宜しくお願い致します。

## 1・林檎と少女（前書き）

新章突入です。

冒険初心者の主人公たちの仮想世界での戸惑いや、協力して困難を乗り越える様をしっかりと描けたらいいなと思います。

一話目なのにルネリー視点です。

## 1・林檎と少女

「ふんふん、ふつふつ、ふふふふん」

早朝特有の少し冷たい、だけど清々しい空気の中、あたしたちは街道をゆつくりと歩いていった。

ただ土を均して整備しただけの三車線くらいもある大きな街道。

街道の両脇には、この世界に来るまで見たこともなかったほどの緑一色の草原がある。

よくよく目を凝らして見ると、なんと小さな虫たちまでいた。あたしは何とも無いんだけど、レイアとチマは「何も仮想世界にまで虫を作らなくても……」とガツクリしていた。

まあそれは置いておいても、風で靡いて変わる草原の模様なんかも、かなり良い感じだった。

まだ時間も早いせいか、それとも《はじまりの街》から離れる人があまり居ないせいか、わたしたち以外に街道を歩いている人は居ない。

「機嫌良いツスね、ネリー」

わたしの隣を歩くチマが苦笑しながら話しかけて来た。

初期装備である白いシャツと灰色のベスト、ベージュ色のスカートは今も変わらない。でもその上に、革製の胸鎧と、同じく革製のブーツ、腰には大きめのポーチとスモールソードの剣帯を付けた、如何にも冒険者って感じの出で立ちになっている。

「うんつ。だつてさ、何かこう……これから、あたしたちの冒険が始まるんだー！ って感じしない？」

「もつっ……街を出てからずっとそうなんだから。途中で疲れても

知らないよ?」

あたしの言葉に、毎度お馴染みとなったレイアのツツコミが入る。

少し後ろを歩くレイアをあたしは見た。レイアの装備もあたしやチマと殆ど一緒だ。違いと言ったら、あたしの胸鎧プレストだけは何かの金属製だつてことと、あたしの背中には木と革で出来た円型盾バックラーがあるつてことくらいだ。

「えへへへ。だいじょぶダイジョブ!」

レイアの後ろには、既に親指くらいの大きさになったはじまりの街が見えた。

それを見ると、ああ冒険に出たんだゝつて思いがまた湧き上がってきて、こう、なんか動き回りたくなる。

「……敵影確認。二時方向。数一」かずいち

不意に、先頭を歩くキリュウさんが声を上げた。

キリュウさんの格好は、初期装備の上に青いレザージャケットを着て、背中で槍を専用のベルトみたいなもので若干斜めに固定している。槍を横向きに固定すると小回りが利かないし、縦向きだと走るときに足に当たるから、走るときに邪魔にならない程度の斜め上向きに固定するのに苦労していたのを覚えている。

おとと、そんなことを考えてる場合じゃないね。モンスターが現れたー、です。

うーん、あたし達が話してる間でも気を配ってくれてるってスゴイよね。

「はい！ あたしが行っきまーす！」

とにかく動きたかったあたしは、背中から円型盾を、腰からスモールソードを抜いてキリユウさんの指し示した方向に走り出した。

「……レイア。一応付いて行ってくれ」

「あ、はいっ」

後ろから、キリユウさんがレイアにあたしの援護をしるとの指示をしているのが聞こえる。

この辺りのモンスターならあたし一人で余裕だとは思うけど、油断大敵といつもキリユウさんに言われているから別にそれに文句は無い。

でも、レイアが来る前に倒しちゃっても大丈夫……だよな。

あ、モンスター視認っ！

キリユウさんから20メートル程の場所。背が高めの草むらを抜けた先に、一匹の大きな犬が居た。

ズングリした茶色の毛、大きな爪、光の無い眼、むき出しの黄色い犬歯に垂れ流しの涎。

……結構な犬好きだと自負しているあたしだけど、あれはイヤだなあ。

「はああ……《識別》スキル、発動っ」

初めて見るモンスターだったので、あたしはその犬から少し離れた草むらの影から、モンスターの情報を得る為に識別スキルを発動させる。別に声を出さなくてもいいのだけど、そこは気分の問題だ。

頭の中で「シュピーーン！」と効果音を出しながら、あたしはその犬を凝視した。

『モンスター名《ストレイ・ハウンド》：レベル2 HP308  
攻撃的モンスター』

大型犬そのまんまなモンスターの頭上のカーソルがある場所に、簡単な情報が付け足される。

まだまだあたしは《識別》スキルの熟練度が低いため、この程度しか情報が出ない。

「ストレイ・ハウンド……か」

「直訳すると《はぐれた猟犬》。……この場合はそのまま《野犬》って感じかな？」

あたしがモンスターを観察していると、レイアが来てしまった。

……いやまあ、来て欲しくなかった訳じゃないんだけどね。

「レベルも低いし、楽勝だよねっ」

「……でも、爪や牙には気を付けないと。変な特殊効果がある場合もあるってキリユウさんも言ってたでしょ？」

おとと、そうだった。

キリユウさんは、準備期間中に街の図書館で調べたモンスターのことなんかを、あたしたちに丁寧に教えてくれた。その中で、この<sup>ゲーム</sup>世界で出てくるモンスターは低レベルの奴でも毒や麻痺、金属腐食などの特殊能力を持っている奴もいるので、色々と注意が必要だということを知ることがあった。そして、そういう特殊能力を持っているモンスターは、大抵がその外見から予測できるとも言っていた。例えば、蛇型モンスターは牙に毒を持っている場合が多いし、口のような器官の有る植物型モンスターは腐食液や溶解液をそこから吐き出す場合も有るらしい。

よつするに、らしいモンスターにはらしい特殊効果があるんだと、あたしは認識した。

そうすると、目の前の《ストレイ・ハウンド》にそれを当てはめて見れば、レイアの言うとおり、あの汚い爪と黄ばんだ牙に何か有りそうだなと予測できる。もし他に特殊な攻撃があるんだとしても、あの外見を見る限り口から何かを吐く？ ぐらいいしか思いつかない。

「……んー、よし。考察完了！ あたしから行くね！」

身を隠してくれていた草むらから飛び出たあたしは、円型盾を前に掲げながら駆け出した。

後ろから「まだ返事してないよっ」という声が聞こえる。

心の中で苦笑しながらゴメンと言って、あたしは走りながらその犬の動作を見る。

攻撃的モンスター<sup>アクティブ</sup>だけあって、草むらからあたしが飛び出した瞬間にはこちらに気付いていたようだ。

犬が、荒い息と共に涎を撒き散らしながら走ってくる。

一週間前のあたしだったらこんな光景にはすぐにビビッていただろうけど、六日間のキリユウさんとの訓練を積んだあたしにはあの近づくだけでもおぞましい巨大イモムシを一人で倒すことが出来たあたしには、寧ろ単調な動き過ぎて笑いがこみ上げてくる。

「……むむむ、これもあたしの悪い癖の一つだ、なっつー！」

すぐに調子に乗ってしまう自分の悪癖に自分でツッコミながら、飛び掛ってきた犬の顔側面を盾で裏拳をするように当てて受け流す。そしてすぐさま振り返って、着地の衝撃で一瞬硬直している犬へ背後から斬りかかった。

「せーいっー！」

片手用直剣基本技《スラント》。  
淡い水色のライトエフェクトを纏った剣が、犬の背中に袈裟斬りを食らわせる。

あたしが今一番得意としているソードスキルがこれだ。同じ片手用直剣基本技の横斬り《ホリゾントル》や、縦斬り《バーチカル》よりも、姿見で見たとときのかつこ良さがあたし的にツボってしまい、一番たくさん練習してしまったのだ。

あたしの技をモロに受けた犬はそのまま横に弾き飛ばされた。ぐるぐる、とあたしを睨みながら立ち上がるうとする犬。でもそんな犬に追撃してくる人影がいた。

「……やあっ！」

タイミングを見計らっていたらしいレイアだ。

レイアは、まだ立ち上がりきっていない犬に向かって、彼女の最も得意とする剣技《ホリゾントル》を放った。

体勢の整っていないかった所に追撃を受け、犬はきゃうんとその姿には似合わない声を上げて、光に消えた。

「ナイス、コンビプレイ！ レイア」

あたしは剣を腰の鞘に収めて、レイアの所に歩きながら右手を上げる。

「ナイス……じゃないよう。ちゃんと打ち合わせしてから行ってよ。……ビックリしたんだからね」

レイアはぶつぶつと文句を言いながらも右手を上げて、パンツとハイタッチしてくれた。

「あはは。結果オーライ、結果おーらいっ」  
「もっ……」

レイア 美緒とのこういうやり取りは《S A O》<sup>三</sup>に来る前から全然変わってない。

でも、やっぱりS A Oでの生活であたしも、そしてレイアも変わった。ううん、変わらなきゃいけないかった。

この世界を生き抜くには、戦闘でどんなモンスターにも怖がらずに向かっていくようにならなきゃいけないかった。冷静に相手を分析して、キリユウさんに教わった通りの戦い方をする。

普通ならこんな短時間で戦いに慣れるなんて無理だろうけど、ここが仮想現実だということが皮肉にも助けになった。敵を斬っても血は出ない。敵のHPをゼロにしても死体にならず光になって消えるだけ。そんな現実では有り得ない光景が、あたしたちがあまり抵抗無く戦いを受け入れることが出来た要因だと思う。

だけど、レイアのはちょっと心配に思っている。

一見普通に戦っているように見えても、実は戦う恐怖を押し込めているだけなんだってことはあたしには解る。無理矢理頑張ってるんだということを、ちゃんとあたしは理解している。

でも、レイアもあたしと同じで、一度こうだと決めたら引かないし、譲らない。

あたしが、ちゃんど見守るしかないんだ。

……まあキリユウさんも解ってるようだし、チマだって違和感を感じてるみたいだけどね。

「……よおしっ」

あたしは、レイアとチマをしつかりと守ることを 守れるくらいに強くなることを改めて決意した。

「？……どうしたの？」

「あははは。ううん、なんでもないよっ」

「おーい。二人ともー」

つい零れた意気込みの声を笑って誤魔化していると、チマの声が聞こえた。

そして、あたしたちが来た方向からチマとキリュウさんが現れた。

「……二人とも、無事だな」

キリュウさんがあたしとレイアに訊いてくる。

あたしたちは今PTを組んでいるから、メンバーのHPや状態は少しなら離れていても解るんだけど、それでもちゃんと訊いてくれるキリュウさんは解ってるなーって思う。

あたしはレイアの腕を組んで、元気ですとアピールしながらキリュウさんに言った。

「はいっ！ 二人とも無事です！」

「あっ、ちよつとネリー！ もう……。はい、特に問題はありませんでした」

「……そうか」

戦いが終わって、初めて見るモンスターのことをキリュウさんたちに報告して、あたしたちは再び街道に戻った。

キリュウさんに言われ、一応装備の耐久値を確認。……よし、特に減っていないね。

こんな感じで街を出てからもう六回ぐらい代わり番こに戦っていた。

今日までの特訓の成果はちゃんと出ていると思う。

なんとというか、最初にこの世界に来たときに思っていたことが、現実になったみたいだ。

これから……あたしたちのスツゴイ大冒険が始まる、ってね。あたしたちは、冒険者になったんだ。

その後、しばらく街道を歩いてきたあたしたちの前に、分かれ道が現れた。

右の道の先には山が見え、左の道の先には深い森が見える。

「あれ？ 分かれ道ですよ？」

「……おかしいな。あのNPCは街道沿いに行けば村に着くと言っていたんだが」

「あ、キリュウさん！ ここに《立て札》が倒れてるツスよ！」

声を上げたチマの指差す方を見ると、草むらの中に隠れるようにして立て札が横たわっていた。

「ホントだ。えーと、右が《小鬼の山》で、左が……うん？ 擦れてて解らないよ？」

あたしが倒れてる立て札を屈んで読んでみると、キリュウさんが立て札を持ち上げようとした。

「っ……………動かないか」

「……………ということは、これは《座標固定オブジェクト》ってことですね」

たぶん、キリュウさんは後から来るだろう人のために立て札をち

やんと立てようとしたんだろうけど、それは出来なかつたみたいだ。レイアが言った《座標固定オブジェクト》というのは、動かす事が出来ない物をそう呼ぶのだそうだ。ちなみに、その殆どが《破壊不能オブジェクト》でもあるらしい。その名の通り、壊せない物だね。主に街や村の中にあるものがそうらしい。家とか、公共物とかが多いって聞いた。

この立て札も、その《座標固定オブジェクト》だということは、こうして倒れていることがデフォルトなのかな？

でもこれ、気付かない人は絶対気付かないような位置だよな。

「……茅場晶彦も、趣味が悪いな」

「ですよー。でも、この立て札通りなら、右の道に先に見えるあの山が《子鬼の山》ってことになりそうですね」

「じゃあ、左に見える森へ続く道が、あのNPCの言ってた村に続く道ってことかな？」

レイアが道の先にある森を指差す。その森は結構深いらしく、ここからでは本当に村があるのかも解ない。

あ、今なんか鳥みたいのが飛んだ。

「うーん。この《子鬼の山》って明らかに危ない臭いぶんぶんツスよね？ あーでも、そうと見せかけて逆に森の方が危ない」とか？」

チマが立て札を睨みながら唸っている。

立て札しるしみたいな細かい嫌がらせをしてくるような人だったら、チマの言う通り、逆に森の方が危ないんじゃないかなと、あたしも思う。

「……キリュウさん、どう思いますか？」

レイアが、森と山を交互に見ていたキリュウさんに訊いた。

「……確かに、チマの言うことも解るが、そもそも両方向じく危険だと考えた方がいいだろう」

「あー、確かに」

「実はどっち選んでも変わらない、つてのはありそうですね。でも、そうするとどうしますか？」

「……ここは左へ行こう。どちらに村がありそうかを考えれば、やはり森のほうの可能性は高そうだ」

「そうツスよねー。わざわざ《子鬼の山》なんて所に村を造る人なんて……居ないツスよねー！」

チマの台詞に一抹の不安を抱きながら、あたしたちは左の道を進んだ。

そうして五分程歩いて、あたしたちは森の入口に着いた。

「うわぁ……」

森の中に入ったとき、あたし、レイア、チマは口を揃えて全く同じ眩きをしてしまった。

なんていうか、森の中は悪い意味で神秘的だった。

チチチ、と小鳥のさえざる鳴き声が聞こえるのは良いんだけど、森の奥に進むにつれて段々と薄暗くなるのは、御伽噺のそのようだった。

「如何にもなにか出る、って感じツスねえ……」

普段よりも少しテンションが低いチマがボソツと言う。  
何が、とは訊かなくても想像できるけど、確かにチマの感想には  
同意だった。

「……心配するな。出て来てもモンスターだけだ」

キリュウさんが、何でもないように言いながら先頭を歩き出した。

「クス……確かにそうですね」

「あー、それを言っちゃあお終いッスよー」

「あはは」

全く動じないキリュウさんを見ると、何故かこっちも怖くなくな  
ってくる。

あたしたち三人は顔を見せ合って笑いながら、キリュウさんの後  
を付いていった。

森の中に続いている道を歩くあたしたち。

イメージ的には、見渡しの良い街道なんかよりもモンスターとエ  
ンカウトする確率が高そうなんだけど、森に入ってから十分程経  
った現在も、未だモンスターは現れなかった。

「モンスター……来ないですね」

「……ああ」

キリュウさんは、絶えず《索敵》スキルで周囲を警戒してくれて  
いるらしい。

キリュウさんは現実の世界でも気配を察することが出来るんだと言っていた。普通なら嘘だーと思っただろうけど、キリュウさんが言うと思議と本当なんだって思えてしまう。

でも、こちらの世界では使えなくなっただと言ったので、準備期間の間は、冒険の安全の為に言っただけで、キリュウさんは《索敵》スキルスキルの熟練度とその扱い方を積極的に上げていた。

そんなキリュウさんの索敵にも、今のところ何も引っかけりもしないらしい。

嵐の前の静けさ的な予感を、あたしたち全員が感じていた。

そんな感じでもう十分程歩くと、ちょっと困ったことになった。

「……道が……無くなってるツスね……」

そう。深い深いこの森で、あたしたちが唯一頼りにしていた土肌の道が、今あたしたちが居る場所で途切れてしまっていた。

周りは深遠に続いているかのような鬱蒼とした暗い森しかない。

「どうしよう。……引き返しましょうか？」

レイアがあたしたちに提案する。

あたしもそうした方がいいかな、と思ったんだけど、キリュウさんがある一点を見つめていることに気付いた。

「？ キリュウさん、どうかしたんですか？」

「……ああ。索敵に反応があった」

「っ！？」

あたしたち三人は、一瞬驚き、でもすぐに背中合わせになって周囲を見渡した。

「……此処に来て襲撃ツスカ」

「確かに、此処は襲い掛かってくるにもいい場所かもね」

軽口を叩くあたしとチマ。でも、あたしたちの双眸は、油断無く周囲を警戒していた。

「……いや、すまない」

「へ？」

いきなりキリュウさんが謝ってきた。

そのせいか思わず気の抜けた声を出してしまった。

「……索敵に反応はあったが、これは敵ではないようだ。……恐らく、NPCだと思う」

「え、NPCですか……」

「モンスターの気配は無いんですね？」

「……ああ。それは間違いないと思う」

キリュウさんの言葉に、あたしたちは張っていた緊張を解いた。ただ、こんな森の中にNPCが居るなんて……。街の中だけにしか居ないと思ってた。

「……気にはなるが、どうする？」

キリュウさんがあたしたちに訊いてくる。でも、あたしの答えは決まっていた。

「もちろんっ、そのNPCの所に行きましょう！」

なんとなく予感がしてた。危ない〜とかの予感じゃなくて《冒険》の予感が。

意外と特に反対も無くて、もし敵に囲まれたときのための戦闘布陣フォーメーションの打ち合わせをしながら、キリュウさんの案内であたしたちはそのNPCのいる場所へ向かった。

「……………!!」

ほんの十数メートル歩いた所で、先頭を歩くキリュウさんが立ち止まって、あたしたちも止まるようにと片手を上げるジェスチャーをした。そして、樹齡幾年という巨木の陰からキリュウさんの指差す方向を見るあたしたち。

「……………あ」

あたしたちの視線の先には、十歳にも満たないような女の子が一人、一本の木の上の方を見上げていた。

ライトブラウンの短い髪の毛を頭の両端で結んだような髪型で、黄緑色のワンピースを着ている。

その女の子は時折、木の周りを回ったり、ぴよんぴよん飛び跳ねたりしている。

あたしは一応、声を潜めてキリュウさんに訊いた。

「キリュウさん。あの子がNPCなんですか？」

「……………よく見てみる。HPバーの下に【NPC】とある」

キリュウさんの言うとおり、あの女の子をじっと見ると頭上に力  
ーソルが現れ、そこにあるHPバーの下に確かに【NPC】と書い  
てあった。

あたしたちは、周囲にモンスターがいないことを確かめた後、そ  
の女の子に近づいた。

「うーん」

女の子は、近づくあたしたちには気付かずに木を見て唸っている。  
そんな女の子に、あたしは声をかけた。

「ねえ、どうかしたの？」

女の子は、やっと気付いたかのように一瞬びっくりした顔をして  
から、話しかけてきた。

「……えと、風邪を引いてる弟に林檎を食べさせてあげようと思っ  
ただけけど、わたしじゃあその実まで届かないの……」

その言葉を言った瞬間、女の子の頭の上にハテナマークが出てき  
た。

あゝ、やっぱりクエだったのかあ。

あたしは視線だけで後ろのキリュウさんたちに、クエストを受け  
るかどうかが問いかけた。

そして全員の頷きを肯定と見なして、あたしは女の子に言う。

「じゃあ、あたしが取ってあげるよっ」

そう言って木を見上げるあたし。視界の左端には【クエスト：林

橋と少女】というクエストタグの更新が記されていた。

あたしが了解の意を告げると、少女の頭のハテナが、クエスト受領中を表すビックリマークに変わった。

「おー、けっこう高い所にあるなあ」

少女が見上げていた木は、やはり《林檎の木》だった。

だけど、《林檎の実》はかなり高い場所にあるみたいだ。地上4、5メートルくらいかな。確かにこの女の子じゃ届かないなあと思いつながら、あたしは木に登ろうと最初の太い枝に手をかけようとした。

「……待て。俺が行く」

と、登ろうとしたらキリュウさんが止めてきた。

「えへへ。大丈夫ですよ、あれくらいだったらっ」

きつと心配してくれたんだらうなあ、と思うとちょっと嬉しくなつた。

あたしは気分良く、再度木登りを開始した。……したんだけど。

「……ネリー！ あなた今スカートでしょっ」

「ちよつとは慎みを持つツスよ。ネリー」

「にやつ!?!?」

丁度足を上げようとしたところで二人の指摘が入って、思わずスカートを抑えてしまった。

まだ1メートルも登ってなかったけど、その拍子に滑り落ちてし

まう。

チラつと後ろを見ると、キリュウさんは……顔を背けてた。

うう……恥ずかしいよお……。

あたしはスカートを抑えたまま、そそくさと後退した。

「……す、すみませえん。お願いしますう」

「……………」

そう言ったあたしの言葉に、キリュウさんは無言で林檎の木に近寄った。

そして勢いを付けて跳躍。ほとんど手を使わずに足だけで枝を踏みしめて登っていく。

「ほえ」

「凄い……」

その様子を見て、チマとレイアが感嘆の声を上げる。

うん。やっぱりキリュウさんはスゴイ。……そしてあたし、カッコ悪い。

あたしはキリュウさんを見ながら、心の中でよよよ、と泣いていた。

キリュウさんは、特に危なげも無く林檎を手に入れて軽々と降りて来た。

「あ、ありがとうっ」

無言で林檎を差し出すキリュウさんに、女の子が極上の笑顔でお礼を言う。

視界にクエスト達成のメッセージと加算経験値が現れる。簡単なクエストだったから、かなり経験値は少なめだ。

「あ、そーッス。……ねえねえ、そこなお嬢ちゃん。わたしらこの近くに村があるって聞いて来たんスけど、場所どこか知ってるッスか？」

チマが、なんだかよく分からないキャラで女の子に質問した。

「えーと、わたしの村だと思うよ？　ここからすぐの村だから」

あたしが十歳の頃ってこんなにちゃんと答えられたっけ、と思うほどしっかりと答える女の子。

「……よかつたら、案内して貰えないかな？」

屈んだレイアが、女の子に視線を合わせながら訊いた。  
女の子は少し考えるような顔をしてそれに答えた。

「うんっ、いいよ。……でも、この辺りはモンスターがたくさん出るから危ないよ？」

その言葉に、あたしたちは首を傾げた。

ここまで結構な距離を歩いてきたけど、この森にはモンスターの気配さえ無かったのだ。

あたしたちが不思議に思っていると、女の子の頭の上に、再びハテナマークが現れた。

視界にも再びクエストタグのタスクが更新される。

#### 【クエスト：少女の護衛】

「えーと、『案内をしてくれる少女を無事に村まで送り届ける。モ

ンスターの攻撃を受けて、少女のHPがゼロになるとクエスト失敗。  
『だって』

「こ、これは……護衛クエ!? うーん。だとしたら、このクエを受けた瞬間モンスターに襲われるかもしれないツスね」

「……なるほどな。今まで敵が現れなかったのはこの為か」

「え? どういうことですか?」

「このクエストを受けるまで、この森にどんなモンスターが出てくるか解らないから、対策が出来ないようになっている……とかですか?」

「……ああ。もしそうなのだとしたら、このクエストを受けても受けなくても今後は敵が現れるだろうな」

クエストを受けても受けなくても、もう出てこない意味はないのだから、絶対にモンスターは出てくる。

だったらっ。

「キリュウさん、受けませんか? どうせ村に行くなら案内してもらった方がいいと思いますし」

あたしは両手をグツと握り締めて提案した。キリュウさんは少しだけ考える素振りそぶりをした後、あたしに頷く。

それを見て、あたしは女の子に向かって言った。

「それじゃあ、村までの案内をお願いしてもいいかな?」

女の子はうんっ、と笑顔で頷いてトコトコと歩き出した。

視界の端に、クエスト受注の表示が現れる。

いよーし。いっちょやってやりますかっ!

そうして、あたしたち四人は、村まで案内してくれる女の子の護衛をすることになったのだった。

## 1 林檎と少女（後書き）

感想、指摘、質問、お待ちしております。

## 2・怒涛（前書き）

主人公視点です。

## 2・怒涛

村への案内をしてくれるNPCの少女の護衛を受けた俺たちは、ゆつくりと一定のペースで歩く少女の周りを囲うように歩いていた。

俺は少女の右斜め前に位置し、三人は一定の間隔を空けて少女の後ろを半包围するような位置に。護衛対象をあまり視界から離すのはいけないと思うゆえの配置となる。いつ襲われるか解らないので、既に四人とも各々武器を抜いて戦闘態勢になっていた。

現在の俺の《索敵》スキルの熟練度はまだ二十六だ。視界の中限定で、約25メートル以内にいるモンスターをカーソル表示する。ただ方向が解るだけで正確な距離までは解らないし、視界範囲だけなので、周囲を警戒するには常に周りを見渡しながら《索敵》を発動させなければいけない。極めて不便なスキルだが、それでも奇襲を防ぐには必要な物だ。

「むー、どんなモンスターが出てくるツスカねえ」

NPC少女のやや右斜め後ろを歩くチマが、周囲を忙しく見ながら、だがやや緊張感の欠けた声で呟いた。

「……今までは、動物とか虫っぽいモンスターが多かったよね」

チマの反対側、NPCの少女のやや左斜め後ろを歩くレイアが首を傾げながらチマに続く。

「どんな敵が来てもっ、よく見て倒すだけだよ！」

少女の真後ろを歩くルネリーがやる気が溢れてるといった感じで言った。

ルネリーは熱血ツスねえ、というチマとレイアの苦笑を聞きながら、俺は再び周囲を

「！……右方一匹、来るぞっ」

「っ……は、はい！」

前方、右方と《索敵》していた俺の視界に赤いカーソルが一つ現れる。暗闇で姿は見えないが、名前が表示されていないということはまだ見たことのないモンスターだろう。

俺はすぐさま声を上げて状況を伝える。そして三人が反応したことを確認し、急ぎ他の方向を《索敵》にかけた。

後方、よし。左方……む！

「左からも一匹！ お前たちは右を……！」

「うい、了解ツス！」

「わかりましたっ」

言いながら俺たちはNPCの少女の左右に移動する。

「同時に二匹なんて初めてですね……」

右方の暗闇を窺いながらレイアが強張った声を出す。

「……今後は恐らく集団で襲って来ることは増えてくるだろう。寧ろ此処で慣れておく、ぐらいに考えておけ」

「は、はいっ」

……レイアにはそう言ったが、二匹同時に襲ってくるなんて確かに俺たちにとって初めての経験だ。

今までは一匹相手に誰かが戦って、他は危なくなったらすぐに助

けに入れるように見守る、というのが常だった。だが、今までの経験からすれば二匹程度なら恐らく問題は無いだろう。三人には考えて戦う方法を教えてきた。初めて見る敵だとしても、同数以下なら誰もが梃子摺る事無く戦えると思う。

「来るぞ！」

少女の左方、俺の目の前に現れたのは、俺よりも体の大きい紫色の巨大なトカゲだった。

俺の後ろ、少女の右方からは「ねねね、ネズミツス！」「は、はやっ!？」という声が聞こえる。

俺はトカゲの頭に突きを放ちながら声を上げた。

「動きが速い敵を相手にするときは、その動きを制限させるような位置をとれ！」

あの三人は意外と物分かりが良い。これだけ言えば、後は自分たちで考える事が出来るだろう。

「……ハッ！」

しかし、心配は心配だ。出来るだけ早くこちらを終わらせるとしよう。

目の前のトカゲは動きもそんなに早くは無い。その姿勢ゆえにトカゲは頭から向かって来ることしか出来ないみたいだ。注意しなければならなさそうな場所は鋭い歯の並んだ口ぐらいか。だが射程の長い槍使いの俺は、余裕を持って目や首などの弱点と思わしき場所に攻撃が出来る。

攻撃力が無い分は数を当てることでカバーし、七度目の攻撃が当たってようやくトカゲは光に消えた。

「レイア、そっち！」  
「うんっ」

後ろを見るとちょうど三人がモンスターを倒すところだった。ルネリーとチマに追い込まれた敵は、レイアの一撃により倒れた。

「ふいー。何とかなつたツスね」

「ちょこまかと動きが速いのは初めてだったから、ちょっとビックリしたよー」

「……うん。ちょっと焦つたよね」

三人は疲れてはいないようだったが初めての敵に困惑した、と言つたところか。

だが今の敵がこの森で出てくるモンスターの全てだとは思えない。俺は三人に注意を促し、再び周囲を警戒しながら歩き出した。

それから二時間経つた現在、あれから俺たちはモンスターの引切り無しの襲撃に遭っていた。

「 後方二匹、来るぞ！ 前方二匹は俺がやる……！」

何度もすぐに襲われる状況が続いたため、結構時間は経っているが、歩みは全然進んでいないような気がする。

今まで俺たちの前に現れたモンスターは三種類。

額に10センチ程の角を生やした、体長70センチ強の焦げ茶色の巨大ネズミ型モンスター、《ホーン・ラットル》レベル3。

体長2メートル強の紫色のトカゲ型モンスター、《フォレスト・

リザード》レベル3。

体長1.5メートル程、幅2メートル程の球根に大きな口と花が付いたモンスター、《プレデット・バルブ》レベル4。

これらのモンスターは、一匹一匹はそれほど強いという訳ではない。

《ホーン・ラトル》は動きが早く攻撃が当たり難いが、攻撃力の高い角攻撃にさえ気を付けていればソードスキルを使えば一撃で倒せるほどにHPも防御力も低い。

《フォレスト・リザード》は背後からの攻撃に弱いようだ。小回りが利かないようなので、一人が正面に立ち、もう一人が背後から攻撃すれば楽に倒せる。しかし、あまり近づき過ぎると毒のある牙で足を噛まれる。一度ルネリーが噛まれて、俺たちの中では初めてとなる毒状態というものになった。そのときはすぐに後退させて解毒ポーションを飲ませたので大事にはならなかったが、ルネリー曰く。

「すつつつごく気持ち悪かったです！　なんかこう、お腹の中をぐるぐると回ってるような、頭をガンガン叩かれてるような……もう毒はいや　って感じでしたあ……」

ということを、身振り手振りと涙目付きで力説していたので、それを聞いた俺たちは一層注意をするようになった。

《プレデット・バルブ》は動きが遅い。球根から生えている幾本もの細い根全てを使って自身を支えながら動いているので、人が歩く程の速度しか出せない。しかし、球根の頭頂部に付いている赤い花からはキラキラと輝く花粉を噴出し、球根の根元付近にある大きな口からはシュウシュウと嫌な音を立てる液体を吐きだす。花粉は輝いていて視認でき、漂う速度も遅いために避ける事は可能。口から吐き出す液体も、通常開きっぱなしの口を閉じて、唾を溜めるようにもごもごした事前モーションがあるため楽に避けられる。頭頂部

の花は斬り落とすことが可能らしく、斬り落とした後は液体噴射にさえ気を付ければ特に問題無く倒せた。

だが問題なのはその数だった。一匹では弱いとはいえ、それが三匹、四匹と現れれば対応も変化させざるを得ない。

現在はルネリーたち三人でモンスター二匹を相手にさせ、残りは俺が相手をするという戦法をとっている。戦運びに関して、まだまだルネリーたちでは二匹までがせいぜいだろう。対する俺はというと、この程度なら何匹でも変わらないが、如何せんやはり攻撃力不足が否めない。

NPCの少女を守りつつ、三人の様子を見ながら自分の担当であるモンスターを相手にすると、せいぜい三匹が限界だ。担当が四匹以上になると、敵の攻撃を防ぐことに手一杯となり、時間を稼ぐことくらいしか出来なくなる。

しかし、今はルネリーたちがいる。ソードスキルを使った連携を覚えたこの三人は今や攻撃力では俺の一步前を行っていると言わざるを得ない。二匹以下なら三分もかからず倒すことが出来るので、俺は三人が援護に来るまでの時間を敵の攻撃を弾いて耐えていければいい。

ルネリー、レイア、チマ。この三人は俺の想像よりもずっと早く成長してくれた。既に俺が、三人に援護を頼めるくらいに。師匠としては、そんな自分が情けなくも思うし、手のかからない弟子たちに少し寂しくも思う。

だが、SAOというゲームでの戦う仲間だと思えば、寧ろその成長は喜ばしいし、頼もしいことだ。

戦術面では俺が補い、攻撃力では三人が補ってくれる。

これは俺だけが思っていることかもしれないが、俺は三人を

《戦友》だと思い始めていた。

「レイア！ チマ！」

ルネリーの声で二人が、現在戦っている《プレデット・バルブ》の背後へ、左右から回りこむ。

そして、レイアが剣技《ソードスキルホリゾンタル》で頭頂部の花を切り落とし、同時にチマが彼女の最も得意とする縦軌道の斬撃技《バーチカル》で敵の背中を斬り払った。

「……………」

三人が特に苦戦をしていないことを横目で見ながら、俺は目の前のトカゲに体重を乗せた下段突きを放つ。

俺が相手にしているのは、角ネズミと紫大トカゲだ。……はつきり言つて、弱い。

基本的に頭は良くないのか、軽く速めのフェイントをかければ、狙い通りの動きをしてくれる。

HPの少ないネズミを最初に倒せば後は簡単だ。リーチのある槍での攻撃には、リーチの無いトカゲでは歯が立たない。一定の距離を保ちつつ弱点である頭に幾度も切っ先を突き立てれば、ソードスキルを使わずとも倒すことが出来た。

「ふう………終わったか」

襲いかかって来た四匹のモンスターを倒し終え、再度《索敵》をかけながら周囲を見渡す。

敵の反応が無いことを確認してから、ようやく槍を構えたままの残心を解いた。

「ハアアア……………。もうこれで十七回目の襲撃ツスよ？ さすがに

そろそろしんどくなってきたツスよお」

チマの言う通り、俺たちは一息吐く暇も無いくらいのペースで、此処に来るまでに既に十七回もの襲撃を受けていた。更に一回一回が二匹以上の混在モンスターのPTでもあった。一匹一匹の対応が違つものを同時に対処するというのは、確かに精神をかなり擦り減らす。

「……そうだね。武器の耐久値も半分を切ってるし、そろそろ村に着きたいね」

「ねえねえ、あとどのくらいで着くの？」

精神的疲労ゆえの溜め息を吐いているレイアの横で、特に疲れた様子を見せないルネリーが中腰になってNPCの少女に訊いた。

「うーんとね、あと五分も歩けば着くと思うよ？」

「そっか、じゃあ後少しだねっ」

笑顔で答える少女に、同じく笑顔で頷くルネリー。

「……………」

しかし、改めて考えてみるとかなり不可思議だな……。

こんな年端もいかない少女が、化け物の群めく森の中に居たということもだが、案内をしてきている最中の挙動も可笑的い。

こちらとしては出来るだけ武器を振り回せる広い空間を移動して貰いたいのだが、この少女は近道だからと木々の茂る狭い場所ばかりを通る。モンスターが現れればその場に頭を抱えてしゃがんで震えているのに、居なくなればさっきまで怯えていたのが嘘のように笑顔で歩き出す。更に、こんな道しるべも無いような場所で迷いも

無く村に向かえることも可笑しければ、先ほどのルネリーの質問に答えたように、正確にあと何分と答えられるというのも可笑的い。それら全てをNPCだから、と片付けてしまうのが一番手っ取り早いのだろうが、個人的にはそれでは納得が出来ない。

まあだが、見る限りルネリーたちは気にしてはいないようだ。俺一人、答えの無いことを考えていても仕方ないか……。俺は思考を切り替え、再度周囲に《索敵》をかけた。

「……………！」

居る。

姿は木々で隠れて見えないが、赤いカーソルだけは視界に映っている。正確な距離は解らないが、そう遠くは無いだろう。

俺は横を歩く少女の前に移動しながら、後方にいる三人に声をかける。

「……………敵だ。前方に一匹。お前たちは少女を守れ」

「！……………は、はいっ」

三人に指示を出し、俺は周りに他のモンスターが居ないことを確かめてから、前方の敵のもとへと走った。

このNPCの少女は、俺が敵を見つけたと言っても歩みを止めはしない。自分で視認してからでないかと絶対に止まらないのだ。そのため、不意打ちを防ぐ為にはある程度こちらから先攻を取らなければ不要な危険を招きかねない。俺は隠れている敵に向かって囮となるべく先行した。

「……………っ」

少女から25メートル程先行した場所。藪を抜けると、そこには

。

「ギギ、ギーッ!」

初めて見る《人型の異形》が居た。

名前は 《ロウアー・ゴブリン》。

身長1.5メートル程で深緑色の荒れた肌。大きい口にギザギザの歯、ボロボロの腰布以外は何も身に着けていなく、棘の付いた短い棍棒を右手に持って振り回している。

「……………」

人型のモンスターと戦うのはこれが初めてとなる。今までは動物か植物を模したモンスターだけだった。《はじまりの街》の図書館で読んだ資料によれば、人型のモンスターは剣技ソードスキルさえも扱うらしい。普段、自分たちが頼りにしている攻撃力が、そのまま自分に返ってくるのだ。これほど恐ろしいものはないだろう。

だが……何故だ？ 何故、俺はこんなにも落ち着いているんだ？

目の前で奇声を放っているモンスターに、俺は脅威を全くと言っていいほど感じて無い。

「ギーッ!」

ゴブリンが大口を開けて棍棒を振りかぶりながら飛びかかって来た。

「……………」

右手を斜め上に棍棒を振り上げているゴブリン。この形から予測

出来る攻撃パターンは《斜め軌道の叩きつけ》。攻撃のリーチは、腕と棍棒の長さを合わせても1・2メートル程か。

俺は左半身を下げることでゴブリンの攻撃を避ける。棍棒を下に振り切ったと同時に、後退跳躍しながらゴブリンの喉仏に刺突を放つ。

何だ……？

頭の中が冴え渡っていくような感覚。

敵の動きがよく見えて筋肉の緊張と間接の動きから、相手の次の行動が解るこの感覚。

この感覚は……どこかで……。

「……ギツ、……ガツ、……グエツ!？」

ゴブリンの行動に先回りしておくように槍の切っ先を放つ。前に踏み出そうとする足へ、棍棒を振りかぶろうとする腕へ、攻撃を避けて後ろへ回りこんだ俺を視認するために振り返ったその大きな頭へ。

相手の行動を読み、相手から当たってくれるように攻撃を仕掛ける。

これは、この感覚は……そうだ。師匠との稽古だ。

相手の動きから次の攻撃の気配を読み取り、それを逆手にとって自身の攻撃を当てる。

動きがよく見えると思ったのは相手が人型だからだ。強敵だと思っていた人型こそ、俺が長年相手をし続けていた師匠を思い出し、逆に行動を読むことが容易となる。

二本の足が大地を掴む様子で重心の位置を感じ取り、腕の振りと武器の位置から攻撃の軌道を読み取り、視線から相手の狙いを予測する。

敵の動きが解る。狙いが解る。

そうか。これが……俺がこの十五年間で、師匠との稽古で得

た物なのか。

それはどこか虚しくもあり、この状況においては嬉しくもあり、何とも複雑な気持ちだった。

「ギ……ギイ　　ッ！」

「!？」

既にHPバーは二割を切っているゴブリンの動きが一瞬止まったかと思つた矢先、突如その動きが加速して橙色の光に包まれた棍棒が俺に迫ってきた。

迂闊っ、ソードスキルか！

このSAOの世界特有の技である《ソードスキル》。師匠との稽古では　現実世界では有り得なかつた技を失念していた。如何にその動きが遅く見えても、ソードスキルは動きを加速させて実力以上を攻撃を放つことが出来る。

この攻撃は避けることは出来無い……っ。

「……………ぐっ、っ」

そう思つた俺は、あえて左腕で相手の技を受けた。この木柄の槍では攻撃を受けると耐久値の減少が大きい。HPはポジションで回復出来るが、武器は街か村の武器屋、鍛冶屋でしか直すことは出来ない。この場面では俺は先のことを考え、自分のHPよりも武器の耐久値をとつた。

「……………っ」

相手の攻撃を受けた左腕に痺れた感覚が残る。この戦闘中は使うことが出来なさそうだ。

これは俺の不注意だ。相手がソードスキルを扱うことも、ソード

スキルが能力以上の攻撃を放てることも知っていた。  
しかし、自分の十五年を懸けた稽古の成果を感じることが出来た  
のが嬉しくて浮かれていた。

「……未熟」

だが、もう覚えた。次からは同じ失敗はしない。  
ソードスキルの技後硬直から解き放たれたゴブリンがこちらを向  
いた。

俺は未だ痺れる左手の変わりに、左の肩に槍を中腹を置き、相手  
にやや背中を向ける形で半身で構える。

「ギーッ！」

「……」

ゴブリンは再びソードスキルを放ってきた。恐らく俺に一撃入れ  
て気を良くしたのだろう。

しかし、今度は問題無く避けれる。ただで攻撃を受けるほど俺も  
甘いつもりは無い。

今までの経験から、ソードスキルには三つの弱点があると考察で  
きる。

一つは初動の形に構えたとき。システムアシストが立ち上がるた  
めの硬直が一瞬だけ生じる。これでソードスキルが出ることを予測  
できる。

二つ目は初動の構え。その構えの形は技によって一つ一つ違うら  
しく、一度見ればその構えから技を割り出すことができる。

三つ目は技後硬直。技さえ避けてしまえば、その後は数コマ無  
防備になっている所を攻撃できる。

ゴブリンの初動でソードスキルによる攻撃とその技を察知し、攻  
撃範囲外に移動することで避ける。

後は技後硬直で固まっているゴブリンの頭目掛けて攻撃するだけだ。  
左肩を発射台のように滑らせて勢いがついた所を体を回転させて  
更に押し込むように刺突を放つ。

「グ、ギーッ」

正確に眉間を貫かれたゴブリンは、パリーンという破砕音と共に  
粉々に砕け散った。

「……………ふう。……………んく、んく」

俺は槍を地面に突き刺し、腰のポーチから回復ポーションを取り  
出して飲んだ。渋味と酸味の混じったような味が口に中に広がるの  
を感じながら、俺は自分のHPを見る。

六分の一、といったくらいか。

武器で受けなかったにしては思ったよりダメージが少ない。当た  
る瞬間に僅かに後方に下がったことが功を奏したか……。

少しずつだが回復していくHPを確認した俺は、周囲に《索敵》  
をかけた。

「キリュウさん、大丈夫ですかー!？」

間も無く俺が来た方向から三人と少女が現れた。

三人は俺を心配そうに見ていた。恐らく俺のHPが減ったことを  
見て不安になったのだろう。

「……………ああ。少し油断したが、大丈夫だ」

俺の言葉を聞いて安堵の溜息を吐く三人。その様子を見て、俺はこの三人の師匠として、これ以上心配をかけるわけにはいかないと思った。

もう、決して油断はしない。

そう俺は固く心に決めた。

その後暫くすると、俺たちは大きく開けた場所に出た。

そこは森に隠れるように存在する村だった。周りを簡素な木の堀で囲んでいる二百人も住めなさそうな小さな村だ。

村の入口であろう小さな門に着くと、NPCの少女が俺たちの前で振り返って両手を広げた。

「此処がわたしの村、《エウリア村》だよっ」

疲労困憊な俺たちとは正反対に明るい声で少女が言う。

ようやく着いた。言葉は出さずとも皆同じ思いだったに違いない。《ロウアー・ゴブリン》を倒した後は、二匹以上のモンスターが同時に現れるといったことは無く、それは非常に助かった。武器の耐久値も既に三分の一を切っていた事もあるが、何より休み無しの連続戦闘にこの三人がかなり精神的に参っているのを感じていたからである。

「……だが、まずは武器を修理しなければな」

誰に言うでもなく小さく呟く。

【少女の護衛】というクエストは、彼女の家に辿り着かないと終わらないらしい。

三人を早く休ませてやりたいという気持ちも勿論あるが、それよ

りも武器の耐久値が全快ではないという状況に不安を感じる。

何故なら、この村の敷地内に入ったときに視界に出た【エウリア村】という表示の上に、《はじまりの街》では見慣れたあの文字列が出なかったからだ。

そう、この村は

アンチクリミナル  
《犯罪禁止コード圏内》ではないのだ。

「ここが、わたしのお家よ」

少女の案内の最終地点は二階建ての小さな家だった。小さな家、と言っても周りにある家と比べてという意味で、現実世界で見れば結構な敷地があるのではないだろうか。

少女に続いて家の中に入った俺たちは、少女の母親にお礼を言われてクエストを達成した。

クエストの報酬はこの家での一宿一飯と、かなりの量の経験値だった。正直苦労した割には大した報酬ではないが、こんな小さな村の更に小さな家の一家庭にそれを求めるのもどうなのだろう、とは思う。

しかし今回の報酬の経験値で、あの三人はレベル5に上がることができた。また一つ、三人が死の危険から遠ざかったことに安堵しつつ、逆に更に自分たちは取り返しのつかない場所へと向かってしまっているのではないか、という思いも俺は感じていた。

レベルが上がったことを喜んでいた俺たちに、少女の母親が午後六時ちょうどに夕食を用意するので、それまで村を見て回ってきてはと提案してきた。

現在は午後一時半。夕食までの暇潰しとして、俺たちはまず武器の修理を行うことにした。

少女の母親に教わった場所に行くと、商店街とも言えないような

まばらに店が並んだ場所に、鍛冶屋の印である金槌のマークの付いた看板を見つけた。

「……いらっしやい。珍しいな。こんな辺鄙な村によ」

店に入った俺たちを迎えたのは、物語に出てくるドワーフもかくやと言った大層な髭を蓄えた背の低い初老のNPCだった。

はじまりの街では鍛冶屋と武器屋は別々だったのだが、この村では全てを鍛冶屋が担っているらしい。内装は殆ど武器屋と変わらないが、武器に混じって包丁やら鍬やらが棚に並べられている。そして、カウンターの向こうには鍛冶工房も見えた。

「……店主。武器の修理を頼みたい」

「あいよ。んじゃ、武器を出してくんな」

俺たちはカウンターのの上に自分たちの武器を置いた。武器が《非オブジェクト状態》の場合はウィンドウ上でのやり取りの方が楽だが、《オブジェクト状態》ならばそのまま渡すことも出来る。

「んーと、全部で二十分ほどかかるな。ここで待ってるか？ それとも後で取りに来るか？」

余り武器の無い状態で動き回りたくは無いな……。

NPCの問いに待っていると答えた俺たちは、暫く店内を見ていることにした。

「おお！？ この包丁、武器にもなるツスよ！ カテゴリ《ナイフノワンハンド》、固有名《キッチンナイフ》。ぶくく、そのまま過

ぎッスよー!!」

「……フライパンとかフォークとかも武器として装備できるみたいだね」

「ねーねー、やっぱりあったよー！ 見て見てっ、お鍋ヘルメットとお鍋の蓋の盾〜！」

「……………」

さっきまで青い顔をしていたというのに、今はもう三人は元気に店内を物色している。

それが悪いとは言わないが、何故だろうか。あの三人の子供のような光景を見ていると、逆にこちらは老けてきたのではないか、という思いに駆られる。

そんなことを考えながら俺は、武器の修理が終わるまでの二十分の間、壁に寄りかかって三人のはしゃぐ様子を見ていた。

その後、修理が終わり代金を払って店を出た俺たちは街の中を散策した。

軽食屋で遅めの昼食を取り、雑貨屋でドロップアイテムを売ってポーションを補充した後は、各自自由行動とした。

三人は村にある店を梯子するらしい。俺は村のNPCたちに話しかけて情報収集をしていた。

NPCの持つ情報というのは結構重要だ。噂の様な荒唐無稽の話が、本当にあつたりすることもある。しかし、それらが全てプレイヤーたちにとってプラスとなるかは、また解らないが。

「旅人さんや、色んな話が聞きたいのなら村長に訊くのが良いぞい」

俺が今、話しかけていた老婆のNPCがそんなことを言った。

「……その村長は何処にいる？」  
「ほら、あの家だよ。この村の中央にある赤い屋根の大きい家がそうさね。……ああ、そう言えば今日は出かけると言っていたね。確か戻ってくるのは明日の昼頃という話だから、明日時間があれば訪ねてみるとええ」

NPCが出かける？ いや、それとも昼間にしか会えないということなのだろうか……？

何か妙な感じはするが、NPCに話を聞きに行くだけなら心配はないだろう。

とりあえず、俺は明日村長の家を訪ねることにした。

そしてNPCの少女の家に泊まった翌日。

俺たちは朝から森で一狩した後、武器の修理と持ち物の整理をしてから、丁度お昼頃に村長の家に向かった。

「なんか面白いお話聞けるといいねー」

「……これまでの傾向からすると、お話を聞くとクエストが受けられるって感じかな」

「それならそれで、簡単なクエにして欲しいツスね」

俺の後ろを歩く三人はいつも通りの会話をしている。

昨日の経験から学んだのか、今日の狩りでは一段とキレの良い連携を三人は見せていた。

モンスターと言えども行動パターンと弱点が解れば怖くはない。

俺たちは着実に強くなっていると感じた。

だが、一つ気になることもあった。結局、《ロウアー・ゴブリン

《はあの一度きりしか出てこなかった。護衛クエスト限定のモンスターだったのか。それともただ個体数が少ないだけなのか。》

そんなことを考えていると、目の前に大きな家が見えた。このエウリア村の村長の家だ。

赤い屋根付きの立派な玄関の扉を、俺はノックした。

「はい」

家の中からは初老のご婦人と言った感じのNPCが現れる。

村長の話が聞きたいという旨を話すと、そのNPCは俺たちをリビングと思われる広い場所に案内した。

「へー、良い感じの調度品みたいなのも……………え？」

家の中を見回していたルネリーがリビングを見て固まった。

そこには

「何だあ？ やけに此処にプレイヤーが集まるなあ、オイ」

「……………偶然にしちゃ、出来過ぎてますね」

「お、可愛い子いるじゃんっ」

そこには、十人以上もの武器を携帯した者たち　プレイヤーが集まっていた。

何故此処に？ そんなことを考えている俺たちに、更に追い討ちをかけることが起こる。

「 村長！ 大変です！ 魔物の群れです！  
「！？」」

俺たちの後ろから、突然リビングに入って来て叫んだ男。

その男の言葉に、俺たちだけではなく、その場に居た全員が息を  
呑んだ。

## 2・怒涛（後書き）

9 / 2 2 地の文と会話文の間に改行を挟みました。

1 0 / 1 9 情報を頂いたので、モンスターのレベルを変更しました。

感想、質問、指摘、ありましたらよろしくお願いいたします。

### 3・後ろではなく(前書き)

もし、実際に目の前に、空想上の醜い怪物が現れたとしたら、ちやんと戦うことは出来るのだろうか。

怪物じゃなくても、例えばシベリアタイガーみたいな猛獣が目の前に現れたとしたら、普通の人はどういう反応をするだろうか。

出来ればそれを考えながら見て欲しいです。

チマ視点です。(ああっ、マジこの娘は難しいっ)

### 3・後ろではなく

どもども、お久しぶりッス！

わたし、チマこと筑波<sup>つくは</sup> 佳奈美<sup>かなみ</sup>でございますッス。

さて、何か変なことになってきましたッスね。

村長さんの話を聞こうとして、村長宅に来たのはいいんだけど、何故かそこに居たのは十人以上ものプレイヤーたち。

そして、それに驚くわたしらの後ろから現れた「魔物の群れです！」と叫んだ中年のおっちゃん。

何と言つか、ネリーの言ったとおり、冒険<sup>やっかい</sup>な臭いがぶんぶんしてきたッスねえ……。

「……魔物の群れ、じゃと？ どういうことじゃ、ドルマン」

リビングに轟くプレイヤーの人たちの後ろから、髪やら髭がフォッソフォッソのお爺ちゃんが現れた。多分このお爺ちゃんが村長なんだと思う。頭のカーソルの下に【NPC】ってあるし。

「は、はい。先ほど、狩りをしていたウルジが魔物の群れがこちらに向かっているのを確認したそうです。報告によるとあと二時間ほどでこの村に到着すると……」

「な、何ということじゃ……っ」

中年のおっちゃんとフォッソフォッソのお爺ちゃんが何か深刻そうに話している。すっごく真剣そうなんだけど、第三者的な位置から見てるとお芝居っぽく見えていまいちシリアスになり切れないよね。

そんなことを考えていたら、お爺ちゃ……村長さんが室内のプレイヤーを見渡して言った。

「……申し訳ありません、冒険者の方々。此処に集まって下さったのも何かの縁。どうか魔物の群れからこの村を守っては頂けませぬか？」

言い終わると同時にお爺ちゃんの頭の上にピコリンと金色のハテナマークが現れる。

【クエスト：エウリア村防衛】

えー、まつさか……。――

「……………レイド……………クエスト……………なのか？」  
「？」

今まで驚いて黙っていたプレイヤーの一人、灰色髪オールバックの盾剣士のお兄さんがボソツと呟いた。

「レイドクエストだあ？」

オールバックさんの横に居る赤髪ロンゲ槍使いの柄悪いお兄さんがリピートアフタヒー。

その言葉にオールバック盾剣士がお爺ちゃんから目を離さずに頷く。

「《大規模戦闘クエスト》。複数のPTで挑むこと前提の大規模クエストだ。大規模というわりには人数が少ないが……。恐らく今の状況から考えて、正午ちょうどに村長の家に約二十名のプレイヤー

が集まることでこのフラグが立つ……ということかな」

「ちよつと待てよつ。SAOにレイドはボス戦以外に無かつたんじやないのか？ 少なくともベータじゃ無かつたつて聞いたぞ？」

オールバックさんの影に隠れて見えない人が言った。

「いや……だが、もうSAOは変わった。今ならベータじゃ無かつたことがあつても不思議じゃないだろう？ それに、ただベータ期間中にフラグが見つかつてなかつただけ、とも考えられる……」

大規模戦闘クエスト……。ん〜、名前からして嫌な予感しかないツスねえ。

「ちつ……おい、おっさんつ。魔物の群れとやらの数はどれくらいなんだ？」

赤髪ロングさんが舌打ちしてからNPCのおっちゃんに訊いた。

「え、ええと、報告によれば二百匹ほどだと……」

「!?!」

おっちゃんが言ったその数に、一部を除いたプレイヤーたちが驚愕に絶句する。

正直、わたしも驚いた一人だ。

うえ〜無理ツスよ無理イ！ ようやく五匹同時襲撃に慣れてきたと思つたのに、二百匹同時なんて勝てるわけ無いツスよー！？ いくらなんでも増えすぎツス！

と、そんなわたしの肩に手を乗せる人物がいた。我らがキリユウさんである。

「……問題無い。此処には二十人のプレイヤーが居る。一人十匹倒せばいいだけだ」

「あ……た、確かに……」

思わずわたし以外のプレイヤーもキリユウさんの言葉に納得してしまったようだ。此処ら辺のモンスター十匹程度ならまあギリギリ何とかなるんじゃないかなあと思ってしまった。

「……そう簡単にいくか？」

そうキリユウさんに向けて言ったのは、金髪サラサラヘアのオタクっぽい太った男の人だった。

「俺はベータテスターじゃねえが、テスターのSAOスレは暗記するほど読みまくったぜ。はつきり言ってSAOのサドさは誰もが愚痴るレベルだ。通常フィールドでさえ一箇所に百匹を超える湧出<sup>POP</sup>が出ることもあるらしいな。まあ、その大抵が何らかの罠だったみたいだが……。それからすれば、襲ってくるのが二百匹しかないなんてレイドクエだつうわりには敵が少な過ぎる。……何かあると思ったほうが良いと思うぜ？」

眼つきわっつう……。……。

なんであんなに世の中舐めきってますー、みたいな荒んだ目をしてるんだらう。

というか、通常フィールドでも百匹以上とか……罠には気を付けよう、うん。

でも、あの金髪デ……ポツチャリさんが言うことも一理ありそう。あの人は多分わたしのイトコの同類だ。二次元に全てを懸けちゃってるような人だ。きつとSAOを始める前に色んな情報を集めてたんだらうと思う。わたしのイトコも、そういうのに無駄に時間を注

ぎ込んでたのを覚えている。

うわぁ、奴のことを思い出したら目の前の金髪デ……ポツチャリさんのこと、なーんかムカついてきたぁ……。

「……つうことは何だぁ？ 強えモンスターがうじゃうじゃつてことか？」

話を聞いていた赤髪ロンゲさんがデ……ポツチャリさんに訊いた。

「つ……そ、それは解らない。だけど、SAOの難度決めた奴がドSってのはベータやってた奴らの殆どが言ってたみたいだからな。その可能性は高いと思うぜ」

柄の悪い赤髪ロンゲさんにちよつとビビったのか、ポツチャリさんが最初ドモツた。ぷぷ。

「じよ、冗談じゃない！ ここまで来るのだってかなり苦労したんだ！ お、俺はやらないぞ！ ……そうだ。あと二時間もあるんならこの村から逃げることも出来るじゃないか！？」

また別の人だ。短いツンツン黒髪の神経質そうな男の人が叫んだ。そして、その人は仲間の人たちを促して部屋を出て行こうとしている。

「お待ち下され。今、村の外に出るのは危険ですぞ」

「……はぁ！？」

村長さんの言葉でツンツンさんがドアの前で振り返った。

「あと二時間で攻めて来るといふことは、ここら一帯の魔物が集結

しているはずです。つまり周囲の魔物の数も増えているでしょう。普段以上の数の魔物に襲われる可能性があります」

えーと？ ということは、今外に出るとめっちゃモンスターとエンカウントするってことツスカね？

「なっ……………クソッ！」

ツンツンさんがヒステリックに近くの壁を殴る。バンツという音と一緒に出た【Immortal Object】という破壊不能の表示が少し間抜けだ。

「……………状況的に考えて、村から逃げたほうが危険だと思ったほうがいいかもしれないな。街道では敵に包囲される恐れもある」

シーンとなった室内にキリュウさんが咳きが響く。……………何ていうか、状況が逼迫しすぎてわたしらワキ役は発言出来ないツスよっ！？

「んじゃあ全員に確認するが……………このクエストはかなり危険なクエストらしい。逃げるのも無理そうだしな。ここは協力するのが一番だと思うが、異論のある奴あいるか？」

赤髪ロンゲさんが此処に居るみんなを見渡して言った。

っていうか、何であんたが仕切ってるんスカー！？ なーんかムツと来るツスねえ……………っ。

ロンゲさんの言葉に一部渋々ながらも全員が頷いた。

それが合図だったのか、村長さんの頭の上のハテナがビツクリマークに変わった。更に視界の隅に時限爆弾なノリのデジタルなカウントダウンが現れた。

モンスター襲撃までの残り時間【1:59】

「よしつ。んじゃまずはお互いの自己紹介と戦力の確認からするか。時間無えから簡潔にな。……俺の名はリック、この五人のPTLパーティーリーダーをしている」

何故か仕切りだした赤髪ロンゲ　リックさんが自分の後ろの五人を指差しながら簡単に自己紹介をした。長槍一人、盾剣三人、短剣二人の六人PTで、この村へは《はじまりの街》からあの村長さんを護衛するクエストで来たらしい。

なるほど。だから昨日は村長さん居なかったんスね。でも、この村にはどうやって来たんだろ？

わたしたちと同じ道……なわけは無さそうだけど。別の道があったのかな。

次にリックさんの隣のオールバックさんが口を開いた。

「僕はクラウドだ。五人PTのリーダーをしている。全員盾剣士だ。この村へはNPCに聞いて来た」

むむむ。同じ盾剣士でも装備がちょっと違うみたいスね。色違いもあるようッスし……。

わたしらもちよっとは差別化というか、全く同じ装備ってのはやっぱりねえ……うーん。

オールバック　クラウドさんのPTにはあの金髪ポツチャリさんも入ってるようだ。

ていうかNPCに聞いて来た？　わたしらの来た道かな？　それとも、NPCによって教えてくれる道が違うのかな。

と、さて次は……おお、ついに我らがリーダー。キリュウさんです。

「……キリュウと言う。一応、この四人PTのまとめ役をしている。

P T構成は長槍一、盾剣士一、片手剣二。同じくNPCにこの村のことを聞いて来た」

なんかキリウさんが喋ると、こつ、背筋がピンとなる感じがするんスよねー。他の人とは何処か違う雰囲気を持つてるって言うか……。

わたしが腕を組んで、うんうんと頷きながらそんなことを考えていると、最後の一人であるさっきのヒステリックなツンツンさんが吐き捨てるように言った。

「……ジョーストだ。五人P Tのリーダーをしている」

え……それだけツスか？ てか、どーやってこの村に来たんスかー！？

わたしはあくまでもペコ やんみたいなすまし顔でジョーストって人に脳内抗議をしていた。

「……と、一応の自己紹介は終わったな。まだ時間はあるが、何か言っておきたい奴いるか？」

リックって人がまたもや仕切る。でもこの人、仕切るわりには他人任せな言い方だよね……。

自己紹介にもなつてない自己紹介だったけど、それでも全員の顔合わせ的なものは出来たみたいだった。

でもあれだね。正直、女子ってわたしらしか居ないっていうか……すつごく視線を感じます。いや自意識過剰とかじゃなくてっ。

みなさん、きつとわたしらよりも年上だ。高校生……にぎりぎり見えるか見えないかぐらいの人たちばかり。ほとんど大学生とかかな。

「……ドルマン、と言ったか。……質問がある」  
「は、はい。なんででしょう？」

キリュウさんだ。うーん。ほとんど年上しか居ない状況で発言できるって、考えてみると凄いやね。っていうか、キリュウさんあの乱入おっちゃんNPCの名前覚えてたんだ……。村長さんが確か言ってたような気はしけど、特に覚えてなかったよわたし……。

「……魔物の群れとやらは何処から来る？ 俺たちは村の何処を守ればいい？」

おお……。！ 確かにそれは大事だ。っていうか、そんな当たり前のことに気付かなかつたなんて……。

周りを見るとわたし以外も「おお……。」てな顔してる人が何人もいる。きつと魔物の数を聞いて、二百匹との戦いっていうのが強烈でそんな当たり前のことにも気付かなくなってしまったんだと思う。

「あ、は、はい。えーと……」

そうして始まった作戦会議。

まず、村長さんが大きな地図を持って来て、リビングにあるテーブルに広げた。

それはこの《エウリア村》を中心とした周辺地図だった。その地図によると、この村は円形をしていて、村の六割を森に面し、四割が川に面している。森と川に挟まれた位置にあるようだ。そして木の堀に覆われた外周には森側に一つ、川側に二つの門がある。

わたしが入ってきた森側の門。地図を見る限り、こちらは森ばかりで道らしい道はない。はっきり言ってわたしが来た方向って通常ルートじゃないっばいね……。

あとの二つは、森側の門を頂点とした二等辺三角形の底辺の二点のような位置にある。そして、3つの門からまっすぐ伸びる通りがぶつかるように繋がっている。

大雑把に言えば、な村の中にYな道がある。エウリア村はそんな形だ。

ちなみに、Yの下に伸びている道の先端にある門がわたしが入ってきた門で、Yの左上側の門が他のみなさんが来た門。右がはじまりの街から遠ざかる、つまり先へ進む門らしい。

ドルマンっていうおっちゃんNPCが聞いた報告によれば、魔物の群れを見たのは村の川側二つの門から伸びる街道に挟まれた山だという。

恐らく二つの門の内のどちらか、もしくは両方から攻めてくるのではないかとの村長さんたちの見解だ。

それを聞いたプレイヤーの一人が、門以外からの、つまり堀を乗り越えて襲撃して来る可能性をNPCの二人に質問したが、それは考えなくてもいいそうだ。何故なら村の外周に面する川はかなり堀が深く、村の中へ入るには門のある場所に作られた石橋を渡るしかないという。

此処にいるプレイヤーは4PTで二十人。守る場所は二つの門。なので、一つの門に対し2PTの十人で対応するということになった。

そうになると、四人PTのわたしらは必然的に六人のリックさんPTと組むことになった。

正直、男の人のロンゲは好きくないのだけど、まあ仕方ないか。

そして各PTLたちがお互いにフレンド登録をした。どちらの門にモンスターが襲ってくるか解らないので、離れた場所でも連絡が取り合えるようにしておくためだ。

ふとチラリとカウントダウンを見る。モンスター襲撃までの残り時間【1:32】だった。

みんな時間は気にしていたようで、早口の応酬みたいになっていたらから思ったよりは時間は経ってない。だけど、それでも段々と時間は近づいている。二百匹ものモンスターたちが、この村へ押し寄せて来るその瞬間が……。

防衛メンバーが決まって、さて次はどうするという場面に来てクラウドさんが言いだした。

「……そうだ。皆がこの周辺で戦ったモンスターを教えてくださいませんか？ 襲ってくるモンスターの対処法が分かっているかどうかで危険度も随分違ってくると思うんだ」

クラウドさんの言葉に全員が頷き、各PTの代表がモンスターを言い合った。

まあ結論から言えば、わたしたちが今まで倒してきたモンスターだけだった。対処法もおおよそ解っているし、味方と離れすぎて孤立とかしなければ十分に戦えると思う。

これならば、と全員が少しばかりの安堵をしたとき、キリュウさんが発言した。

「……待て。まだ言っていないモンスターがいる」  
「？」

ネリー、レイア、わたし含め、その場にいたキリュウさん以外のプレイヤーが顔に疑問を浮かべた。

はて？ まだ出てないモンスターなんていたツスカね？  
キリュウさんPTの一員であるわたしも知らないモンスター？  
横を見るとネリー、レイアも同様に首を傾げている。

「……この村に来る途中で、俺は《ロウアー・ゴブリン》というソードスキルを使う亜人型のモンスターと戦った」

キリュウさんが全員を見渡しながら言った。

「……あああ！ そいういや言ってたツスね！ キリュウさんしか戦ってないし、わたしらは姿も見えないから忘れてたツス。  
ネリーたちも思い出したようで、そいうえば、というような顔をしている。」

「!?!」

でも、私たち以外のプレイヤーの顔は、どう見てもかなり驚愕していた。

「なっ……嘘だ！ はじまりの街から此処ら周辺一帯には、まだソードスキルを扱うMOBは出てこない筈だ！」

リックさんの影に居たひよろひよろなモヤシっ子という印象の男の人が、ジョーストさんの如くいきなりヒステリックに叫んだ。

怒声というよりは悲鳴に近い声で叫んで、両目を見開いてぶるぶる震えながらキリュウさんを凝視するその人。ほとんど肉の無さそうな体に装備している防具が、かなり不釣り合いに見える。

「ああ、悪い。こいつはな、《ベータテスター》なんだよ」  
「なっ!?!」

リックさんがそのモヤシさんの肩に手を置きながら言った。何故か数人ほど驚いている人が居る。

《ベータテスター》。

わたしのイトコも一応そうだったと聞いた。もつとも、仮想酔い<sup>VR</sup>が酷かったらしく、本人は三日で諦めたらしいけど……。

ベータテスターだったイトコの協力もあり、わたしら三人はSAOを手に入れることができたんだ。

まあ、そのせいで今大変な目に遭ってるんだけどね……。

「でもコイツよ、テスターのくせに戦闘はからつきしでなあ。まあ、SAOの知識は人一倍だから？俺らのPTに入れてやってるわけだけだよ」

バンバンとモヤシさんの背を叩きながらドヤ顔で言うリックさん。つていうか、此処<sup>アンチクリミナル</sup>って確か《犯罪禁止コード圏内》じゃないらしいから、あれでもHP減るんじゃない？

わたしがそんなことを考えていると、その人に向かってキリュウさんが言った。

「……嘘ではない。確かに俺は、ソードスキルを使うロウアー・ゴブリンと戦った」

「で、でもっ」

モヤシさんが何かを言おうとしたのを、クラウドさんが片手を上げて遮った。

「ちょっと待ってくれ。もしかしたら、今の情報は凄く重要かもしれない」

クラウドさんが指摘したのは、さっきの金髪ポツチャリさん

ボルグという名前らしい　の言ったことだ。

先ほどボルグさんが言った、大げさなクエストのわりには敵が少な過ぎる。何かあると思ったほうが良い、という発言。

はじまりの街からこのエウリア村の周辺まで、普通ならばソードスキルを扱うMOBは居ないらしい。

少なくともベータ時代はそうだったと、モヤシさんが鼻息荒く言っていた。

もしも通常ではこの周辺には現れない亜人型MOBが大量に襲ってくるのだとしたら……。

それは、未だソードスキルを扱うMOBとの戦闘に慣れていないプレイヤーには、かなり不利な戦いになるんじゃないかと思う。

そうして話し合った結果、その可能性が高いという結論になり、全員がキリユウさんから《ロウアー・ゴブリン》の特徴と戦い方をレクチャーしてもらった。

みんながキリユウさんの言葉に頷きながら聞いている様子を見ると、別にわたしが何かしたわけでもないんだけど、なんか得意気な気分になるね。

……ちなみに、ベータテスターだというモヤシさん　ネルソンさんは、その後は黙ったままだった。

幼馴染だというリックさん（超ビックリ！）が言うには、先ほどはつい叫んでしまったようだが、普段はヒッキーも逃げ出すほどのすつつつごい人見知りなんだという。ポツチャリさんは「……けつ。テスターだつてえのに、宝の持ち腐れだな」とネルソンさんをずっと睨んでいた。何かベータテスターに特別な感情があるのかもしれない。知らないけど。

残り、一時間を切った。

「……そろそろ、移動した方が良いな」

クラウドさんがポツリと言う。

いつの間にか仕切り役がリックさんからクラウドさんに代わって  
るけど、それに突っ込む人は居ない。……まあ、正確にはわたしが  
心の中で突っ込んでるんだけどねっ。

そうして村長宅のリビングに居たプレイヤーが、そろそろ外に  
移動する。

あれ？ そういえば、キリユウさんて説明会以降発言してな  
いッスね。

キリユウさんを見ると、なにやら地図を見ながら難しい顔をして  
考え事をしてるみたいだった。

「……えーと、キリユウさん？ あたしたちも行きませんか？」

ネリーがそんなキリユウさんに声をかける。

「……ん？ ……ああ、そうだな」

「……どうかしたんですか？」

少し上の空なキリユウさんに、レイアが心配そうに訊いた。

今、リビングに残っているのはわたしらだけだ。

「……いや、先ほどの話の中で何か違和感を感じたのだが……それ  
が何か解らないんだ」

「違和感……ですか？」

わたしたち三人が同時に首を傾げた。

ふーむ、違和感ツスかあ……。正直、話についていけなかつたわたしに解るわけもなく……。

結局、キリュウさんの言った違和感が何かは解らずに、わたしたちは村長宅を出た。

モンスター襲撃までの残り時間【0：41】

わたしらはキリュウさんの要望で鍛冶屋にいた。

「あれ？ 買いたい物って《それ》だったんスか？」

「……ああ、敵が多いらしいからな。もしもの時のためだ」

そう言って購入ボタンを押すキリュウさん。

確かにキリュウさんはわたしらよりも、もしものことが起こる可能性は高い。それを考えたらやっぱり必要なと思う。

でもわたしら三人にはキリュウさんのように繊細な動きはまだ出来ない。だから動きを妨げるような余計な重さは極力なくした方がいいとのことなので、わたしたちは何も買わなかった。

モンスター襲撃までの残り時間【0：19】

防衛担当であるエウリア村の川側の左の門に着いたわたしたち。

教えてもらった通り、村の外周のこちら側の塀は深い川に面していて、門へは幅約6メートル、長さ約10メートルほどの石橋を渡る他は辿り着けそうにない。守るには良い場所だと、素人意見だけどそう思う。

「お、ようやくご到着か。逃げたかと思っただぜ」

先に来ていたリックさんがニヤニヤしながら話しかけてきた。  
…てか、わたしらをジロジロ見るのはやめて欲しいツス。

ここでこの門の防衛担当メンバーを改めて言うと、

キリュウPT：キリュウ（長槍使い）、ルネリー（盾剣士）、レ  
イア（片手剣士）、チマ（片手剣士）

リックPT：リック（長槍使い）、ネルソン（短剣使い）、その  
他の人（盾剣士×3、短剣使い×1）

こんな感じ。

右側の門はクラウドPTとジョーストPTの担当だ。正直さつき  
ヒステリッてたジョーストさんが逃げ出さないかすごく不安……。  
2PTで協力するといっても、いきなりの連携なんて逆にお互いの  
足を引っ張り合う結果になりかねない。なので、基本的には各PT  
自身で何とかする。でも、助けを呼んだらお互い出来る限り助け  
ける。話し合った結果そういう事になった。

モンスター襲撃までの残り時間【0：12】

もう、何処に行くということも出来ない。

この場に居る誰もが、黙って門の外、石橋の向こうをじっと見て  
いた。

「……………来た……………」

誰かが呟いた。

「……あ」

全員が目を凝らす。

「……ひっ」

わたしの近くにいる人が息を呑んだ。

「……クソがつ」

リックさんが悪態を吐く。

「う、うわあああああ！！？」

ネルソンさんが叫んだ。

「キ、キリュウさん……っ」

ルネリーとレイアがキリュウさんの服を掴む。

「……っ」

わたしは いや全員が、《それ》から目が離せなかった。

《それ》は最初、門から続く街道の先に揺らめく陽炎かげろうだった。

陽炎は段々と横に広がり、次第に輪郭を確かにしていった。

透明な揺らめきに色が付き始め、まるで何処か異界から次々と実体化しているような、そんな光景。

ド……ドドド……ドドドドド……と《それ》がこちらに近づくとつれて大きくなる重低音の地鳴り。

ギーギー、ギャツギャツと其処そこかしこ彼処から聞こえて来る、何故か言いようも無い不安に駆られる耳障りな奇声。

その地鳴りのような音と、奇声に感じる不安が合わさって、実際に足元が揺れているような錯覚を起こす。

きつと俗に言う《足が震える》という状態になっていたんだと思う。経験したのは初めてだ。

そして、ようやく《それ》がしっかりと視認出来る位置まで来た。

「……魔物の……群れ……」

そう。まさに《魔物の群れ》。それ以外に言いようがない。

漫画で見た百鬼夜行の妖怪たちのような数十匹からなる異形の大群。確かにそのほとんどは、これまでわたしが倒してきた種類のモンスターたちのようだ。

……だけど、これだけの大群を見ると、それらは何故か《別の何か》に見えてくる。

別の何か。未知の何か。知らない何か。

知らない解らないは、人間に《恐怖》という感情を呼び起こす。

その恐怖は、はじまりの街の外で初めて戦ったイノシシの比なんかじゃなかった。

さつきまで「なんとかなる」と思っていたわたしの頭に、「あれは無理だ」という思いが生まれる。

やだやだやだっ、逃げたい……っ。此処ここに居たくないッスよ  
お……っ……っ……

モンスターの群れのシルエツトが段々に大きく鮮明となっていくのと同時に、わたしの両目もじわじわと熱くなっていくのを感じた。たぶん、《あれ》を見ている誰もがわたしと同じことを考えていると思う。

あんなの勝てるわけがない。

理屈では、勝つのは不可能では無いのかもしれない。これはクエストなんだ。つまり、普通なら達成できること前提のモノのはずだ。でも……《あれ》は理屈じゃない。

巻き込まれたら確実な《死》が訪れるという予知にも似た予感。大昔の人と人が大勢で斬り合う戦の雰囲気というのはこういうものなのかなと、現実逃避しそうになるわたしがいる。

「……無理……だ。……あんなの、無理に決まってる……っ」

誰かが震える声で力無く叫ぶ。

前に茅場晶彦っていう人が言った言葉が、わたしの頭の中でこの状況にピタリとハマった。

『諸君にとって、《ソードアート・オンライン》は、すでにただのゲームではない。もう一つの現実と言うべき存在だ』

そう、この恐怖は現実のもの。

こんな無情な現実ゲームに、救いの無い仮想リアルに、わたしたちは絶望し、誰もが戦う気力を奪われた。

奪われたと思った。なのに。

「……………なん、で……………スか……………？」

なんで……………なんでなんスか？

どうしてっ、あんたはそんなに堂々として、まるで日課の散歩に

でも行くような自然さでっ、そこまで平然と前に出ているんすかっ  
!?

キリュウさんっ!!!

「……………」

キリュウさんは、目の前の光景に魅入られたかのように身動きの  
取れないわたしら防衛メンバーの数メートル前、石橋に差し掛かる  
所までトコトコといつもの無表情で歩いていった。

そして、ウインドウを開いて何かを打ち込むような操作をした後、  
左手に持っていた槍を両手で持ち直し、切先をモンスターの群れに  
向け

「っ!?!」

ダンツツッ!! と、いきなり大きな音を立てながら石橋を叩き  
踏むように腰を落とした。

当然わたしら全員はその音に驚き、モンスターの群れではなくキ  
リュウさんに視線を向ける。

わたしらの前で、ただ一人モンスターの群れに立ち向かうかのよ  
うに構えるキリュウさん。

この位置じゃ顔を見ることは出来ないけど、その背中は何故か凄  
く大きく見え、なんでか自分の心を支配していた恐怖もスーッと薄  
らいでいく感じがする。たぶんそう感じているのはわたしだけじゃ  
ないはずだ。

それはきつと《安心感》によるものなんだと思う。

想像してみたい。誰も死の脅威にビビッて絶望している状況で、たった一人だけ平然とその脅威に立ち向かおうとしている人の姿を。

きつとそんな人がいるだけで、絶望の中に希望が見えてくる。

一緒に立ち向かおうという想いが沸いてくる。

もうあなた、ほんとスゴイツスよ。キリュウさん……っ。

数瞬前のブルッてた自分のことも忘れて、わたしはキリュウさんを見ながら口が緩むのを感じた。

「……………予想よりも、敵の数が少ないな……………」

「は？ ……はあああ！？」

そんなキリュウさんがしれっと呟いた言葉に、今までの雰囲気やぶち壊すくらい全員が呆れたように驚愕した。

「……っ、うお　いつ！　あれが少ないってどういことツスカー！？」

確かに一面を埋め尽くすって程じゃないかもツスけど、何十匹というモンスターが集まってこちらに向かって来てるってどういうツスにっ！

「……………ってあれ？　何十匹？」

「……………よく見てみる。モンスターの数は五十よりは多いかもしれないが、明らかに百も居ない。左右の門のどちらに来るかは解らなかつたが、分散している可能性が高いな」

キリュウさんの言葉を聞いて、あたしたちは改めてモンスターの大群を見る。

……本当だ。確かに多いは多いけど、最初に聞いていた二百匹という数にはどう見ても見えない。

ということは、左右の門にそれぞれ分かれて襲撃してきたってこと？

じゃあ今ごろ反対の門は、二百匹からわたしらの目の前のモンスターを引いた数が向かっているってことなの？

「……ん、じゃあ、クラウドたちが守ってる門の方に残りが行ったつづうのか？」

リックさんが、声を搾り出す、といったようにわたしが思ったことをそのままキリユウさんに訊いた。

「……それ含めて先ほどメッセージを送ったが……今、返信が来た。……む、向こうにもどうやらモンスターが現れたようだが、どうもその数も百匹は居ないらしいな」

既に向こうと連絡を取っていたというキリユウさん。……あ、さつきウインドウ操作してたのはそれか！

ってあれ？ 向こうも百匹居ない？ どういうことだろう？ 最初の情報では、モンスターは二百匹ということだった。NPCが言ったことだから間違いは無いと思ってたんだけど、そうでもないのかな。

でも、はじめりの街でNPCに聞いたこの村への道の情報も微妙におかしかったし……。NPCの言う事も絶対じゃないのかな。と、そんなことを考えてしまうわたし。

だから、次の瞬間はホントに心臓止まりそうになるぐらいビクビクした。

「ルネリー！ レイア！ チマ！ 来るぞっ……交戦準備！」  
「!? ……ひゃ、ふぁいつ！」

前を見れば、キリュウさん越しの100メートル向こうには既にモンスターの群れが来ていた。あと一分もしない内に戦闘が始まりそうだった。

わたしは再びキリュウさんの背中を見る。また心が落ち着いてくるような感じがした。

思えば、出会ってから今までずっとこの背中を見てきた気がする。そして、その背中に何処か安心感を抱いていた。その安心感を何故感じたのか。今なら解る気がする。

わたしがキリュウさんの背中を見ているということは、当たり前なことだけどキリュウさんはわたしの前に居ることなんだ。つまり……。

ずっつと守ってもらって来たんスよね……。今までずっと、わたしらの前で……。

今、改めてちゃんと理解した。キリュウさんは、物理的だけじゃなく精神的にもわたしらを守っていてくれてたんだということに。それは知ってたつもりだった。あのとき気付いたはずだった。だけど、それが当たり前になり過ぎてて、ちゃんと意識するということをしなかった。

でも、あれツスよね。ずっつと後ろにいるポジションってのは、やっぱり嫌ツスよね……。

モンスターの群れは、もう50メートルほどの先まで来ている。

「……うしっ」

わたしはパンツと自分の両頬を叩き、気合を入れた。

今はまだ、わたしにキリュウさんの隣に並ぶだけの力はない。だけど、いつか……いつか必ず隣あそびにつ。

んで、そのためにはまず、目の前の《アレ》ッスよね。

もうわたしは、モンスターの群れを見てもそれほど怖いとは感じなかった。

乗り越えなきゃいけない壁。思ったのはただそれだけだった。

ふっふっふ、覚悟を決めたオンナの強さ……見せてやるッスよ！

わたしは、迫り来るモンスターたちを睨みながら剣を構えた。

### 3・後ろではなく（後書き）

確か原作では、大規模戦闘クエストは無かったと思いますが、とある理由の為あえて入れました。まあこのぐらいならありそうだと思いますが。というかこれをレイドと言っているのかも解らなかつたのですが、一応複数のPT用クエストなので、レイドという言葉を使いました。

そしてこの作品では初となる テスタープレイヤーの登場。しかし、彼はヘタレモヤシだった。……この先も、彼がテスターの利を得ることはないでしょう。いや残念だ。

地形の説明が難しい……。こんなんじゃ解らないよ！と思われましてららご指摘お願いいたします。

10/24 SAOでのレイドの説明を追加。ではボス戦以外にレイドは無かったという設定に変更。

他、ご感想、ご質問もお待ちしています。

#### 4・違和感の正体（前書き）

主人公とレイアの交互の視点です。

#### 4・違和感の正体

「……………」

俺は、漸く遠目にだが視認出来るようになった《魔物の群れ》を見渡した。

此処から見える限りでは、トカゲ、歩く植物、ネズミ、犬などの動植物型モンスター、そしてやはりと言うべきか剣技を扱う亜人型モンスターの《ロウアー・ゴブリン》も確認できた。割合は動植物型と亜人型で半々といった感じか。やはり亜人型が多いようだ。

部隊構成も隊列も何も無く、ただ色々なモンスターが混じり、一塊となつて近づいて来る。

ここまででは予想通り、か。しかし……。

目算だが、敵の数はNPCから聞いていた二百という数よりも少なく見える。百匹も居ない。七、八十匹といった所か。

左側の門にこれだけしか居ないというならば、逆の右側の門にモンスターが集中しているのだろうか。

「う、うわあああああ!!?」

俺がそう思考していると、近くで叫び声が上がった。……この声は、確かネルソンと言ったか。

視線だけを動かして周囲を見ると、この場に居る殆どの者がその顔に恐怖を浮かべていた。

「キ、キリユウさん……っ」

ルネリーとレイアが、心細さからか俺のコートの裾を両脇から掴

む。

拙ますいな……。

普段ならば、その反応を仕方ないと思うだけだっただろう。何十という敵意、殺意が自分たちに向けられる事なんて、学校での虐めなんかの比ではない。常日頃から殺気や闘気あに中あてられている訳でもない者たちには、この反応は至極当然とも言っている。

しかし、それでは困る。流石にあれだけの数は俺一人では対処しきれない。この場に居る全員の協力が必要だ。

「……………」

俺は一列に並んだプレイヤーたちの前方数メートルの、石橋に差し掛かる所まで歩いた。

掴まったままだったルネリーとレイアは急に動いた俺に「……………あつ」と驚いて手を離してしまったようだ。心の中で二人に謝罪をする。

そして俺はフレンドリストを呼び出し、向こうのPTLであるクラウド、ジョーストの両名に同じ内容のメッセージを送った。

『敵視認。此方、亜人型、動植物型、比率一対一混成部隊。敵数百未満。其方八如何力』

出来るだけ完結にしたつもりだが、少し読みにくさを感じるか？ いやしかし、打ち直している暇も無い。

俺は左手に持っていた槍を両手で持ち直す。

さて、まずは固まってしまっている者たちの意識を戻すか……。

直立姿勢のまま、俺は重力に身を任せて前に倒れる。そして左足

を前に出し、石橋を踏み砕く勢いでワザと大きな音を出しながら四股を踏んで腰を落とす。

「っ!?!」

その音に驚いたのか、プレイヤーたちの視線が自分に集まるのを感じた。

さあ、場の雰囲気にもまれていた者たちの意識を此方に向けてすることは出来た。後は、《あれ》に立ち向かえるだけの理由だ。

無理不可能と思わせるな。可能と思わせる。

俺は仲間の士気を上げるため、口を開いた。

「……………予想よりも、敵の数が少ないな……………」

しかし、俺の口から出てきたのはそれだけだった。考えるのは簡単だが、俺のような口下手にとっては言葉にする方が難しいようだ……………むう。

「は? ……はあああ!?!」

俺の後ろから、呆れたような叫び声が聞こえる。……………確かに。自分でも呆れるような台詞ではあったと思う。

「……………よく見てみる。モンスターの数は五十よりは多いかもしれないが、明らかに百も居ない。左右の門のどちらに来るかは解らなかつたが、分散している可能性が高いな」

だが後悔している時間も無い。モンスターたちは今も尚近づいて

来ているのだ。

「……ん、じゃあ、クラウドたちが守ってる門の方に残りが行ったつづうのか？」

赤い長髪の男、リックさんが訊いてくる。俺は振り向かずには答えた。

「……それ含めて先ほどメッセージを送ったが……今、返信が来た」

電子音が鳴り、メッセージが届いたことを知らせた。俺はすぐに開いて読む。

『こちらと同じだ。数も百匹はいないみたいだ』

先ほどメッセージを送った一人、クラウドさんからの返信だった。ジヨーストさんからの返信は未だ無い。

「……む、向こうにもどうやらモンスターが現れたようだが、どうもその数も百匹は居ないらしいな」

言いながら『了解。健闘ヲ祈ル』と返信をした。

しかし、どういうことだ？ NPCから得られる情報の信用性は思ったほど高くは無いらしいのが最近の認識だが。……何処か違和感が残るな。

モンスターたちとの距離を計算しながら、俺は答えが出そうではないような歯がゆい感覚を味わっていた。

「……いや、今は目の前の事が優先だ」

軽く首を振り、誰にも聞こえないほどの小さい声で呟いた後でモンスターを睨む。

「ルネリー！ レイア！ チマ！ 来るぞっ………交戦準備！」

「！？ ……ひゃ、ふぁいっ！」

いきなり呼び掛けた俺の声に、舌を嚙んだ様な返事が聞こえた。

落ち着け。いつも通りやれば問題は無い。

心の中で三人と自分に言う。俺は言葉は苦手だ。故に………行動で示そう。

「……お前たち、《作戦D》で行く」

「え？ あ、了解ッス！」

「は、はいっ」

「わかりましたっ！」

何とか返事をした、という様子の三人の声を確認して、俺はもうすぐ石橋に差しかかろうとしているモンスターの群れに向かって槍を脇に抱えるように持ちながら地を蹴った。

ギー！                   グオー！                   ギャー！                   ギヤツ！                   グルウ

！                   ギエー！                   ガー！                   キー！                   グルワァー！

以前森林の中で聞いた蝉の鳴き声の合唱よりも、数段耳障りな奇声が散弾のように俺の数メートル前から浴びせかってくる。

統一性の欠片も無く集団で此方に向かってくる魔物の群れは、まるで暗い濃混色の津波。少しでも気を抜けば、意識もろとも命まで呑みつくされてしまうだろう。

集中しろ……！ 師匠との稽古を思い出せっ！

俺は敵に向かって走りながら、全意識を敵の動きのみに集中させる。

多勢を相手にする場合、一匹一匹を一撃で確実に倒すことが重要となる。しかし、この《SAO》の世界ではそれは叶わない。いくら急所に当てようとHPが無くならない限り、敵は攻撃の手を止めないのだ。

故に、まず狙うは敵の足だ。敵は隊列も何も無く固まって向かって来ている。通常の戦ならば、前列にいる者たちの足を止めれば、後続の者たちによる勢いで押され踏み潰され、前列を圧殺することが出来る。このSAOでどうなるかは解らないが、今はそれをやるしかない。

俺は押し合うようにして石橋を入ろうとするモンスターたちの先頭にいる一匹のゴブリンに、槍の射程目一杯の刺突を放った。

「ハア　　ッ！」「グエアッ」

此方に向かってくる敵の勢い、そして敵に向かって走る俺の勢いで、相対速度により威力の増した槍の刺突がゴブリンの腹部に突き刺さる。更にそれがつつかえ棒の役割をなして先頭のゴブリンの勢いを相殺し、その場で急停止。なお向かってくるモンスターの前列にそこだけ凹みが出来た。だが後続のモンスターたちにより、そのゴブリンごと槍も押されてくる。

俺は槍を引くと同時に一步踏み込みながら体を捻り、槍の中腹にわき腹を当てて、そのまま速度を上げ槍諸共一回転。周りのモンスターたちの下段に向けて思い切り横に槍を薙ぐ。

東雲流《弓風》ゆみかぜ。

半径2メートル程の円を描いて、周囲のモンスターを巻き込みながら薙ぎ払った。

足に攻撃を受けて前列にいた亜人型モンスターたちが転倒し、前列の勢いが一瞬だけ膠着する。

どうなる……？

普通ならば、後続に踏み潰されて転倒した前列の者は息絶える。

……現実の戦ならば。

しかし、やはりと言うべきか、そうはならなかった。

転倒したモンスターたちは、《重い障害物》というように後続のモンスターたちに地面をズルように押されている。

モンスターの同士討ちは無理……か。

前列の膠着により全体の動きが緩やかになったが、それも数秒のことだろう。しかも、レベルが上がリ威力も上がった俺の攻撃でも、薙ぎ払った敵には二割ほどしかダメージを与えられていない。

だが一応《最初の目的》は達した。直ぐに俺は眼前で転倒状態になっている一匹のゴブリンの頭を踏みつけて

「はっ」

モンスター蠢く集団の只中へと文字通り飛び出した。

俺の能力構成は筋力値と敏捷力値では割合で言うと二対三の敏捷力優先に上げている。

理由は、敏捷力値は反応速度にかなり影響して来るからだ。今のレベルではまだ、まるで水の中で動いているかのような抵抗感を感じる。この体が元々の俺の反応速度に適応していないからだ。攻撃が来ると解つていても、現実と同じ反応速度では体が付いて来れず、思ったように避けることも受けることも出来ない。

レベルを上げれば敏捷力値も上がり、より速い反応も出来ると思うが、それは一朝一夕には出来ないことだ。一朝一夕で事を成すな

らば、必然的に初動を速く行うことで速度を補う方法が効果的である。しかし、それには敵の動きを正確に予測しなければ、逆に窮地に陥りかねない。

だが此処で、俺の十五年間の鍛錬の成果がその効力を発揮する。

初見ならまだしも、既に幾度か見た敵の動きを読むことなど、俺には容易い。それが格下ならば尚の事。幾匹居ようが避け続けるだけなら何ら問題は無い。

俺はモンスターたちの頭を踏みつけながら群れの上を飛び、移動し続けた。

敵の真っ只中にある形ではあるが、今の身体能力で出せる全力の速度を持ってして跳躍移動をし続けることで背後からの攻撃は無視、視界範囲の敵にだけ注意を向けられる状態にする。手首で回転させた槍を振り回し、視界に映るモンスターの武器や頭を弾いていく。

それは、たった一つ判断を誤れば即死が待っている状況。モンスターの頭間を跳躍したときに足を踏み外してもすれば、群れの只中に滑り落ち、回避不可能な四方八方からの攻撃を死ぬまで受けるだろう。

しかし、この状況 誰よりも速く先手を取り、多くのモンスターに攻撃を入れ、モンスターたちが《俺だけ》を意識するような状況が、この大規模戦闘を攻略する鍵となる。

この世界では、モンスターたちの敵愾心を数値化して計算できるという。

つまり、此方の行動次第で任意にモンスターの標的を変えることも出来るということだ。

モンスターの敵愾心<sup>ハイト</sup>を特定のプレイヤーに対して増加させる方法は色々ある。最初に認識したプレイヤー、一番近くにいるプレイヤー、一番多くダメージを与えたプレイヤー、継続的にダメージを与えているプレイヤー、大声を出したプレイヤー、等々。

俺がモンスターの敵愾心<sup>ハイト</sup>を自分自身に対して増加させる為に取った行動は、一番最初に攻撃を入れるというものだ。

固まっているため満足に動けないモンスターたちの頭上を、適度に攻撃しながら移動し続けることで、モンスターの意識を俺自身<sup>トモ</sup>に一定期間引きつける。

そうすることにより、《あの三人》の攻撃力が活きてくるのだ。

先ほど三人に言い放った《作戦D》というもの。

これは、四人で定めた幾つかの戦法の内、対集団戦の為の作戦だ。言葉にすれば至極単純。俺が囷になり、敵の意識が俺に向いている内に三人が一匹ずつ確実に仕留める。

俺はソードスキルを苦手としていたので攻撃力に難がある。しかし、敵の動きを読むことに優れ、回避や受け流しを得意としている。逆にルネリー、レイア、チマの三人はまだ正確に敵の動きを読むことは出来ないが、ソードスキルを使った連携により、三人一緒ならば、かなりの攻撃力、殲滅力を持っている。

「ヤ　　ッ！」

複数のスポーツを経験したというルネリーは、敵の急所を突くことに長けている。論理的ではなく感覚で相手の急所を感じ、絶妙なタイミングでソードスキルを当てるとするのは、もはや才能と言ってもいい。

得意だという片手剣基本技《スラント》の袈裟懸けの軌跡が、俺に意識を向けているモンスターの急所に吸い込まれる。

「……ハッ！」

レイアは、双子であるルネリーの動きを完璧に把握している。ルネリーがソードスキルを放ったことによる技後硬直に陥るその瞬間を察知し、ルネリーの右側から回り出て、ソードスキルによる一撃を受けて硬直している敵に向かって片手剣基本技《ホリゾントル》の真横に振り抜く一閃を放つ。普段からルネリーを気に掛けて、その行動をよく見ているレイアだからこそ、本能で動くルネリーの攻撃にタイミング良く追撃していける。

「てえりゃ　ッ！」

チマは、ルネリーとは違う意味で勘が良い。自称ビビリだというチマは、攻撃するべき時とそうでないタイミングが感覚で解っている。レイアの攻撃の後に自分が攻撃しても大丈夫かどうかを無意識に判断して追撃している。

命の掛かっている戦闘において、引き際というのは最も大事なことだ。通常、素人はそこで見誤る場合が多いが、チマは天性の勘で攻撃の成否を読み取り、ルネリーの左側から飛び出て、得意の剣技《バーチカル》を放つ。更に、引くときも攻めるときも、そうと決めたら思い切りが良いというのもチマの長所だろう。

ソードスキル  
剣技には強制技後硬直時間というものがある。敵がソードスキルを使ったときに俺がそこを突いたように、この硬直時間は自分たちにとっても大きい弱点になりえる。故にその硬直時間を埋める為にルネリー、レイア、チマの三人でのソードスキルの同時攻撃ではなく、連続攻撃を行うことで、互いの弱点を補い合う方法をとった。これは、かの歴史的偉人である織田信長公の鉄砲部隊が使った戦法《三段撃ち》から考えを得たものだ。

意識が俺に向いている格下の敵。硬直時間という隙間を埋めた三人のソードスキルの連撃。それは正に三閃必殺と言えた。

敵の反撃を受けることもなく、三人交互にソードスキルを放つことで、隙間無く、且つ何連続もソードスキルを放つ三人。

ルネリーの《スラント》、レイアの《ホリゾンタル》、チマの《バーチカル》、またルネリー、レイア、チマ……。

幼馴染だという三人故の息の合った連携。

確実に一匹一匹を秒殺する三人。このままなら、恐らく一時間も掛からずに倒しきることは可能だろう。

問題は、それまで俺がたった一人で、数十匹にもなるモンスターたちの攻撃を避け、受け流し、その上で最後までモンスターの注意を引くことが出来るかということだ。

いや、出来るか……ではない。やらなければならぬ。

敵の頭を踏みつけて飛び、敵の隙間を走りぬけ、すれ違い様に擦るような攻撃を放ち敵愾<sup>ヘイト</sup>心を稼ぐ。離れすぎてはいけない。万遍なく、出来る限り全ての敵に注意を奪う一撃を。敵の攻撃を避けながらもギリギリ攻撃が届くか届かないかの所を動き回る。

綱渡りの様な攻防。時折敵の攻撃が体を掠り、僅かにHPが減る。

「……………」

死と隣り合わせなこの状況。しかし、何故か俺の口端は微かに吊り上がっていた。

それからどの位経ったのか。現在では、モンスターの数は既に二十匹程度にまで減っていた。

息苦しさは感じないが、集中力の酷使い過ぎで時折眩暈の様なものも感じる。体感では数時間も戦っているような気もした。

俺のHPの残量は約四割か。……このまま気を抜かなければ問題無く終わらせることが出来るな。

油断はしない。そうは思ったが、しかし余裕が出来たことも事実だ。

見る限りメンバー全員にも余裕が現れて来ている。リックさんのPTも誰一人欠けることなく、今は数匹のモンスターと対峙していた。

「……………！」

余所見をしている間に四匹のモンスターに囲まれ、同時に攻撃を放たれた。しかし俺は冷静にその内の一匹に突進突きを放って包囲から脱出する。

敵の数が減ったことで、モンスターの頭を踏みつけての頭上跳躍移動は出来なくなったが、同時に隙間も多く出来たので回避はしやすくなった。

「……………」

敵の対処に余裕が出来たからか、ふと頭の中にあることが甦って来た。それは、作戦会議中に感じた違和感だった。

少し、整理するか……………。

こちらに向かってくる三匹の亜人の足を薙ぎながら、俺は違和感の正体を探るべく、今回の出来事について最初から思い浮かべた。

昨日、俺たちは森でNPCの少女と会い、その少女の案内で村ま

で向かった。その途中で亜人型モンスター《ロウアー・ゴブリン》と戦闘し、その後森側の門から村に入った。更に俺たちが村に来た翌日、リックPT、クラウドPT、ジヨーストPTが、森側の門の正反対の位置にある川側の門から時間差で入ってきた。

そして、それぞれの理由　クエストを受けたり、情報を聞いたり　で村長宅へ訪問。しかし、それは《大規模戦闘クエスト》開始のフラグだった。

クエスト内容は、二百匹ものモンスターの群れから村を守ることしかし、難易度が高いと言われる《大規模戦闘クエスト》の割には襲ってくるモンスターの数が少な過ぎるという指摘が入った。皆で話し合う内に、俺が森で戦った本来この周辺には居ない筈の《ロウアー・ゴブリン》が怪しいということになり、その対処方法話を話した。

襲ってくる魔物の群れは、二つある川側の門のどちらか、または両方を襲撃するだろうとの村長たちの言葉通り、その両方にモンスターの群れは現れた。そして予想通りに、魔物の群れの半数がソードスキルを使う亜人型のモンスターだった。

む、何だ……？

俺への敵愾心<sup>ヘイト</sup>が弱まり、標的をルネリーたちに変更したモンスターに再び攻撃をして、俺を意識させる。

何故、俺はこんなにも違和感を感じている……っ。

「ギギー！」

目の前にロウアーゴブリンが迫ってきた。

「……っ！」

そのゴブリンが俺に向かってソードスキルを放とうとする姿が、昨日森で戦ったゴブリンと重なったとき 俺の頭に一つの疑問が思い浮かんだ。

そう、だ。何故……何故あのロウアー・ゴブリンは《あの場所》に居たんだ……？

今までの戦闘で既に体に染み付いた、ロウアー・ゴブリンが放つソードスキルの対処方法を無意識に実践し、すぐさま足に向かって突きを放つ。

「グギツ！？」

初動の形を崩してソードスキルの発動を止める。突き出した槍を引きながら、逆に石突を前に出すように横に振るってゴブリンの頬を横から打ち抜く。

難易度の高いレイドという話だ。故に普段はこの周辺に居ない亜人型が出てくるというのは解るし、その亜人型が出てくるというヒントとして一匹だけ通常フィールドに居たというのも解る。

だがそれなら、何故 《森側》に居たのか？

最初に俺がロウアーゴブリンと戦ったのは、森 村 川 山と並んでいる地理上の《森》だ。しかし、モンスターの群れを最初に発見した場所は、村と川を挟んだ向こう側の《山》だという。普通に考えて、モンスターの群れの発地点が《山》だとしたら、クエスト前のヒントとして一匹だけ居るのだとしたら、山側に出すのではないのだろうか？

だが実際には、正反対の位置の《森》に居た。……それは、何故

なんだ？

そして更に疑問なのがモンスターの数だ。NPCの報告では二百匹だったのが、川側の左右の門に襲ってきたモンスターの数はどちらも百匹も居ないという。残りは一体何処に行ってしまったのか……

「……………っ!？」

突如、悪寒とも言える《ある予感》が俺を襲った。

襲ってくる方向とは真逆に居た、普段は居ない筈のモンスター。

そして、最初に聞いた二百匹という数に満たないモンスターの数。そこから導かれる答えは

「……………まさか、斥候……………か？」

最初に遭遇した亜人。あれがモンスターたちの《斥候》の役割を担っていたんだとすれば……………。川側ではなく、《森側からの襲撃》の為の斥候だったとすれば、あの場所に居た説明もつく。

いや、しかしっ。

森に居た亜人は俺自身が排除した。斥候なのだったとしたら、報告に戻らない斥候が行った場所からなど襲撃はしないだろう。

それに、NPCも川側からの襲撃のことしか言っていないかった。群れを目撃された場所から森側の門までは、川を越えて回り込む必要がある。普通ならば……………そう、現実ならば《それ》は有り得ない。

「……………くっ」

しかし、有り得ないと思っただけでも嫌な予感は消えない。寧ろ

次第に大きくなっていく。

俺は周囲を確認した。既にモンスターは十数匹まで減っていた。

これならば、もう俺が居なくても大丈夫だろう……っ。

俺はソードスキルを放っている三人に聞こえるように大声で言った。

「ルネリー！ レイア！ チマ！ 此処は任せる！ 俺は森側の門に行く！」

言いながら三人の横を走り抜ける。

「へ？ ……ええっ!？」

「え……っ、どういうことですか？」

「ちよっ!？ な、何なんスカーっ!？」

ドップラー効果のように三人の疑問の叫び声が小さくなる。

すまないっ。説明している暇は無い。この予感が間違いであつてくれれば後でいくらでも謝る！

胸中で三人に謝りながら、俺は今現在出せる最高の速度を持ってモンスターたちを振り切り、大通りを走って森側の門へと向かった。

ど、どうして……？

モンスターの数が十五匹を切り、あと少しで全部倒しきるといった所で、いきなりキリユウさんが「森側の門に行く」と言って、言

葉通りの方向へ走って行ってしまいました。

私は視線を、視界の左端へ動かしてPTメンバーのHPを見ました。

ルネリーを初めとした私たち三人のHPは、キリユウさんがずっとタゲを取ってくれていたので、八割方残っていました。でもキリユウさんのHPは既に四割を切って三割近くまで減っています。

もしかして、HPを回復させる為に戦線を引いたの……？

ですが、ずっとPTメンバーのHPの残量は確認していましたけど、キリユウさんのHPは敵が減るにつれてHPが減る量も減っていました。敵が二十匹を切った辺りからは殆んどHPも減っていない。なによりキリユウさんのHPが五割を切ったときに「一旦後退してHPを回復して下さい」と言っただけど、「この戦いが終わるまでは大丈夫だ」と言って臆しもせずには戦闘を続けていました。そんなキリユウさんが、もうすぐ倒し切るというタイミングで戦場を離れるでしょうか？

これまで一緒に居た私には　いえ、私たちには考えられないことでした。

「おいつ、アイツはどうした!?　何処行っただっつうんだっ!？」

リックさんの少し困惑したような怒鳴り声が聞こえました。

キリユウさんが居なくなったことで、モンスター七匹を同時に相手をするようになったリックさんのPT。いきなり対処する敵が増えたことに戸惑っているようですが、元々格下のモンスターたちなので今のところは大丈夫そうでした。

「も、もしかして、逃げたんじゃ……」

リックさんのPTの一人がぼつりと呟いたのが耳に入りました。その言葉に、私は何時に無くカツとしてしまい、つい叫んでしまいました。

「　　っ、キリユウさんは逃げたりなんてこと絶対にしませんっ！  
！」  
「う……」

その人を睨む私、そんな私を戸惑うように見てくるその人。辺りに一瞬だけ気まぜいような雰囲気がありました。

こんなに大きな声を出したのは　　しかも、奈緒や佳奈美以外の人のことで　　初めてで、私自身内心はビックリしていました。

「レイア！　敵っ！」  
「……え？」

突然のネリーの声に我に帰ったた私の目の前で、キリユウさんからタゲを外した亜人型モンスターの一匹がソードスキルのモーションに入っていました。

しまっ……！？

今からではソードスキルを妨げることも避けることも出来ない。私は剣をソードスキルの予測軌道に置いて、被害を減らすことを優先しました。

「やあああー！」  
「えりや　　ッー！」

身構えた私に敵の攻撃が当たる寸前、モンスターの左右からネリ

ーとチマのソードスキルが炸裂し、敵はバリイーンと音を立てて碎け散りました。

「あ……二人とも、ありが」

「レイア！ ぼーっとするのは後！ 今は敵を倒すことだけ考えるよっ」

「そうッスよ！ キリュウさんは《此処は任せる》って言ったんスよ！？」

「……あ」

二人は、私が言おうとした言葉を遮って、怒鳴ってきました。

そう……。確かにそうだった。

キリュウさんは、私たちに《此処は任せる》と言いました。つまり、あとは《私たちだけで対処出来る》と、そう思ったのではないのでしょうか。

「……だとしたら」

だとしたら、それに応えるのが今まで鍛えてきて貰ったことに対する礼儀なのではないか……と、そう思いました。

そうして結論を得た私は再び剣を構えて、今の自分に出来る事であるルネリーたちのフォローに走りました。

「んく、んく、んく……はあ」

俺は森側の門へと続く大通りを走りながら、腰のポーチから取り

出した《回復ポーション》を一気に飲み干した。俺たちが戦っていた川側の門から森側の門へは、距離にして二百メートルほどだ。時間にすれば直に着く。しかし逆を言えばHPを回復させる時間が無いということでもある。

空になったポーションの瓶を投げ捨て、Y字路の通りを下に曲がりながら俺は己のHP残量を見た。

三割と少し……という所か。

もし予感が当たったときに為に、せめて五割は回復しておいて欲しいが……この様子では望み薄そうだ。

亀の歩みの如くゆっくりと回復していくHPにもどかしさを感じながら、今度は武器の耐久値を見る。

此方も三割程度か……。

心許ない数値ではあるが胸騒ぎは尚も続行中だ。寄り道する時間など無いという思いに駆られる。

「……ただの俺の思い違いであってくれれば……　　っ、やはり  
りそも行かないか」

視界の正面、約四十メートル先に構える木製のアーチ型門ゲイト。その門の更に先の森、木々が鬱蒼と生い茂り、その奥が深遠になっているかのような暗闇から　　《亜人型のモンスター》たちが次々と飛び出して来ていた。

予想が当たって、こんなにも嬉しくないのも初めてかもしれない。

ギリギリだが、間に合った……かつ。

「ハアツー!!」

俺は走る勢いそのままに、門の内側に入ろうとする五匹のゴブリンたちを、低い軌道の《弓風》で足を薙いで転倒させ、門の前に陣取った。そして《弓風》の範囲外にいた三匹のゴブリンに一度ずつ突きを放つことで敵愾心を煽り、全てのゴブリンに俺を標的と認識させた。

亜人型八匹か……。これなら余裕だ。川側の門も、もう大丈夫だろう。十数匹程度、今の三人の敵ではない。問題はクラウドさんたちが守っている門がどうなっているかな……。。

だがルネリーたちの所の戦闘が終われば、クラウドさんの所にも応援を向かわせることが出来る。

「……………あとは、此処を何とかすれば……………っ!？」

僅かに見えた光明について安堵交じりの声を出す、それを否定するかのよう森の奥の暗闇から次々とゴブリンたちが湧いてきた。……………その数、目算で約四十匹。

「……………。此処が、正念場か……………っ」

俺は覚悟を決めると、槍を構え直した。

俺一人で四十匹……………か。

此処にはルネリーたちも居ないし、援軍も何時になるか正確には解らない。

唯一の救いは、敵が全て亜人型モンスターしか居ないということ

だろうか。動物や植物型よりは動きが読みやすいし、単一種類しか居ないので、対処をモンスター毎に変えるということをしなくて済む。

……だが、怖くない、と言えば嘘になるだろう。四十匹も居る敵の全てが、ソードスキルを使う強力な攻撃力を持つ亜人型ばかりなのだ。武器の耐久値も心許ないし、なにより俺のHPは現在四割と少しまでは回復したが、逆に言ってしまうればそれだけしか回復していない。つまり、二回、もしくは三回もまともにソードスキルを食らえば……。

「……………いや、どうと言う事は無い」

しかし俺は首を振って、最悪の事態を否定する。

そうだ。どうと言う事の程は無い。

あのときの あの《何もすることの出来ない恐怖》に比べれば、今の状況は最悪には到底程遠い。手も動くし、足も動く。思考末の結論を行動することが出来る。俺は……戦えるっ。

敵を見る。視界に映る全ての情報を整理、有効活用しろ。

動きを読み。敵集団全体の流れを感じ取れ。

体を動かせ。一つ所に止まるな。

祖父との稽古に明け暮れた己の十五年を、信じろっ!!

「さあ……………思考しろっ!!」

生き残る為に。

俺は己を叱咤し、亜人の群れに向かっていった。

「……くっ、はぁあつ。ようやくと終わったか……」

キリュウさんが居なくなった数分後、ネリーが最後の一体にトドメを刺し、モンスターが全て倒されたのを確認した後、リックさんが溜息と共に言いました。数十匹と居たモンスターの大群が光に消えた石橋の上は、まるで最初から何も無かったかのように戦闘の痕跡が見当たりませんでした。しかしそんな石橋の上では、私たち全員が疲労困憊といった様子で、膝に両手を付いたり、武器を支えにして立っていたり、地面に座りこむ人も居ました。

ふとネリー、チマの二人と目が合い、お疲れ様と言おうとしたとき、三人同時に目を見開いて声を張り上げました。

「キリュウさんっ！」

突然居なくなったキリュウさん。確か森側の門に行くと言っていたけど……。

私は《エウリア村》のマップウィンドウを呼び出し、キリュウさんの位置を確認しようと思いました。

「あつ！ キリュウさん戦ってるみたいっ、HPがちよつとずつだけど減ってるよ!？」

視界左端に表示されているPTメンバーのHPを見たのか、ネリーが声を上げました。

そして、マップを見ると確かにキリュウさんは森側の門に居まし

た。

「と、取り合えず、キリュウさんと合流しましょうっ」

「う、うんっ」

「そうツスねっ！」

一体何がどうなっているのか。疑問は尽きませんが、キリュウさんが戦っているのなら、私たちも此処で休んでいるわけにはいきません。私たちは駆け出しました。

「お、おいっ！ お前ら何処行くんだよっ！？」

走り出してすぐ、後ろからリックさんの声が聞こえました。じれったい気持ちを押し込めて、足を止めてリックさんに言いました。

「あ、えと……ま、まだ戦いは終わってないみたいですっ。私たちは森側の門で戦ってるらしいキリュウさんの所へ行きます。リックさんたちは……出来ればクラウドさんたちの所へ応援に向かって下さい。お願いします！」

「お願いしますっ」

「しますツス！」

「え、あっ、おい！？」

私たちは頭を下げながら早口でそう告げると、踵かかとを返して再び駆け出しました。リックさんの声を無視するような形になってしまったことに心の中ですみませんと唱え、疲れた体に鞭打って足を動かしました。

横目でキリュウさんのHPを見ると、今は二割と少し……随分減っていました。二人も同じように確認しているのか、厳しい顔つきのまま黙ったまま走っています。

「二人ともっ、今のうちにポーションを……！」

皮肉なことですが、二人の切迫した顔を見てみると、反対に私は落ち着くことが出来ました。

今の私達のHPは約七割。キリュウさんが何匹の敵と戦っているのかは解りませんが、キリュウさんのHPを回復させる時間を、私達で稼がなくてははいけません。

焦らずに、自分に出来ることをひとつひとつ確実に……っ。

私の言葉を聞いて、ネリーたちは思い出したように回復ポーションをポーチから出し、三人で走りながら呷ります。美味しくはありませんが、自分の命の為に一気に飲み干しました。

Y字路の大通りを森側の道に曲がると、正面に小さく門が見えてきます。

「はあっ、はあっ、もうっ、ちよっ、と……っ」

ネリーが走りながら呟きました。……きつと無意識に。

三人がずっと見ているキリュウさんのHP。もうすぐ二割を切ります。

待って、待ってっ、待って……！！

次第に減っていくキリュウさんのHPバーに、届くわけもない願いを心の中で叫びます。

「あっ、いたっ！」

ネリーの声に前を見ると、確かにキリュウさんは居ました。先ほどは私たちも戦っていたのであまり意識できませんでした。数十匹ものモンスターたちに、単身で渡り合っているよう見えるその姿は、思わず息を呑むほどの光景でした。

最初の情報とは違うこの場所で、何故キリュウさんが戦っているのかは今も置いておいて、剣を抜いてキリュウさんのもとへ三人とも急ぎました。

「キリュウさんっ!!」

キリュウさんとの距離が20メートルほどにまで来たとき、私はつい大きな声でキリュウさんに呼びかけていました。

「……っ」

私の声に反応して視線を此方に向けるキリュウさん。一瞬だけ私と目が合った次の瞬間、弾かれたようにキリュウさんは敵の方を向き槍を盾にするように、体の前に掲げました。

そして

「え……」

勢いよく《何か》が槍に当たり、バキバキと軋む音がしたかと思うと、槍の真ん中が砕け散り 真っ二つに、折れてしまいました。

キリュウさんの、武器が……壊れ、た？

武器の無い状態。周りにはまだ数十匹のモンスター。そこから待っているのは、確実な……《死》。

「……だ、め」

槍が壊れた瞬間、私の中の《何か》も弾け飛びました。

「だめエ                    ツ!!」

私は正に形振り構わず、キリュウさんに向けて攻撃モーションを取っているモンスターに飛び掛りました。

#### 4・違和感の正体（後書き）

説明がくどくなりすぎた気がしないでもないですorz

疑問、ここの説明がくどい、話の内容に違和感、などの感想ありましたら、お願いいたします。

## 5・戦友には無粋なこと(前書き)

最初はリック兄さん視点です。

## 5・戦友には無粋なこと

「リックさんたちは……出来ればクラウドさんたちの所へ応援に向かって下さい。お願いします！」

「お願いしますっ」

「しますッス！」

「え、あっ、おい!？」

言うだけ言って駆けて行く三人の女の子らに、オレは無意識に手を伸ばしていた。

金、銀、茶色という目を引く三色の髪を靡かせながら段々と小さくなる三つの背中。こっちは死にそうな目に遭ってくたくただったのに、同じ思いをしたらどうあの子らは何であんなにも元気なのか。

いや、疲れていても走らなきゃいけない。そんな顔をしてやがったな……。

「……ちっ」

年下の女の子らが頑張ってるつつうのに、オレはへばってる？

……何か、ムシヤクシヤしゃがる。

槍にもたれ掛かる様に立っていたオレは、愛用の《ブロンズスピア》を持つ手にぐっと力を入れて石突で地面を押し、背筋を伸ばして自分自身の足でしっかりと立った。

そして、今の会話を聞いていただろうPTの野郎共に、今の言いようも無い憤りをぶつけるように怒鳴りつけた。

「おい、お前らっ！ 聞いてただろっ!？ POT飲んで……いや、

飲みながらクラウドんとこ向かうぞ！」

戦いに疲れてダレていたPTメンバーが、オレの言葉にノロノロと立ち上がる。「シャキツとしろや！」と言いたいが、疲れているのはオレも同じ、出来ることならまたあんな戦場には行きたくないつても解る。

「ええっ？ もう少しだけでも休ませてよ、リック……」

外聞無く地面に座り込んでいるモヤシ野郎　ネルソンが、似合  
いもしない革鎧を着た体を脱力させながら言ってきた。ヘタレでど  
うしようもない奴だが、言われたことはちゃんとやる奴だというこ  
とは長年の付き合いで解っている。事実、さっきの戦闘中じゃ、顔  
が引きつるほどビビリながらもオレの指示通りには動いていた。

まあ、言われなくちゃやらねえってのがアレなんだがなあ……。

一応こいつら全員、現実リアルでの友人ダチだ。小せえ頃からの腐れ縁で、  
気が弱く主体性の無い奴らばかりだったからか、柄でもねえのにオ  
レが仕切り役をすることが多かった。

そんな友人トモ達が珍しくオレを誘ってきたのが、この《S A O》ソードアート・オンラインだ。  
今まで見たこともないような興奮したノリでS A Oの良さを力説す  
る友人トモ達に、呆気おぼろに取られたままのオレはS A Oにログインした。  
んで、すぐさま茅場晶彦によるデスゲーム宣言。

おいおい、コレどうすんだ？ と相談しようとしたオレが見たの  
は　めっちゃビビッてるダチたちだった。

しょうがねえから現実リアルと同じノリでオレが仕切って、なんとかこ  
こまで来たんだが……。

ンとに言われなきゃやらねえ奴らだな……っ。

「え？ …… いたたたつ、痛いよりツク！ HP減っちゃうよ！？」  
久々に力チーンと来たオレは、ネルソンの耳たぶを引っ張って大声で言った。

「……んの、馬鹿ヤロオがつ！！ あの嬢ちゃんたち見て何とも思わねえのかっ！？」  
「！？」

耳元で大声を出されたネルソンは目をギュツと瞑り顔をしかめる。  
オレはネルソンの耳たぶを掴みながらメンバーを見渡してもう一度言った。

「……さっきの戦い。正直、年下でオレらより人数の少ないキリュウPTに、オレらおんぶにだっこだったろ？ しかも、あいつらはまだ戦ってるらしいじゃねえか。……年上としてよお、何とも思わねえのかよ？」

さつきとは違い、ゆっくりと、言い聞かせるようにメンバーに言う。オレだって、こいつらと今まで付き合って来て、この煮え切らない態度とかに嫌な思いをしたことは何度もある。んだが、それでも付き合いを続けてきたのは……

「……っ」

今まで座り込んでいた奴らが無言で立ち上がり、POTを出して呟った。……その目には、少しだけ火が灯っていた。

遅えよ。まったく……。

ニヤけそうになる口を引き締めて、オレはメンバーに背を向けて言い放った。

「行くぞっ!!」

走り出したオレの後を追うような足音と共に、「オー!!」というノリの良い雄叫びが辺りに響いた。

「ギヤ、ウツ!?!」

近付いて来た一体の《ロウアー・ゴブリン》の太腿に槍の切先を突き刺し、動きが一瞬止まったところに直ぐ、喉仏に再び刺突を放つ。更にそれを抜いた勢いそのままに一回転、周囲のゴブリンの足を払う。

それにしても、厄介な状況だ……っ。

現在、俺が戦っている場所は《エウリア村》の入口である門と、俺たちが通ってきた森の間にある草むらだ。広さは、先ほどの石橋よりは少し広いくらいか。そこに約四十匹ほどのゴブリンたちが犇んでいる。

このような多勢を相手にする場合、常に敵全体を視界に納めるように位置取りをし、背後からの攻撃をさせないように戦う方法が望ましい。だがこのゴブリンたちは、俺が一定以上の距離を取ると途端に《村に向かって》進路を変えようとする。故に

「セエイッ!!」

俺は殆んど敵集団の中央で奮戦していた。槍の長い射程を活かし、

敵の攻撃の間合いまで出来るだけ近づけさせないように休み無く攻撃を放つ。

モンスターが《人型》の場合、足を攻撃したり、体勢を崩すような攻撃を行うことで、《転倒<sup>タンブル</sup>》状態というバットステータスにすることが出来る。俺はそれを利用し、周囲の出足を槍先で挫くような戦法を取り続けた。

ここで意外にも役に立ったのが《索敵》スキルだ。通常、意識した対象一体の頭上にターゲットしているという証として《印のカーソル》とHPバーが現れるが、《索敵》を使うと視界のモンスター全ての頭上に《カーソル》が現れる。死角からの攻撃が一番恐い集団戦では、相手が何処にいるのかが視界端にでも解るといのは大変重要だ。カーソル群の動きで全体の動きが解れば、今後自分が移動すべき場所も特定しやすくなるし、カーソルだけ見えていれば目の前の敵の背後に居る姿の見えない敵も察知出来る。

「ッー！」

切先と石突を交互に連続して突き出し、ズガガガツと本来なら有り得ないような効果音を響かせながら間合いに入ってきた一体のゴブリンを光に変えた。そして直ぐさま槍を振り回して強引に道を開き、場所の移動を行う。今までの感覚から、もう直ぐ端の方のゴブリンが俺に対する敵愾<sup>ヘイト</sup>心が薄れる。そうすれば村へ入られてしまう。

まだ、六体……かつ。

恐らくまだ数分しか経ってはいないだろうが、一人で多勢を相手にするという状況に、俺は既に焦燥感を覚えていた。そして、戦いの最中に別のことを考えるのは自殺行為だとは解っていても、援軍のあの三人のことを考えることを止められなかった。

そんなときだった。

「キリユウさんっ!!」

「……っ!？」

レイアの……声!？

最初、幻聴かとも思った。だが、求めていたものが声の聞こえた先にある、という誘惑に耐え切れず、俺はレイアの声がした方向を見た。

二十メートルほど離れた先。そこには　ボロボロになった初期装備の白い麻シャツや灰色ベスト、その上に所々千切れている革胸鎧を纏いながら息を切らしながら此方へ走ってきている、ルネリーたち三人が居た。

「……………あ」

一瞬。ほんの一瞬だけ安堵して、俺は気を緩めてしまった。だから、《それ》に気付けたのは、ただの幸運だった。

「……っ!」

悪寒が走り、ルネリーたちの反対側に視線を移すと　ゴブリンたちの隙間から此方をジッと見つめている《そいつ》が居た。

背丈は周りのゴブリンと変わらない。しかし、手足が細長く、頭と腹が大きいロウアーゴブリンと違い、《そいつ》の体はかなり引き締められており、更に革製の鎧を着込み、インディアンのように極彩色の羽を数枚頭に付けていた。

モンスター名《ヴァルガゴブリン・コマンダー》

俺は、こいつがこの襲撃の指揮官だと悟った。

「……………」

ゴブリンコマンドーは無言で右腕を大きく振りかぶった。攻撃？ いやしかし、俺と奴とは約4メートルほど離れている。

何を……？ 飛び道具か？

疑問と推測が浮かぶ。俺は自分の勘に従い、急ぎ槍を自身の前に掲げた。直後。

「ぐっ……がああッ!？」

ゴブリンコマンドーが腕を振り下ろした途端、藤色に輝く《何か》がゴブリンたちの間を勢いよく駆けて俺に迫り、槍の中腹に当たった。バチンッ! という爆ぜる音と共に、体が仰け反るくらい強烈な衝撃を受け、バキバキと不吉な音を鳴らす槍。そして

「……………」

攻撃を受けた中心が砕け散り、槍が真っ二つに折れてしまった。度重なる戦闘の連続に、攻撃を受ける時の耐久値減少量が他の武器に比べて多いという特性を持つ木柄の《ウッドハンドルスピア》が、ついに耐え切れなくなったのだ。

此処で………かつ。

突然の攻撃に軽く仰け反りながら心の中で悪態を吐く。しかし、そんな暇すら与えないとばかりに周囲にいた三匹のゴブリンが俺目掛けて武器を振るおうとしてきた。

俺はその内の二匹の顔に、二つに折れた槍のそれぞれを投げつけ、残る一体の攻撃を体を無理矢理捻ることで避ける。

くっ、せめて十秒だけでも時間を稼げれば……っ。

間合いのある武器を失ったことで敵がどんどん近寄って来る。投げつけた槍は、一瞬だけゴブリンたちの足どめに成功したが、次の瞬間には粉々に砕け散っていた。

焦る俺に、今度は五匹のゴブリンが迫る。

「だめエ　　ッ!」

「!?! レイア!」

突如、叫び声を上げながら俺とゴブリンの間に滑りこんできた人影。普段の淑やかな印象とはかけ離れた声を放ちながらゴブリンにソードスキルを打ち込む　レイアだった。

そこから更にルネリーとチマの二人が飛び出して来て、三人が俺の前で扇状に陣取った。

「ヤ　　ッ!」

そして、横に並んだ三人が同時に剣技《ソードスキルホリゾンタル》を放った。息の合った三人の同時の横薙ぎは、ソードスキルの攻撃力も相まって、強力な範囲攻撃となり、さっきまでチクチクと俺がHPを削っていたゴブリンたち五匹を一気に光へと還した。

「キリユウさん!　今のうちに回復を!」

俺の正面で背中を向けてその銀色の長髪を波立たせているレイアが、敵を見ながら叫ぶ。そして息つく暇なく、周囲のゴブリンたちに立ち向かっていく三人。

ふっ、いつの間にか立場が入れ替わってしまったな……。

俺を守るような位置取りで戦う三人の意図を察知し、すぐさま左手で腰のポーチから《回復ポーション》を取り出して飲み、同時に右手でシステムメニューウィンドウを呼び出す。膝をついてしゃがみ込み、出来るだけ小さくなってルネリーたちが守りやすいように努め、しかし周囲に気を配りつつウィンドウを操作する。

だが本当に危なかった。せつかく《この時の為に買った》というのに、使う暇も与えられずに殺れるところだった……………ルネリーたちには頭が上がらんな。

襲撃開始の直前、俺は激戦を予想し、武器が壊れる可能性を考えて《これ》を買った。

素早く装備フィギュアの武器スロットに《それ》を入れ 直後、右手に《それ》がオブジェクト化して現れる。

カテゴリ《ロングスピアノーツーハンド》、固有名《トルーパー・スピア》

エウリア村の鍛冶屋で売っている唯一の木柄の長槍だ。全長九尺（約272・7センチメートル）の、先端の両刃の片方が銛のように鋭い返しになっている槍だ。

「……………よしっ」

本当ならある程度HPが回復するまでじっとしてたいが…………。あの《ヴァルガゴブリン・コマンダー》はこのまま放置出来ない。4メートルもの距離が開いていたにも関わらずに攻撃してきたゴブリンコマンダー。奴が加勢してきたらルネリーたちには荷が重いだろ。奴は、俺が倒さなければ。

「はっ！！」

「え？ キリユウさん！」

「ちよつ、まだ全然回復してないツスよ!？」  
「あわわっ」

俺の前に居たルネリーとレイアの間を飛び出す。HPが殆ど回復していないのにも関わらずに行動を再開した俺に驚く三人を尻目に、少し強引にゴブリンたちを掻き分けて、群れの開けたところに出た。

「……………」

そして再び相まみえたゴブリンコマンダー。吊りあがった目で俺を睨みながら右手を軽く振る。その手に持っているモノは…………。

《鞭》か…………。

ピシャンッ! と地面を弾くように鞭で叩くゴブリンコマンダー。鞭にも色々と種類はあるが、どうやら奴が使っているのは《牛追い鞭》と呼ばれる長く柔軟な鞭だ。長さは約5メートル程だろうか。先ほどはゴブリンたちの隙間からだったし、いきなりのことによく見えなかったが、俺の槍を壊したのはどうやら《鞭のソードスキル》だったようだ。

「キリュウさん!」

「こ、こいつは!？」

俺の後を追って三人が現れ、見慣れない風貌のゴブリンコマンダーを見て軽く驚く。

「…………恐らく奴が、この襲撃の指揮官クラスのモンスターだ」

「……………」

「お前たちには、まだ鞭相手は無理だ。奴は俺が戦う。…………お前た

「ちは、周りのを頼む」

「っ、はい！」

「わかりました！」

俺の指示に、質問すること無く頷いて行動する三人。

色々俺に訊きたいことはあっただろう。どうしていきなり走って行ったのか、どうして此処で戦っていたのか、どうしてHPの回復を待たずに飛び出したのか。

しかし、そんな暇も余裕も無い、そんな状況じゃないということ。三人は理解していた。感情的な疑問よりも、理性的な行動を取ったのだ。

俺はそれに、応えたいと思った。

「グ……グルアア！」

雄叫びと共にゴブリンコマンダーが動いた。地面に垂らしていた鞭を思い切り上段に振り被る。

「ガアッ！！」

そして野球のピッチングのように、勢い良くそれを振り下ろした。ソードスキルではない。ただの鞭による攻撃だが、流動するその動きは、剣での攻撃などより一見、見切り難く感じる。

「……………」

しかし俺は、体を横に少しズラすだけでそれを避けることが出来る。風切り音をさせて顔のすぐ横を通ったそれは、地面に当たって電気が弾けるような音をさせた。

鞭とは 《波》だ。

うねうねと予測し辛い軌道のように見えるが、実際には腕の動きを、つまりは《力の流れ》をそのまま先端へと伝えるように動くのが、《鞭》という武器の特徴だ。

上から下に振り下ろす様な動きをすれば、その高さの波が鞭を伝う。基本的に腕の振り下ろした直線軌道そのままに動くので、鞭の先端に気を取られなければ問題無く避ける事は出来る。

まあだが、実際に鞭を武器に扱っているような武術家の攻撃は正に縦横無尽の変幻自在。流れに流れを重ねることで予測不可能な攻撃をしてくる。……しかし、それにも攻略法は無いこともないのだが。

ゴブリンコマンドーはそこまで鞭の扱いに長けている訳ではない。だがそれでも、ルネリーたちのような武術未経験者では鞭の先端の動きに気を取られて、全体を見る事は出来ないだろう。

一応、俺は祖父から様々な武器の相手をさせられたことがある。その中には鞭もあった。

「ガアツ、グラアア!!」

再び鞭による攻撃。 が、俺はそれを避けながら敵に向かって進む。

東雲流歩法の一つ、《円歩》。

片方の足を斜め前に出し、地面に着くと同時に後ろの足で地を蹴る。先に前に出した足の指の付け根や踵を支点にして、弧を描くように素早く移動する初歩の技術。特に難しい技術ではないが、動きを型として反復練習することにより、咄嗟の状況では頭で考える時

間を省いて動くことが出来る。

「……………ギギ」

ゴブリンコマンダーとの距離、約三步。此方の射程に捕らえた。周りではルネリーたちの声が聞こえる。教えた通り、お互いに呼び掛け合って協力し、多数の敵相手に善戦しているようだ。しかし俺は、目の前に居るゴブリンコマンダーから視線を外すことが出来なかった。今の俺では、少しの油断も命取りになり兼ねない。

「……………」

刹那に時が止まる。

最初に動いたのは相手だった。

「ギィグルア！！」

「！！」

ゴブリンコマンダーの動きに既視感。あの形は……

ソードスキル！！

直ぐに結論を出した俺は、自分の頭の中に焼き付いたあの藤色の攻撃の軌道から外れるように体の位置をズラす。

「ごおおっ！！」という風の唸り声とすれ違うように前に進み、ゴブリンコマンダーの顔に、両腕を突き出すような槍の刺突を放った。

「はっ!!」

「グガッ!？」

突き出した槍を引くと同時に槍を立て、体を回しながら石突でゴブリンコマンダーの足を払う。

「ふっ……はあっ!!」

重心を預けていた片足を払われたことで体勢を崩した彼奴に、更にもう一回転して槍の横薙ぎを当てる。

相手に反撃をさせる暇を与えない。今も尚、俺を守るように戦ってくれている三人の為にも、直ぐにでもこいつを……倒す!

攻撃後、俺は二歩程下がりに、両手に持った槍を上段に振り被る。

そして、踏み込むと同時に、ゴブリンコマンダー目掛けて振り下ろした。

「……ギャッ!？」

攻撃を受けた彼奴が弾かれたように顔を後ろに仰け反らす。

東雲流《朧月》。

《斬》の動きに《突》を入れる攻撃。急激な間合いの変化により相手の反応を遅らせるフェイント技。しかし、この技の真価はそれだけではない。この技の本当の意義は、《刺突の利点》と《斬撃の利点》両方を得ることが出来る、という所にある。

斬撃の速度を乗せた刺突は、その間合いの変化も相まって相手を仰け反らせる程の威力を持つ。更に引き戻しながら振り切った先端は、円を描くように勢いに流れを与えることで、速度を落とさずに斬り返しをすることが出来る。普通の刺突では、突いた後に槍を引くので一旦スピードがゼロになる瞬間が生まれるが、この《朧月》

と言う技は、攻撃を次へと繋いでいくことも出来る使い勝手の良い技でもある。

「はっ！ やっ！ せあっ！！」

槍の間合いを維持し、連撃を放つ。

こんな……所で……っ。

SAOの舞台となる《浮遊城アインクラッド》は、第百層まである。

だが、俺たちが居るのははまだ、第一層。全体の1パーセントすら攻略していない。

だからこそ、こんな所で梃子摺っている場合では……無い！！

俺は、この貧弱な体出来る、最高の動きを持って

「お……おおっ！！！」

ゴブリンコマンドーの喉元に渾身の突きを喰らわせた。

「ギ……」

槍の刃が喉に突き刺さったままのゴブリンコマンドーの目から光が無くなり……次の瞬間、無数のヒビが体表に出来たかと思うと、盛大に細かいガラス片をばら撒いて四散した。

「……キリユウさん！」

俺の戦いの決着を確認したのか、三人が笑顔を向けてくる。

「油断するな！ まだ戦いは終わっていない……っ！」

しかし俺は、そんな三人を叱咤し、未だ残っている十数匹の亜人たちに槍の切先を突き出した。

その後の戦いは、予想したほど苦戦はしなかった。

指揮官と思われる《ヴァルガゴブリン・コマンダー》が倒されたせいか、残りの亜人たちの勢いは目に見えて弱くなり、疲弊した俺たち四人でも数分後には全て倒しきることが出来た。

「……お、終わったんすかね……？」

疲労か、未だ戦闘の興奮が収まらぬのか、荒い息を吐きながらチマがぼつりと声を出す。

「どう、だろ……？ あとはクラウドさんたちが担当している門がどうなっているかだけ……」

剣に体を預けながら立っているレイアが、下を向きながら応えた。上を向くのも億劫なほど疲れたのだろう。垂れた銀髪でその顔は見えない。

「はあっ、はあっ、はあっ……」

ルネリーは草の生えた地面に腰を下ろし、体を仰け反らせるように顔を上に向けて、両手をそれを支えるように空を仰いでいた。疲

れて話す気力も無いようだ。

三人の革鎧も、俺のコートも、所々擦り切れていて、もう既に耐久値の限界に近く見える。

「……………ルネリー、レイア、チマ」

そんな疲労困憊といった三人に俺は声をかけた。

「……………？」

「は、はい？」

「どーかしたツスか？」

三人が、俺に向けて顔を上げてくる。

金髪の双房を犬の耳のように垂れ下げ、戦闘後の安堵のせいか、やや気の抜けた顔をしているルネリー。

癖の無い銀色の長髪を両手で後ろに流し、先ほどの気迫が嘘のように穏やかな顔を向けるレイア。

肩にかかる程度の癖っ毛の茶髪の先をクルクルと指でいじりながら、顔を傾げているチマ。

俺は、三人に向けてその言葉を言った。

「……………三人とも……………お疲れ様……………」

「……………っ！！」

恐らく、この三人が来てくれなければ、敵中で槍が壊れた時点で俺は終わっていた。

あのとき俺の前に立った三人の背中に、俺は心強さを感じた。

だから本当なら、戦いが終わった今、俺は三人に礼を言うべきなのだろう。

だが、俺は敢えて言わなかった。何故なら

「あ……は、はい！ キリュウさんもお疲れさまでした！」

「……お疲れ様でした」

「お疲れさまッス」

そんな他人行儀なことは、《戦友たち》には無粋だと思ったからだ。

## 6 ・終戦の夜に想う（前書き）

レイア視点です。

## 6・終戦の夜に想う

「……………ふう」

短く吐いた私の溜息が、一瞬だけ窓のガラスを曇らせました。

それは当然の現象のようだけど、今自分がいる場所、仮想世界での出来事だと思えば、その再現度に驚くことは当たり前でしたでしょう。

でも今の私には、そんなことを考えつくような気力もありませんでした。

すっかり暗くなったエウリア村の街並みを、宿屋の二階の部屋の窓から、私は今日起こった出来事を思い出しながら、意味も無くぼんやりと眺めていました。

「……………レイア」

そんなとき、ふと後ろから名前を呼ばれました。

振り返ると、頭のツインテールを解いて半袖のTシャツに短パンのみを着た、いつもの寝間着姿のネリーが立っています。

「寝ないの？」

まるで鏡を見ているような、けれども全く雰囲気の違いと同じ顔でネリーが首を傾げて言ってきました。

時刻はもうすぐ深夜の0時になるうかというところ。

この世界に、TVやゲームみたいな娯楽は私が知る限りありません。既にその娯楽ゲームの中なのでから当たり前のことかと思いますが。

ですので私たちは、大抵外が真っ暗になる二十一時を過ぎるとベッドに入ります。灯りを消してベッドの中で目を瞑り、眠くなるま

でその日にあったことを三人でお話しています。普段通りならば、ネリーは二十二時を超えるとスイッチが切れたように寝てしまうので、それが合図となりチマも私も眠りにつきます。

でも、今日は……いつも通りには眠れませんでした。

「……うん。ちょっとね……」

「……今日は、すごかったもんね」

ネリーは私の隣に来て、窓の外を見ながらそう言いました。窓の外に視線向けていますが、きっと私と同じように、数時間前の戦いの様子を思い浮かべていることでしょう。

エウリア村をモンスターの群れから守る《大規模戦闘クエスト》。現実の世界では有り得なかった、自分たちの命を賭けた本当の戦い。私たちは確かにあのとき《死》を、そして《生》を、かつてないほどに感じていました。この……仮想の世界で。

「……あゝ、ホントきつかった」

「…………うん」

チマはもうベッドの中。それを考慮してか、ネリーは小声で言いました。それは疲労ゆえについ出た弱音ではなく、ああ終わったんだね、という達成感を感じているような呟きでした。

「でもさ、意外とあっさり終わったよね。もっと、なんていうか……祝勝会？　みたいのがあるかと思ったけど」

「……みなさん、凄く疲れていたようだったし、私もだけど、あれ以上騒ぐ元気が無かったんだよ」

「そーなんだからーけどー、村長さんとかも、せめてご馳走くらい用意してくれてもー……とか思わない？」

「……クス。そうだね」

ゲームの中のキャラクターに何を期待しているのか、とも思いますが、きつとこれもネリーの良いところ。どんな状況でもネリーは楽しもうとする。それは素直に羨ましいと思います。……ちよつと現実と仮想を混同視し過ぎてる気もしますけど。

「……………」

ふと二人の間に訪れる沈黙。私たちの呼吸音しか聞こえない、けれど決して居心地は悪くない空間。私はネリーと一緒に窓の外を眺めながら、あの戦いの後のことについて想いを馳せました。

あの森側の門での攻防の少し後、クラウドさんからキリユウさんへメッセージが届きました。

『キリユウくん、こちらは終わったよ。なんとか死人も出さずに済んだ。リックさんが救援に駆けつけてくれなかったら危なかったけどね。それで、そっちはどうなったんだい？』

それから何度かクラウドさんとメッセージのやり取りをして、一度全員、村長宅に集まるうということになりました。

私たち四人は、度重なる激戦の疲労で重い体を、引き摺るようにゆっくりと村長宅へ向かいました。ですが四人が四人とも、その疲労とは正反対に穏やかな雰囲気を感じていました。今度こそ戦いは終わったんだ、という確信に、張りつめていた空気が緩んだんだと思います。

「……………来やがったな。さっそくだが説明しちゃくれねえか？」

私たちが村長宅の前に着くと、既に他の人たちは集まっていたようでした。そして、イの一番にキリユウさんに向かって質問を投げつけるリックさん。リックさんは、どうして戦いの途中で抜け出したのか、どうして森側の門で戦ってたのか、などを矢継ぎ早に訊いてきました。

激しい戦いの忙しさで、私もネリーもチマもそのことをすっかり忘れていましたが、確かに気になることでした。

他のみなさんも話は聞いていたのか、キリユウさんが話し出すのを静かに待っていました。

「……………あの時は……………」

そうして話し始めたキリユウさん。

初めて違和感を感じたのは、村長さんに会いに行く前。エウリア村に着く前に戦った《ロウア ゴ布林》が、最初の一匹以降出てこなかったことに。次に対策会議でいろんな人の話を聞いて再び違和感を感じたこと。ずっと感じていたそれが戦いの最中にとある推測に変わったこと。今までの戦いを見て、敵が二十匹を切ったあの状況なら、私たちとリックさんPTだけでも大丈夫だと判断して確認に向かったこと。そして、その推測が当たってしまったこと。

キリユウさんの話に対する反応は人それぞれでした。

まず、疑う人。持ち場を離れてからのキリユウさんの戦いを知っているのは、私、ネリー、チマのキリユウさんと最初からいた三人しかいません。本当に戦っていたのか、逃げたのではないか、と疑問をぶつけてくる人も当然いました。

ですが、一緒の持ち場で戦っていたリックさんたちは私たちに味方してくれました。

最前線……………いえ、敵の只中で戦うキリユウさんを目の当たりにし

ていたリックさんとそのPTのみなさん。戦いの最中に「逃げたんじゃないか？」と言っていた人も、どういう心変わりをしてくれたのか、キリュウさんの弁護をしてくれていました。

クラウドさんたちは、リックさんたちに加勢してもらったという恩があったためか、それ以上の追及はしてきませんでした。

それでキリュウさんについての話は一旦落ち着きを見せ、話の流れでクラウドさんたちの担当した、私たちが見ていない、反対側の門での戦いの話になりました。

「でもさ、まさか《あの人》が活躍してたつてのは意外だったよなー」

「え？ あ、ああ、うん。そうだね……」

窓の外を見ていたネリーが、いきなり話しかけてきました。

話しかけてきたことに驚いたわけではありませんが、私が今まさに回想しようとしていたことを言われたことに、少し驚きました。こつういふ何でもない場面で同じことを考える。そんなときに、この子と私はやっぱり双子なのかな、ということを考えてしまいます。

「……確かに、あのときのことを考えると、まさかあの《ジョースト》さんが活躍してたのにはびっくりしたよね」

そう。私たちが戦っていた場所とは違う場所でも、激戦は繰り広げられていたんです。

クラウドさんのPTとジョーストさんのPTが担当した門での戦い。この二つのPTメンバーのほとんどが盾剣士だということをも有効に使って、防御を固めたの陣形により、時間はかかるけど確実に

敵を削る戦法をとっていたようです。

そこで最も奮戦していたのが、あのジョーストさんと、共に戦ったという方々は言っていました。ジョーストさんはまさに鬼気迫る勢いで、常に前線を支えていたそうです。一緒に戦ったクラウドさん曰く。

「……彼はきつと、人一倍仲間の安全のことを考えているんだと思うよ。戦いの最中じゃ、ずっと周りに声をかけ続けて、みんなに気を配っていたんだ。……あれを、あの必死さを見ちゃうとね、村長宅で彼が叫んだのは、実は仲間に危険が及ぶことを必死に避けようとしていた……という風にも思えてきちゃうんだよね」

私はこのとき、ちらりとジョーストさんの方を見ました。

みなさんが戦いについて各々話し合っている中、ジョーストさんは村長宅の壁に、黙して寄りかかっています。……ですが、人を寄せ付けない、という雰囲気とは裏腹に、彼の周りには、彼の仲間たちの姿がありました。

「……あ。レイア、それ」

話の途中で、ネリーが私を見て小さく声を上げました。その視線は、私の顔、ではなくその少し下に向けられていました。

「……これ？」

「うん。まだ着けてたんだ。……気に入ったの？」

「……うん。なんとなくね」

私もいつも、ネリーとほぼ一緒の寝巻姿です。装備を全部解除しただけの格好。ですが今日だけは、私の首元には、如何にも手作り感の漂うネックレスが着けられていました。

「まあ、気持ちはわかるよ。だって……」

「……私たちが、今日頑張ったっていう《証》……だからね」

私は、このネックレスを貰ったときのことを思い返しました。

「なんとお礼を申し上げればよいのか……。冒険者の方々、本当に有難うございました。お陰様でこの村は救われました」

NPCである村長さんのその言葉の直後、視界にクエスト達成の文字が浮かび上がりました。

そして

「おお!？」

「キタキター!」

「苦労した甲斐あったぜえ!」

「おめ!」

「おめめ!」

「うおっしゃらー!!」

私たちの居る村長宅の広いリビングが、目も眩むほどの金色の光に包まれ、何処からともなく耳が痛くなるほどの盛大なファンファーレが聞こえてきました。

「やたー！ レベルアップだよっ！」

「あたしも上がったッス！」

「うんっ。私も」

ネリーやチマガの弾んだ声が聞こえます。……いえ、それは私の声もでした。

クエストを達成したことで、参加者の私たち全員にボーナス経験値が加算されました。それはモンスターを倒した時に発生する経験値や、普段しているクエストのボーナス経験値とは量がケタ違いで、私たちを含めたこの場に居るほとんどのプレイヤーがレベルアップしたみたいでした。そのため、効果音であるファンファーレと共に多くのプレイヤーの体が金色に光り、部屋中が眩く輝きました。

「ささやかながら、お礼をご用意致しました。どうかお受け取り下され」

光が収まった後に村長さんがそう言うと、視界の端にアイテムステレージの更新情報が数秒浮かび上がりました。

アイテム《ヌート・アミュレット》。

私はシステムウィンドウを表示させ、自身のアイテムステレージに追加されたアイテムにカーソルを合わせました。すると別ウィンドウが立ち上がり、そのアイテムのステータスが表示されます。

形は木の実や葉っぱを加工して作ったネックレス。効果は、レベル1の毒や麻痺に対して完全耐性を持つ、というものでした。

これを手に入れたボルグさんやネルソンさんは興奮したように、「おいおい、毒だけじゃなくて麻痺もかよ！」「す、すごい！これならこの先、数層は使えるよ！」と騒いでいました。《レベル1の毒と麻痺》というものに、私たちはピンとは来なかったのですが、

SAOに詳しくそうなお二人のその様子を見る限り、このアイテムはそれほど凄いものなんだなと思いました。

恐らく全員が同時にアミュレットを装備し、自分の首元に現れたネックレスを触っていました。

「この、手作り感満載なところが、なんていうか、いいよね〜」

ヌート・アミュレットを貰ったときのことを私が思い出していると、ネリーが私の首元にあるそれに軽く触りながら言ってきました。

「うん。私はこういう素朴な感じなのが好きかな」

私がそう言うとネリーは、たははと苦笑し始めました。

「……………」

「ううん、これを貰ったあとのこと思いだしちゃって」

「……………え、ああ、アレ……………ね」

このアミュレットを貰い、村長さんの話が終わると、いきなり何も無かったかのように村長さんは、ただの《NPC》に戻っていました。先ほどネリーが言っていました、そのときは私もあまりの何も無さに拍子抜けしてしまいました。え……………これで、終わり……………？と。

「普通のゲームじゃ当たり前なんだが……………ここまでリアリティあると、逆に違和感バリバリだよなあ……………」

そのとき呟いたりリツクさんの言葉に、チマ含めた何人かが頷いていたのが、凄く印象に残りました。

それから村長宅を出た二十名ものプレイヤー。何人かは打ち上げをしたいと言っていました。流石にそれに同意する声は多くありませんでした。

普段なら騒がしいのが好きなネリーやチマも、今日に限っては早く休みたいという感情がにじみ出ているようでした。

「しつこかったよねー」

隣のネリーが、うんざりといった様子で呟きました。

多数決により今日は解散となり、みんなで宿屋に行くことになったのですが……。

「やっぱり明日は朝一で……かなあ」

「……私もそれが良いかな。明日までアレは……ね」

宿屋への道、いえ宿屋に着いてからも、私とネリー、チマは、レイド参加者のプレイヤーのみなさんから、PTの誘いやらフレンド登録やら、今後作るギルドへの誘いなどを受けました。あまり男の人と話すのに慣れていない私には、少しつらい状態ではありました。でもそのときは、キリュウさんが庇うように前に出て下さり、キリュウさんに睨まれた人たちは渋々と強引な勧誘は止めて下さいました。

私たち三人とキリュウさんがそれぞれの部屋に別れた後、キリュウさんからメッセージが届き、今後について内密に話をしました。

仲間が多い方が命の危険は下がる、それは解っていましたが、それを踏まえて、キリュウさんは私たちの意見を尊重すると言ってくれました。

結論から言うと、私たちは今のままが 私、ネリー、チマ、そしてキリュウさんがいる、四人だけの今が良いということになりました。

では次に、それをどうやってみなさんに言うか、というのが問題に上がりました。

私は男の人の前に出て話すのは自信がありませんし、それはネリーやチマにも言えます。年上の男の人ばかりな上に、その人たちの誘いを断るのですから、いくらあの二人でも尻込みしてしまうでしょう。

そして、キリュウさんも人と話すのはあまり得意じゃないそうです。一番最初に会ったときも感じましたが、あまり他の人から愛想がよく見えるお方ではないですから。でも、本当は表情に出ないだけ、というのが最近解って来た気がします。

と話は変わりましたが、どうしようかみんなで悩んでいるとき、チマが「なら黙って居なくなれば良いんじゃないツスか？」と発言しました。それはどうなんだろうとは思いましたが、他に良い考えも浮かばず、結局は明日の早朝、誰も起きてこないうちにこの村を出て行こうということになりました。

でも、流石にそれでは後<sup>のち</sup>にしこりを残すだろうと、各PTのリーダーだけに、キリュウさんの方から話をしておくということになりました。

「キリュウさん、ちゃんと伝えてくれたかな？」

「……大丈夫だと、思うよ？ それにクラウドさん、リックさん、ジョーストさんは、強引な勧誘を止めようとしてくれてた側だったし」

そう。それもあって、この三人だけには事情を説明しておこうと

いうことになったんです。

私たちが居なくなつたあと、みなさんに説明する役を押し付けるのは忍びないとは思いましたが……。

「……………この村」

「え？」

「いろいろあつたねー」

疲れている。けれども充実してもいる。そんな横顔で、ネリーは言いました。

「うん。あつたね……………」

「あつたツスね〜」

「えっ……………」

「チマ！ 寝てたんじゃないの!?!」

「横になってただけツスよ〜。さっきまで言葉を喋るのもダルかつたツスから」

いきなり横に現れたチマ。言葉通り、動くのも億劫そうな顔です。

「でも、この村で起こつた中で一番の出来事と言えば、ズバリ

……………」

「一番？」

「なんの?」

チマは得意そうな顔で、私たちに向けて言いました。

「ズバリ！ キリユウさんが…………… 《笑つたこと》 ツス!」  
「ツ!」

チマの言ったことは、確かにこのエウリア村での出来事で、一番  
かもしれない。そう私は思ってしまった。

『……………三人とも……………お疲れ様……………』

あのときの、キリュウさんの台詞、キリュウさんの表情は、忘れ  
たくても忘れられないものだと思います。何に驚いたかって、恐ら  
く初めて 私たちがキリュウさんと出会ってから今日までの約一  
週間で、初めて見た《キリュウさんの笑顔》でした。

それは、満面の笑顔というものではなかったですが、微かに、で  
すが確かに、キリュウさんは笑っていました。少なくとも、私たち  
三人には笑っているように見えただけです。

「また、見たいね」

「……………うん」

「そっツスねえ」

きっと、これからも四人で冒険を続けて行けば、その機会は何度  
もあるでしょう。

そうあることを祈って、私たちは窓の外の風景をしばらく見てい  
ました。

その翌日。正確には寝たのは目を跨いだあとなので、数時間後と  
いうことになりましたが。

私たちは、宿屋の前にいました。

「……………しっかし残念だなあ、オイ」

身長の高いリックさんが、私たち四人を見下ろしながら呟きました。  
それに同意するようにクラウドさんが苦笑しながらそれに頷きます。

「確かにね。キミたちが仲間になってくれれば、このほど心強いものは無いんだけど」

「……………申し訳ありません」

「ああ、いや。都合の良いことを言ってるのは解ってるからね。駄目なら駄目で仕方ないさ」

キリュウさんが謝罪すると、クラウドさんは慌てた様子で言葉を続けました。

「ま、昨日の様子を見た限りじゃこれが無難だったかもな。あいつらのことは任せとけよ」

リックさんが軽く自分の胸を叩きました。あいつら、というのは私たちを勧誘しようとしていた人たちのことでしょう。

時刻は、まだ朝の六時。

この場には、私たち四人と、クラウドさん、リックさん、そしてジョーストさんしかいませんでした。三人は、私たちの見送りをしてくれると言ってくださいました。

その他の人たちは、まだベッドの中だそうです。昨日、私たちの話合いが終わったあと、キリュウさんはメッセージで三人を呼び出し、早朝に村を出ることを話したそうです。リックさんとクラウドさんは「残念だ」と言いながらも、ジョーストさんは特に何も言わず、私たちの案に賛成してくれました。まだ六時なら誰も起きて来ない、そう教えてくれたのもこの三人です。

「……では、そろそろ俺たちは出発します」

システムウィンドウを開いて時刻を見たのか、キリュウさんが切り出しました。

「……有難う御座いました」

「ありがとうございます！」

「……ありがとうございます」

「ありがとうございます！ツス！」

キリュウさんに続き、色々と骨を折って下さったことに、私たちはお礼を言いました。

「いって礼は。まあ、また会ったときは、よろしくな」

「そうだね。また会ったらよろしく」

「……また」

照れくさそうに言うリックさん。人の良い顔のクラウドさん。そっけなさそうに言うジョーストさん。

このSAOの世界には、一人近いプレイヤーがいると聞きました。中には、色々な性格の人がいるのですが、この村で出会ったこの三人は、確かに良い人だとはつきり言えると思います。

そんなことに幸先の良さを感じながら、私たちはリックさんと別れました。

向かうは、私たちが防衛を担当した門から続く道。次の村へと続く道です。

「……そうだ。チマ」

歩いている途中、キリュウさんはチマを呼びとめながらシステムウィンドウを呼び出しました。

「ほえ？」

「……これを、鑑定して欲しい」

「何なに？ なんですかー？」

キリュウさんがチマにトレード申請を送るのをネリーが興味津津といったふうに見ています。

「ほほう。これは……」

キリュウさんからチマにアイテムが渡されたようです。ウィンドウ上でのやり取りなので、何を渡したのかは解りません。

「……昨日、言うのを忘れたが、恐らくあの一匹だけ違うゴブリンから手に入れたものだと思う」

チマは《鑑定》スキルを持っています。手に入れただけでは正体が解らないアイテムというものもあるので、チマのスキルは私たちも重宝しています。

「鑑定結果、出たツスよ」

チマは、そのアイテムをオブジェクト化させ、さらにアイテムのステータスウィンドウを私たちに見せてきました。

それは、《鞭》……でした。

カテゴリ《ウィップ/ワンハンド》、固有名《リブリサージ》。

キリユウさんの倒した、あの一匹だけ異色を放っていたゴブリンが持っていた鞭です。

「しっかし、この鞭も武器なんスねー。『ホッホッホ、女王様とお呼びイ』ツスねっ」

「あはは、は……」

「……？」

チマはたまに、真面目な顔して変なことを言います。そんなチマにネリーは乾いた笑いを浮かべ、キリユウさんはチマの言ったことを理解出来て無かったのか、首を傾げてました。

「コレ……どうする？」

ネリーがチマの持った鞭を指差して言うてきました。

「……レイア」

「は、はい？」

不意に、キリユウさんが私の名前を呼びました。

「……これを、使ってみないか？」

「え……この鞭を、ですか？」

少し、混乱しました。いきなりということもありましたが、何故私なのか、何故鞭なのか、と。

「……ああ。確かお前は、特に使ってみたい武器はないと言ってたな？」

「は、はい。そうですけど……」

未だ躊躇っている私に、キリユウさんは私だけに聞こえるような小さい声で呟いてきました。

「……………ルネリーもチマも、良くも悪くも前しか見ていない。だから、お前には支えて欲しい。二人の、背中を……………」

キリユウさんはもともと口数が少なく、あまり多くは語りませんが、それでも言いたいことは解りました。この鞭を使って、性格的にも前衛タイプな二人のサポートをして欲しい。そう言う事なんだと思います。

使い方は、一からキリユウさんが教えてくれると言って下さいましたし、それに私の性格からしても、前で戦うよりは後ろで全体を見渡せるほうが良いかもしれません。私はキリユウさんの提案に了解し、鞭を使ってみる事にしました。

とりあえずは、すぐに実戦ではなく、次の村で練習をすることに、私たちは止めていた歩みを再開しました。

「……………」

驚きと命の危機。達成感と安堵。出会いと別れ。初めての挑戦。冒険、冒険というはしゃぐネリーの気持ち、ちよっとだけ解ったよつな気がした、そんな二日間の出来事でした。

## 6・終戦の夜に想う(後書き)

大規模戦闘クエスト：<sup>レイド</sup>エウリア村防衛戦

戦績発表！

討伐総数：二百匹

### ・個人の部

一位 レイア : 討伐数 三十五匹  
二位 ルネリー : 討伐数 三十二匹  
三位 チマ : 討伐数 三十匹

十二位 キリュウ : 討伐数 八匹(内、指揮官討伐ボーナス有り)

最下位 ネルソン : 討伐数 一匹

### ・PTの部

一位 キリュウPT : 討伐数 一〇五匹  
二位 ジョーストPT : 討伐数 三十七匹  
三位 クラウドPT : 討伐数 三十四匹  
四位 リックPT : 討伐数 二十八匹



## 7・突然な出会い（前書き）

お待たせしました。原作キャラクター登場。しかし、知らない人は知らないかも。

ルネリー視点です。

## 7・突然な出会い

「セツ、ヤアッ！」

あたしの放った剣技が、ソードスキル獣頭の亜人型モンスター《ルインコボルド・トルーパー》の体に、淡い水色に光輝く×字の軌跡が刻み付けられる。

片手用直剣二連撃技《エクス・スラント》。

《スモール・ソード》から《アイアン・ソード》へと武器をクラスチェンジして攻撃力の増したあたしのソードスキルにより、コボルトのHPは一気にその九割が無くなる。攻撃を受けて体を仰け反らせるコボルトと同時に、あたしの体もスキルの強制技後硬直により一瞬だけ動けなくなる。

「……レイア」

「はいっ」

後ろで指示を出すキリユウさんの声にレイアが応える。直後、背後からあたしを回り込むようにして閃光が走り、仰け反っているコボルトの横っ面にバシィーン！！ という効果音と共にそれが当たった。

鞭スキル基本単発技《アンジレイト》。

《鞭スキル》は、攻撃力は他の武器のソードスキルに劣るけど、その分、攻撃を与えた時に敵を一時行動不能化状態にし易いという特殊効果を持っている……らしい。

既に一割しかなかったコボルトのHPバーが全て無くなり、攻撃を受けた仰け反りポーズのまま硬直後、パライーンと爆発。キラキラと光るポリゴンを撒き散らしながら次第に薄れて消えていった。

「うんっ。今のけっこう、イイ感じじゃなかった？」

硬直が解けたあたしは、剣を鞘に収めながら後ろのレイアに振り返って言った。

この前のレイドクエストで手に入れた鞭の扱いに、レイアがようやく少し慣れてきたのだ。だから今日は、未だ慣れない鞭との連携の練度を上げるために、あたしがメイン壁<sup>タンク</sup>、レイアが支援<sup>サポート</sup>で、キリユウさんとチマがあたしたちを見守りつつ、危なくなったら加勢するという布陣で戦闘を行っていた。

「そうかな？ ……うん。ちょっとだけ、自信は付いたと思う」

レイアが、その流れるような銀色の長髪を左手の指で耳にかけながら首を傾げて言った。四日前に寄った村で装備を変えて、今は細身の体にクリーム色のレザーチュニックとレザーパンツを纏い、膝近くまであるレザーブーツを履いて薄地のレザーブレストを上から着込んでいる。そして、薄手のレザーグローブを装備した右手には《赤い鞭》。先日のレイドでのドロップ装備、《リベルサージ》を持っていた。

「……そうだな。二人での連携はもういいだろう。……今度はチマも戦線に加わってくれ。三人での連携を試す」

「りょーかいッス」

「はい」

「わっかりましたっ」

キリユウさんの言葉に応えるあたしたち三人の声が、此処、《第一層迷宮区》の薄暗い通路に響いた。

《エウリア村》での、あの《大規模戦闘クエスト》から六日が経った。あたしたちが《S A O》の仮想世界ソードアート・オンラインに囚われてから十三日が過ぎたことになる。

今から四日前、あたしたちはやっとのことで浮遊城《アインクラッド》の第一層迷宮区に到着した。そして、その翌日から今日までの三日間、迷宮区最寄の町である《ツールバーナ》を拠点として、朝から夕方まで迷宮区の探索をしていた。

四日前に初めて見た迷宮区。ゴツゴツとした大きな岩が積み重なって出来た、遙か上空の二層の底面にまで伸びている黒々とした巨塔。獣の巣穴のような大きな入口を進むと、最低限整った石敷きの通路やレンガの壁、松明など、次第に人の手が入ったような造りになってくる。どっちかというと、元々人が使ってたけど、モンスターが住むようになって廃れた……という感じだ。所々にある骨や崩れた石壁が、いかにもモンスターが住み着いちゃってますよーと言わんばかりだ。

この迷宮区には、コボルトやゴブリンといったデミヒューマン亜人型や、狼や大きな鼠といった獣型のモンスターが出現する。逆に植物型のモンスターは見かけない。流石にこんな日光の届かない場所には植物型は居ないのかもしれない。

「……少し早いけど、今日はこのぐらいにしておくか」

システムウィンドウを呼び出して見ていたキリユウさんがそう言った。あたしとチマが交代で敵のタゲを取り、あたしたち二人の背後にいるレイアの鞭による中距離支援を受けるといふ連携に、かなり慣れた頃だった。

「え、もうですか？」

あたしはキリユウさんに聞き返しながら、自分もシステムウィンドウを開いて時刻表示を見た。今の時刻は十四時二十二分と、いつもの撤収時間より一時間以上早い。昨日、一昨日は確か十六時過ぎまで潜っていたと思う。

「いつもよりも早いですね」

あたしと同じことを思ったのか、レイアも口に出した。

あの過酷なレイドクエストを経験したあたしたちは、今やちょっとやそつとの事では疲れなくなってきた。

此処SAOでは、体力的な疲労というものは無い。つまりは、やろうと思えば何日でも寝ずに動き続けることが出来るし、戦い続けることが出来る。

仮想世界の、実体の無い体なのだから当然かもしれないが、それでも実際にするのは並大抵のことじゃない。実際に日を跨ぐほど動き続けるには、襲い掛かる睡眠欲求や食欲を抑えこむ強靱な精神力が必要となる。

流石にあたしたちもそこまでではないけど、朝の七時から夕方十七時頃まで迷宮区に籠っている程度では、全然問題は無いようになっていた。

「……そろそろアイテムストレージの空きが無くなる。お前達はどうだ？」

「え？ えーと……」

キリユウさんに言われて、あたしたち三人は自身のアイテムストレージウィンドウを開いて見た。

わ……もういっぱいだった。

ストレージの中は、その三分の一を食べ物やポーション、野営用

の生活必需品で、残りの三分の二を迷宮区のモンスタードロップで埋め尽くされていた。もう少しで許容重量を超えてしまう。そうしたら動きが鈍くなるし、こんなモンスターの巣窟ではすっごく危険になるかもしれない。まあ、かと言って、せっかくのアイテムを捨てるというのもなんかアレだし……。

あたしたちはキリュウさんの言葉の意味を理解し、帰還することに同意した。

「……では、いつも通り俺が先頭を歩く。今日はルネリー、しんがり殿を頼む」

「あ、はい！ わかりましたっ」

キリュウさんの言葉に挙手して応える。

PTの殿を勤めると言っても、別に先頭のキリュウさんと何十メートルも離れるわけでもないし、キリュウさんの索敵の熟練度も上がり、死角の減った今となつては、特に危険ということもないので、気負わずに勤めることが出来る。

そもそも、キリュウさんは事ある毎に後ろを見たりして、あたしたちのことを気に掛けてくれるので、滅多なことが起こったことはぜーぜん無い。

あたしたちは、四人がギリギリ横に並べるくらいの幅の迷宮区の通路を、キリュウさん、チマ、レイア、あたしの順に列になって歩き出した。

「でも、三日目にしてようやく十六階かぁ。あと何階で最上階だろ？」

モンスターを蹴散らしつつ八階にまで降りてきたあたしたち。ふと思いついたことを、あたしは独り言のように呟いた。

「外から見た限りでは結構高い塔だったよね。二層の底まで届いてたし……」

「……確か、各層間の距離は百メートルという話だったな」

「えっ……ってことは、十六階ってまだまだ全然ってことツスか!？」

各層から次層の底面までが百メートル。第一層迷宮区は、第二層の底にまで届く巨大な塔。つまりはえーと………うわーんっ、最上階まで何階あるの!？」

あたしとチマの肩が同時にガクツと下がる。それはあたしたちのモチベーションを示していた。

「……それについても、情報を集めた方が良いな。流石に三十階近くもあつたら、ポジションもそうだが、武器の耐久値も持たないかもしれない」

先頭を歩くキリュウさんが、周囲を警戒しながらそう呟く。あたしたち三人は、それに「はいっ」と同時に応えた。

それから数十分後、迷宮区を無事に抜けたあたしたちは、もう四十五分ほど、両脇を木々で覆われた幅広の道を歩いて、現在あたしたちが拠点としている迷宮区最寄の町、《トールバーナ》に到着した。

トールバーナは、巨大な風車台が立ち並ぶのどかな谷あいの町で、これまで寄って来たエウリア村やメダイの村よりは格段に広い。北

門を通って大通りを進むと、大きな噴水のある中央広場に着く。あたしたちは、この中央広場に面する宿屋に泊まっていた。

「あ、そだそだ。誰か、ドロ装備出た人いるツスか？ あつしが鑑定しちゃうツスよー」

時刻は十六時二分。まだ外も暗くないので、宿屋ではなく、中央広場にある軽食屋のカフェテラスのようなテーブル席に座って、本日 の戦利品について確認しているとき、チマが手を挙げながら言ってきた。

「私は……………今日は素材だけみたい」

「うゝん……………あつ、あたし一つある。お願い」

「ほいほいゝツス。どれどれ……………」

あたしはアイテムストレージに入っていた正体不明の防具をチマに渡した。チマの持つスキル、《鑑定》は冒険には結構重要だった。モンスターの落とす素材以外のアイテムは全て、鑑定をしなければ使えないし装備も出来ない。更にフィールド上でも色々な食材アイテムなどを拾ったりも出来るけど、鑑定をすると実は毒だった、ということもあった。鍛冶屋や道具屋で鑑定をしてくれるNPCも居るらしいけど、プレイヤーに比べ成功率が低く、また有料だという。身内に鑑定スキルを持つ人が居るのは本当に便利だ。チマもチマで、鑑定するのが面白いらしく、色々なものに鑑定をかけているので、ぐんぐん熟練度は上がっているみたいだった。

「……………ふむ。こんなに出ましたゝツス」

カテゴリ《軽装備ノ革》、固有名《ハードレザーブレスト》。

あたしたちに向けて、そのアイテムのステータスウィンドウを見

せてくるチマ。

「え〜と……あ、今あたしが装備してるの方が性能良いっばいよー。チマは？」

「今わたしが装備してるのと同じやつスね、コレ。レイアとキリユウさんは装備の系統が違うツスし……コレは売りツスね」

レイアはもっと軽めの装備が個人的に良いらしく、キリユウさんも鎧系は動き辛そうだから嫌らしい。逆にあたしとチマは、軽装の鎧系防具を主としている。まあ流石に重装備みたいなゴツゴツしたのは嫌なんだけどね。

「キリユウさんはありますか？」

「……ああ、剣が一つ」

そう言っただけでチマにそれを渡すキリユウさん。

見た目は片手用の直剣。柄は毛皮を巻いてあるのかもふもふしていて、刀身は鉄ではなく、骨を削ったような感じだった。

目の悪い人みたいにチマが眉を寄せ、目を細めてそれを睨む。

「むむむ〜む。……こ、これは!？」

芝居がかった様子で驚くチマ。直後、その片手剣を掲げながら言い放った。

「てれれてってれ〜、カテゴリ《ロングソード/ワンハンド》、固有名《タスクブレード》」

「おお〜」

「店売りの剣より少しだけ耐久値が低いツスけど、全体的な性能はこっちの方が高いみたいツスね」

チマが言い終わった瞬間、あたしのチマの視線が交差し、キラんと光る。現在、片手剣を装備しているのは、この四人の中じゃあたしとチマだけだ。つまり

「じゃーん、けーん……っ」

あたしたちPTで定めた約束事の一つ。ドロップで欲しい装備があつたら、恨みつこなしの強制じゃんけん勝負。昨日はモンスタードロップで出たイイ感じのショートブーツをレイアも入れた三人で勝負して、チマに負けてしまった。今回はぜえ〜つたいに勝ちたいっ。

「……ぽいっいッスー!!」

気合を入れたチマの掛け声と同時に出したあたしたちの手。その勝敗は……。

「やったー！ 勝った〜!! ぶいっ！」

「がーん……ッス……」

パー対チヨキで、見事、あたしの勝利イ!! キリユウさんとレイアの生暖かい視線を感じるけど気にしない! ガツクリと地面に手と膝を付いて頭をたれているチマの姿が、またまたあたしの気分を良くさせたのだった。

そんなこんなで、アイテム論評会一(?)が終わった。装備に関

してはこんな感じだけど、基本的に身内なので、どのアイテムは誰の、というのはあたしたちには無い。お金も、個人個人で一応持つてはいるけど、お店とかで誰かが欲しいのがあって、手持ちの金額が足らなかつたらみんなで出し合ったりするし、ほとんど共通財産みたいになっていた。

「……よっし。じゃあ、アイテム売りに行こっか？」

システムウインドウを閉じたあたしは、テーブルに手をつきながら立ち上がってみんなに言った。

そのとき

「ほーウ。もう、こんなところまで来ているプレイヤーが居たとはネ」

あたしの背後から、語尾に変なイントネーションを乗せた女性らしき声が聞こえた。未だ座っていたあたし以外の三人がその声の方を見る。あたしもそれに続いて後ろを見た。

「……………へ？」

そこに立っていたのは、藍色の布服上下に革製の胸鎧とシヨートブーツを纏い、腰に金属製の爪っばい武器と投げ針という装備、短めの金褐色の巻き毛という髪型の 両のほっぺに三本ずつの《おヒゲ》を書いた、小さい女の子だった。

「……………ね、ネズミ……………さん？」

目の前の女の子を見た第一印象を思わずあたしが呟くと、その女の子はニタアという笑みを浮かべて人差し指を立てた。

「せえ〜か〜いつ……ダヨ。お嬢ちゃん」  
「う……」

小悪魔、という言葉が似合いそうな笑顔に、あたしは少し固まった。

「はじめまして。オイラの名はアルゴ。巷<sup>ちまた</sup>じゃ《鼠のアルゴ》って呼ばれてル。……このSAOでは《情報屋》をしてるんだ。よろしくナ〜」

アルゴと名乗った女の子。あどけない顔で、あたしたちより身長は小さいんだけど、何処か年上を思わせる雰囲気纏っている。可愛いんだけど、抱きしめるのを躊躇ってしまうような空気……そんな感じかな。

「……情報屋、さん……ですか？」

首を傾げながらレイアが、その女の子に訊いた。

「そう！ お金さえ貰えればどんな情報でも売るシ、調べル！ ただ見ぬフィールドの特徴、そこに湧出<sup>POP</sup>するモンスターの攻撃パターンやら弱点やらの詳細な情報！ 欲しいアイテムをドロップするモンスターが居る場所やそいつが落とす確率！ その他諸々！ これらの情報を他に先駆けて調べ、《商品》としてプレイヤーたちに売るのが……このオイラのような、《情報屋》という訳なんだ」

女の子は、その小さい体を目一杯反らしながら言ってきた。

「ほへー」

「……は、はあ」

「な、なるほどッス」

呆気に取られたような相槌を打つあたしたち三人。

でも、なるほど。常にキリュウさんも言ってるけど、情報というものはかなり重要だ。まったく知らないモンスターと、攻撃方法や弱点が解っているモンスターとでは、戦うときの危険度はまるで違う。お金を払ってでも買う価値はあるのかもしれない。

でもそんなことより、あたしには気になって気になって仕方のないことがあった。

「あ、あのっ。……その《おヒゲ》って……？」

アルゴさんに両のほっぺに二本ずつあるおヒゲのペイント。さっき自分で《鼠のアルゴ》って名乗ってたけど、もしかしてキャラ作り？

「ああ、コレ？ にゃはハ、悪いけどその理由は話せないナ。どうしてもというなら考えないでもないけど……」

そう言っただけでアルゴさんは親指と人差し指で作ったわっかを見せてくる。

あたしはそれに、あはは、と乾いた笑いしか返せなかった。

「……で、その情報屋が、俺たちに何か用か？」

キリュウさんが不意に口を開いた。そうするとアルゴさんは、に

ひひと笑いながら隣の丸テーブルの席へと座って此方を向いた。そして、一人だけ立っているような状態になっていたことに気づいた。あたしは、そそくさと再び席に座った。

「キミたちは知ってるか？ この町に一番最初に来たプレイヤーが……実はキミたちだった、ってこと二」

いきなり、アルゴさんがそんなことを言った。

確かにこの町や、迷宮区ではまだ他のプレイヤーは見たことはなかったけど、あたしたちが一番乗りだってことは知らなかった。

「……その様子じゃ知らないみたいだね。こつちも驚いたヨ。予想じゃ、ここにプレイヤーたちが来るのは、まだ一週間以上先だと思つてたからネー」

「え……何でそんなに遅いんスカ？ つか、ホントにわたしらが一番乗りなんスカ？ というか、えーと、アルゴさん？ は実際に今、此処に来てるじゃないツスカ？」

矢継ぎ早に聞き返すチマ。でも言いたいことはあたしも同じだ。だけどアルゴさんは、余裕な笑みを浮かべながらチマに手の平を向けて制する。

「まあまあ。興奮しなさんナ。……出来ればまずは、コチラの質問に答えてもらえるかナ？」

「……交換条件、ということか」

腕を組みながらキリュウさんが言う。

「そーゆーコト！ こちとら情報屋だからナ。タダでぺらぺらと話すわけにもいかないんだヨ。……とはいえ、キミら情報屋は初めて

みたいだし、初回ということ、こっちの質問に答えてくれれば、さっきの疑問にも答えてあげるヨ。……どうだい？」

あたしとレイア、チマは顔を見合わせると、同時にキリュウさんの方を見た。此処はリーダーさんの意見に従おう。

「……………解った。そちらの質問を聞こう」

数秒間、考えるようなそぶりの後、キリュウさんはそう言った。

それを聞いたアルゴさんは、さっきみたいなニタアというような笑いじゃなく、パアアと花が咲くような可愛い笑顔を見せた。

くうっ、あつぶなあ。無意識にハグしようとしちゃったよ……。

鋼鉄の意志で己を自制したのは、見る限りきつとあたしだけじゃない。

「ではでハ、さっそく質問ダ……………」

アルゴさんが訊いてきたのは、あたしたちの名前から始まって、《はじまりの街》から此処まであたしたちが旅してきた道順。現在のあたしたちのレベルと装備。第一層迷宮区の攻略階層と、そのマップデータ。そして、これまで出会ったプレイヤーのことなんかを質問された。

「……………ふーむ、なるほどなるほどー。にやハハ、まさかそう来るとはネー」

あたしたちの話をずっとにやけながら聞いているアルゴさん。特にエウリア村でのレイドクエストや、そこで手に入れたレイアの鞭に興味深々みたいだった。

あたしたちの話が終わると、アルゴさんは目を瞑ってぶつぶつと数秒間、何かを呟いていたかと思うと、いきなり目を開けて、こちらに笑いかけてきた。

「……………解ったヨ、ありがとウ。んじゃ、今度はこっちの番だナ」

あたしたちにお礼を言ったアルゴさんは、先ほどチマの言ったことについて話し始めた。

「えーとネ…………今、このSAOでのトッププレイヤーと呼ばれる者たちは、自己のパワーアップを重点的に行っている。来るべき《ボス戦》に備えて…………ネ。それはレベル上げだけではなく、自身の装備の充実なども含まれる。強い武器を落とすMOBや、貰えるクエで装備を整える。そしてそれらを強化するための素材アイテムの収集。そんなことをしているんだ。……………だけど、正直そういう奴らは一万というプレイヤーの中でも、ホンの一握りサ。ほとんどのプレイヤーは、未だ《現実世界からの救出》という望みを捨てられず、はじまりの街に籠っているみたいだネ。まあでも、遠くないうちに引き籠もっている奴らも気付くと思うヨ。……………戦うしか、自分たちに道は無いってことに、サ。まあ、最近結構はじまりの街から出るプレイヤーも出てきたみたいだけどね。あくまで出て戦うだけで、他の村には行ってないみたいだけど。だからそれらを考えた結果、ボス戦に望めるだろう戦力が此処、迷宮区最寄の町に揃うのは、オイラの予想ではまだあと一週間以上先だった、ってことなのサ」

アルゴさんが言うには、レベル上げには、それに適した場所が第一層の各地にあるらしく、あたしたちみたいに戦うことを決めたプレイヤーは、各々の場所で経験地稼ぎをしているらしい。だけど、その殆どは安全に、かつ十分な経験地を稼げる場所、つまりは《ソ

ロプレイヤー』というたった一人で戦う人たちとしての狩場らしく、PTでの狩場とはまた違うらしい。

つまり、今現在トッププレイヤーと言われる人たちの大半がソロプレイヤーらしく、しかもその数は少ない。

迷宮区の最上階にいるというボスは、相当強いらしく、1PTだけじゃまともに戦うことも出来ないという。犠牲無しに戦おうとするならば、1PT六人を八つ束ねた計四十八人からなる最大連結PT<sup>レイテ</sup>が、更に二つ出来るくらいの戦力を揃える必要があるという。

だけど、今は戦う気になっているプレイヤー自体少ない。つまりは、ボス戦が出来るくらいの戦力が集まるのはまだまだ先。そして、それはソロプレイヤーたちも解っているらしい。

だからこそ、今は少しでも自分が死ぬ可能性を減らすため、攻略よりも、レベル上げや装備の充実に専念しているそうなのだ。

「……………ボスとは、そこまで強いのか？」

アルゴさんの話を黙って聞いていたキリュウさんが口を開いた。

「これ以上の情報はお金をとるヨー……………と、言いたいところけど、この程度はミンナ知ってることだしナ。いいヨ、教えてやるウ……………というか、キミらホントーに初心者<sup>ビギナー</sup>だったんだナ。そうかなとは思ってたけど……………正直、一番最初に此処に辿り着けたというのは信じられないヨ」

苦笑しながら肩をすくめるアルゴさん。うーん。あたしたちだって、未だに一番乗りってというのは信じられない。

「そう……………なんですか？ 私たちは至って普通に此処まで来たんですけど……………」

「まあ、来る途中で起こったことは普通とは言えなかったツスけど

ね」

「エウリア村での《大規模戦闘クエスト》……力。確かにこのSAOでもレイドクエはあるにはアル。だけど、第一層時点で既にあるなんてこと、オイラでも知らなかったヨ。キミら、ホントーに運が良いヨ？ レイドって、その殆どが無理クエで、犠牲無しには普通は達成出来ないんだからネ」

おちゃらけたような言い方、でもアルゴさんの目は笑っていなかった。

「まあ、貴重な情報も貰ったシ？ 何よりビギナーさんには優しくがモットーのアルゴさんだからネ。色々アドバイスするのはやぶさかではないヨー」

「……」

キリユウさんが、アルゴさんを無表情で見つめる。しかし、当のアルゴさんは何処行く風で話を続けた。

「さっきの質問だけどネ。基本的にミンナが知っているSAOの情報ってのは、《ベータテスト時代のもの》なのサ。それが正式サーバーになって何処まで変わっているかは解らないガ……ベータテストでは、ボスにはレイドPT二つで当たるのが相場だと聞いた。犠牲無しにしたいのならネ」

あれ？ 今なんか変なイントネーションが入ったような……？

まあ、アルゴさんの話し方は元々、語尾に変なイントネーションは入ってるけど。

「……なるほど。では、戦力が集まるまで此処で足止め、というところか？」

「そういうことに、なるんだろうナー。……………にひ。そ・こ・デ  
！ オイラからキミたちに提案だ」  
「？」

突然、立ち上がってあたしたちを見下ろすアルゴさん。…………でも、  
元々が小さいから視線は殆ど変わらないけど。

「さつきも言ったとおり、戦力が集まるのはまだまだ先ダ。だから  
キミたちも、それまでにボス戦に向けてレベル上げや装備を整える  
べきじゃないカ？」

両手を広げて訴えるように言うアルゴさん。確かに、時間がある  
ならそうした方が良くのかもしれない。

「…………で？」  
「うん？」

キリユウさんが、鋭く睨みながらアルゴさんに問いかける。

「…………提案、と言うからにはそれだけではないのだろう？」

そう言ったキリユウさんの言葉に、あたしたちは息を呑み、アル  
ゴさんはニヤリと笑った。

「につひつと、話が早いネ。そうでなくチャ…………それで、提案とい  
うのはネ……………」

その翌日の早朝、あたしたちはトルバーナの町を後にあとしていた。ただ、迷宮区に行くわけではない。

「いまさら……なんスけど、あのアルゴって人の話、ホントに信じてもいいんスかね？」

トルバーナから東へ向かう街道を歩いているとき、あたしの左隣りにいるチマが話しかけてきた。

「確かにあやしい感じの人だったけど……ウソは言っていなかったと思うよ？ まあ、ただの勘なんだけど……」

「……そう、だね。私もネリーと同じ意見かな」

あたしの答えに、右隣を歩いているレイアも同意してくれる。

「……アルゴの言っていたことは、だいたい筋が通っている。あの町にまだ誰も来なかった理由も、あの《提案》も……尤も、チマが不安に思うのも仕方のないことだろう。まあ、俺とて一から十まで、彼女の言い分全てを信じた訳ではない」

いつも通りあたしたちの前を歩くキリュウさんが、前を向いたままそう言った。

あのとき、アルゴさんがあたしたちに提案した内容は、タダで情報を教える代わりに、その情報が正しいかどうかを調べて欲しい、というものだった。

「……オイラの持っているSAOの情報の多くも、ベータテスト時のものがほとんどなんだ。だけど、もしかしたら《それら》は、ベータテスト時と正式サービス時では、変更点や差異があるかもしれない。これでも誇りある情報屋としては、そんな不確定な

情報を《商品》として扱うことはなるたけしたくない。……そこで、キミたちに協力して欲しいことがある。他の者に先行してキミたちに様々な情報をタダで教える代わりに、その情報が正しいか、もしくは何処がどう違うのかなどを調べて貰いたいのだ！」

昨日の、アルゴさんの言葉を思い出す。芝居がかったような口調で、胡散臭さは爆発してたけど、何故かあたしはその言葉を疑う気はしなかった。

「それに、もう貰うものは貰っちゃってるしね。後には引けぬ、ってやつだよ」

そう言ったあたしの手には、一冊の冊子があった。

《エリア別攻略本》。詳細な地形から出現モンスター、ドロップアイテム、クエスト解説まで網羅されているアルゴさんお手製の本らしい。ご丁寧に表紙下部にでかかど【大丈夫。アルゴの攻略本だよ。】と書いてある。これはそのエリア毎の村の道具屋に委託販売する予定のものらしい。既に95%ほど完成しているらしいけど、残りの5%の情報の調査を、あたしたちに依頼してきたのだ。

「と言っても、今までほとんど言っていないほど差異は無かったって言ってたツスよね？ わたしら、ホントに必要なんスかね？」

「……チマの言う事も解るが、この先、情報に敏い者に知り合いが居るといのは心強い。寧ろ今はあのアルゴという者が本当に信用できるのか、それを見定める期間だと思えば良い」

キリユウさんの言葉に、チマもようやくぶつくさと言つのは止め、次に行く場所のことで道中盛り上がった。

それから約二週間、あたしたちは第一層の色んな場所を回った。まだ行ったことのない村はもちろん、遺跡、洞窟など、モンスターが巣窟にも行った。

アルゴさんがくれた攻略本は良く出来ていて、たまにドロップ品やらフィールドに落ちているアイテムやらの差異はあれど、特に気になるような差でもなかった。私たちが調べ終わったエリアの攻略本は、なんとそのエリアの村の道具屋で委託販売されるらしい。

あたしたちも手伝ったものが、他の人の役に立てるのなら、それは当然気持ちが良い。

最初は文句を言っていたチマも、アルゴさんを見極めると言っていたキリュウさんも、その本の正確さや解りやすさ、そしてその本の目的を知っていくうちに、アルゴさんに対して少しは壁が無くなったような気がする。

そんなアルゴさんには、定期的に連絡をしていた。情報の確認の結果報告、更なる情報の報告。

なんていうか、ゲームとかでよくある、冒険者が依頼を受ける、っていうのを素でしているみたいだ。……まあ、ここもゲームの中なんだけどね。

そんなこんなで、あたしたちはまさしく日々を《冒険》しながら過ごしていた。

あたしたちが今居るのは《ホルンカ》という小さな村のそばの森の中。

ここ三日間、あたしたちは《森の秘薬》というクエストをしていた。内容は《リトルネペント》という歩行植物型モンスターを倒しまくって、すごい低い確率で出る《リトルネペントの胚珠》をゲットすること。なんでも強い片手剣が報酬として貰えるらしい。片手剣を使うあたしとチマは「これは手に入れなければ」と二人でそ

のクエを受けた。

でも既にこのクエの情報は出回っているらしく、数PTが同じようにそのクエを受けて、モンスターを倒しまくっていた。

二日間、モンスターの取り合いで窮屈な思いをしていたんだけど、三日目以降になって目に見えてプレイヤーが減っていた。

疑問に思ったけど、それより人が減った嬉しさの方が強かった。しかも運の良いことに、その日のうちにあたしもチマモクエストを達成することが出来た。……でも、喜ぶあたしたちに残った、突然プレイヤーが減った疑問。その疑問は、翌日にきたアルゴさんからのメッセージで解決した。

『おーい、今どこにイル？ もうボス戦、終わっちゃったヨ〜』

は？

『いや〜、すっかりキミらが居ないの忘れてたヨー。あっはっハ』

え……え、えええええ！？

その知らせを受けたあたしたちは、急いでトールバーナに向かったけど、そこにはアルゴさんの姿は無く、ボス戦を終えて一層迷宮区から出てきたプレイヤーばかりだった。

せっかくボス戦のために鍛えてきたのに……。

うーん。なんか不完全燃焼だ。

こうして、ボス戦に参加しないまま、あたしたちの第一層の冒険は終了したのだった。

ちゃんちゃん。

**EX1 鼠の思惑（前書き）**

アルゴ視点です。

## EX1・鼠の思惑

第一層迷宮区最寄の町、つまり第一層での最後の町である《トルバーナ》。

移動に次ぐ移動で、そろそろやばくなった装備を修理するため、私はこの町に立ち寄った。

正式サービス開始当日 茅場明彦による《ソードアート・オンライン》デスゲーム化宣言からもう十三日が経つ。

私を含め、利己的で自己中心的な生粋のゲーマーは、誰よりも先んじてリソースの専有化に走った。今ではかなりレベルも上がり、装備も充実していることだろう。

だけど、足りないな。

第一層のボスは、ベータテスト時代のとおりならば、斧と円型盾バックラーを持ち、腰には人の身長ほどもある湾刀タルワールを携えた巨大な亜人型デミヒューマン、《コボルトの王》。更にその周りには強力な護衛たちもいる。

奴を倒すには、誰よりも先んじて行動した現在のトッププレイヤーたちだけでは圧倒的に戦力が足りない。そして、それは彼らにも十分に解っていることだろう。

VRゲーム初心者らしい《はじまりの街》に籠っていた者たちも段々と行動を開始し初めているようだけど、そいつらがボス戦に臨めるようになるのは最低でも、まだ一週間以上先のことだと思う。私なりに、初心者には一応の援助をしてはいるけども、それでも時間かれらはそれなりに掛かると踏んでいた。

そんな考えもあり、迷宮区最寄の街であるこのトルバーナには、

まだ誰も来ていないだろうという予想をしていた。

して、いたんだけどネー……。

「あたし、ルネリーっていいですよ。こっちがレイアで、そっちがチマです。そして、この人があたしたちのリーダー、キリュウさんです」

「……よろしくお願いします」

「よろしくッス！」

「……………宜しく」

「ああ、よろしくナー」

私がトールバーナの中央広場に足を踏み入れたとき、人の声がして思わず驚いた。

この町にプレイヤーが来ていたことに対してではない。もちろんそれも多少はあるが、何よりその聞こえてきた声が、《楽しそう》だったからだ。

デスゲームとなったSAO。いつかはそんな状況にも慣れて笑える日も来るだろうとは思っていたけど、まさかこんな最前線で笑い声が聞こえるとは思ってもよらなかった。

私は興味を引かれ、声の主を探した。

それはすぐに見つかり、そして更に驚いた。何故なら四人いた彼らの中の三人は女の子だったからだ。

しかも若い。私も年の割に若く見られがちだけど、彼女らは本当に若い。恐らく中学生ぐらい。茅場晶彦により、プレイヤーの多くは現実の姿にされた。そして、SAOみたいなネットゲにいる女性プレイヤーの多くは、その大半がネカマ、つまりは男が性別を偽って

いる。

ロールプレイングゲームなのだからその行い自体に問題は無いが、姿が戻ってしまったことにより、女性プレイヤーが激減してしまったのも事実。割合としたら男女で9：1ぐらいか。

しかし彼らはどうだ。PTの内の大半が女の子。しかも若い。

黒一点である少年もこれまた若い。大学生には見えないけど、高校生ぐらいか。でも全体的に若いのは間違いない。

どうやら中央広場に面するカフェテラスで談笑しているらしい。

「……………」

その明るい雰囲気、私は惹かれた。

いきなりゲームから出られないって言われ、周りは打ちひしがれるか自己保身に走るか。

私自身、保身に走った身だけど、やっぱりときどき、無性に人恋しくもある。自己利益だけを求めるのに疲れることもある。

だから私は、その子たちに声を掛けようとした。

その雰囲気の中に、私も入りたくて。

でも、人と共にいたいという思いと一緒に、軽々と人を信じるな、とも思っていた。

入ってのは何でもアリだ。情報屋というものをやってるとよくわかる。

相反する二つの思いに、結局私は オイラは、いつもどおりにしようと思った。

「ほーウ。もう、こんなところまで来ているプレイヤーが居たとはネ」

いつもどおり、《アルゴという名の仮面》をかぶって、話しかけたんだ。

彼らの話を聞くと、どうやらこの四人は初心者ヒギナーの集まりだったみたいだ。

でもそれも納得のいく話ではある。名前、レベル、装備、それだけではなく訊いた質問にどんどん答えて行ってくれ。

ゲームゲームつてのは、たかがプレイヤーの名前ひとつ教えるだけでお金を貰えるような世界だ。

そしてそれは、コアゲーマーなら誰もが知っている。

ここまで明け透けに教えてくれるというのも、他の者から見ればバカ丸出しの行為だ。

でも私は、こう思った。

きっと、この子らは信じられないほどお人好しで、バカで…  
…そして、純真で無垢だ。

初めて会ったプレイヤーに自分の情報をさらけ出す。それがどんなに危ないことが、解っていない。

まるで子供…って、子供だったね、そういえば。

如何に自分がすれているかを自覚させる鏡のような子たちだ。

でも……。

そんな初心者のこの子たちが、こんな最前線まで来ているという事実。

しかしそんな疑問も、話を聞くうちにだんだんと解って来た。

要するに、プレイヤースキルが物凄く高いつてことか。

特に、この無表情の少年。現実リアルの実家は武術の道場をしているとか。

VRゲームは、知識や経験がなくとも、身体操作の能力がずば抜けているとそれだけでスタートラインはだいぶ違う。引きこもりのメタボなんかとは目じゃないくらいには。

この子らもきつとその類だ。

利己的なゲーマーと違い、まだゲームをゲームとして楽しむことのできる純粹さ。そして何も知らないでここまでこれるほどの高いプレイヤースキル。

私はそれを、《面白い》と思った。

私は初心者援助として、第一層各地の情報を《攻略本》という形で提供しようとしている。実際には道具屋で委託販売を考えているけど。

色々と思うところがあって、一部の者以外には《0コル》で提供する予定だ。まあ、建前は初心者援助だし。

でもその為には、ただベータテスト時代の情報を流出するだけではダメだ。SAOに限らず、今までプレイしてきたネットゲームの幾つかも、ベータと正式サービスでは細部が微妙に変わっているものもあった。つまりは、現在私が持っているベータテスト時のSAOの情報が正しいかどうかを調べなくてはならない。

今日までは何とかなった。先行したプレイヤーたちに上手く聞き出したり、手持ちの情報で交渉したり、知人から買ったりと、想像していたよりもスムーズに情報の収集や、ベータ時代との差異の補完が出来た。

だけど、これ以降は難しいだろうと思う。

理由は多々あるが、一番の理由は……。

最初に街を飛び出したプレイヤー　恐らくその殆どが《元ベータテスター》であろう者たち。彼らはその知識と経験を生かしたスタートダッシュで、多くの利を得た。しかし、それは両刃の剣であることに彼らの多くは気付かなかったのだ。

二週間ほど経った現在、解っているだけでも既に五百人以上が死んだ。

初心者たちの何人かはこう言う。

『経験者であるベータテスターが自分のことしか考えてないから、こんなに多くのプレイヤーが死んでしまったんだ！　悪いのはベータテスターだ！』

つまり、経験者が初心者の面倒を見なかったから、五百人以上も死んだ……と。

巫山戯るな……っ！！　と、そいつらに言ってやりたい。

私の調べによれば、死者の半分は、その元ベータテスターだ。

彼らには知識と経験があった。だが、同時にあるものが無かった。それは、SAOの現状を現実として受け入れる心、といったところか。

こんな状況で先走れる奴らだ。しかも経験者。

そんな奴らが、「このゲームで死んだら本当に死にます」と言われて、それを現実的に考えることなんて出来るのか？　ベータテスター全員が、一度以上このゲームで死んで、《生き返って》いる。

死ねばまた生き返れる。無意識に死ぬことに関して緩くなってしまうのも無理は無い。

私も、少し前まではそうだった。実際に人が目の前で死に、そして生き返ってこないのを確認するまでは……。

話は反れたが、つまりは情報源となるトッププレイヤー自体が減っているのだ。

あと少しで完成というこの攻略本も、初心者たちが活動範囲を広める前に配布出来るようにしなければ意味は無い。

だから、私はこの子たちに提案した。

手持ちの情報の調査を。

ここまで来れたという事は、かなり腕が立つことは解る。

更にこのお人好しさ。正直、あまりおおっぴらに顔を出せない私にとって、それは都合が良い。

私は、《ベータテスタ経験者》だ。

ベータテスターに不満を持つビギナーが多い中、それを気にしなさそうな人というのは非常にありがたい。

この四人、特に少年と茶髪の女の子　キリユウとチマと言ったか　は、かなり私の話を疑っているようだった。

それでも、あれだけ情報をさらけ出しといてだと、こちらとしては今更感ばりばりで、正直笑いが込み上げてくる。

まあ、あれだ。結局のところ、私はこの子らが気に入ったんだ。

手助けをしたい。

と思ってしまうくらいに。

そうして色々と言得して、協力という形に落ち着ける事が出来た。まだまだ信頼、とまではいかない関係だけど、まあそこは商人としての腕の見せ所。これから信用を重ねて行けば良いことだ。

「……フフ、また面白い知り合いが出来たナ」

顧客、でもないな。協力者、と言った方が正しいかな。変な関係になってしまったが、不思議と後悔はなかった。

「……さて、そういえばもう一人の変な知り合いはどうしたかな？」

私はベータテスト時代からの知り合いの事を思った。名前を見てもしやと思っただが、会ってみてお互いにはつきりとした。今頃は他のトッププレイヤーと同じく、自己強化に励んでいることだろう。

「……………よしっ」

彼らは、思惑は違えど、自分に出来る事をしている。だったら私も、自分に出来る事をしよう。

「今日も今日とテ、情報あつまめ」

私は再び、はじまりの街へと続く道を走りだした。

それから二週間と少し経った。

私たちがSAOにログインしてから一ヶ月、といったところか。

今日は第一層迷宮区、その最上階にいるボスに挑戦する日だ。

……いや、戦いは既に終わった。

ボス戦に参加していた知り合い何人かに今まさに報告を聞いていた。

どうやらベータテスト時の知り合い　あの《キリト》が大活躍をしたらしい。色々な意味で。

私はキリトに祝勝のメッセージを送ろうとフレンドリストを開いた。

「……………あ」

そして、キリトの名前のすぐ下にある名前を見て、彼らのことを忘れていたことに気付いた。

・Kirito

・Kiryu

そういえば、五日前に最後に連絡をとったとき、ボス戦が近くなったら教えると言っていたような……。

「……………にやははハ！」

とりあえず、笑っておくことにした。

まあ、今回のボス戦は色々あったようだし、あの子らを巻き込まなかったと思えば、結果オーライというやつだろう。

私は軽く謝罪のメッセージを、彼らに送った。

「さて、そろそろ転移門も開通したかな？」

私は、はじまりの街の大通りを歩いて、中央広場にある転移門へ

と向かった。

さあ、いざ第二層へ！

歩く私。その私を後ろから見ている者がいることに気付くのは、それから間もなくのことだった。

## EX1 鼠の思惑（後書き）

この作品での《アルゴ》は、原作キャラというよりも、私の勝手な解釈によるオリジナル性が強いかもしれませぬ。

二面性を持ったアルゴ。

Web版を読んだ方から見れば違和感を感じてしまつかもしれませぬ。

逆に読んでない人は、何がなんだか分からないかも……？

指摘、質問、感想ありましたら、宜しくお願い致します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2262w/>

---

SAO ~冷厳なる槍使い~

2011年12月25日00時47分発行